

## 第10章 紅河平原後期新石器時代から青銅器時代前期にかけての石器から青銅器への置換について：マンバック遺跡とダイチャック遺跡出土資料を中心に

### A はじめに

フングエン文化は青銅器使用開始時代という議論は多々あるが、その時代と同定可能な鋳型や製品はほとんどないというのが現実である。フングエン文化青銅器時代説が唱えられ、30年前後経つのである。

ここでは、筆者が参加し、層位的に遺物の脈絡付けの可能な2つの遺跡資料、マンバック（後期新石器時代前半・後半）とダイチャック（青銅器時代前期）を中心にして、マードン遺跡（後期新石器時代前半）などの若干の資料も交えながら、新石器時代から青銅器時代の石器・青銅器の利用体系の変化を考えてみたい。

### B マンバック遺跡（2001年発掘）の石器分類とその利用

#### I 遺跡概要

マンバック遺跡はニンビン省Yên Mô（イエンモー）県Yên Thành（イエンタイン）社Bạch Liên（バックリエン）村の石灰岩山塊の麓に位置している。1999年にはじめて発掘が行われた貝層を含む居住遺跡である（Hà V.P. 2001）。眼前に旧河川が埋没しているが、第2章と9章IV節で述べたように、当遺跡の文化層直下の無遺物層は海進により形成されたと考えられ、海進後の遺跡形成時には、この旧河川域は汽水域であったと考えられる。現在、遺跡は海岸線から20km以上離れているが、遺跡形成時には海岸線にかなり近く、周囲は汽水域であったことが出土貝の生息域同定（Matsushima 2004）から理解できる。

1999年3月に考古学院が第1次発掘を行い、2001年12月末から4週間ほど筆者は、当遺跡で修士論文を書くTrịnh Hoàng Hiệp君（考古学院）に要請されて、発掘の指導を行うと共に、石器の研究報告を担当した。発掘面積は24平米で文化層は1.7-18mに達した。第9章IV節で述べたように、最下層（L5-9層以下）が前期新石器、下層上部（L5-8層からL4層）が後期新石器マードン・ホアロック期（後期新石器時代前半）と考えられ、上層（L3-L1層）がフングエン期（後期新石器時代後半）と比定できる。

2001年度出土石器の構成は以下の通りである。各器種に関しての、形態的、技術的特徴や利用石材や硬度（モース硬度）の傾向を記述する。

#### II 石斧 (Fig. 137)

完成品、あるいはその破損品に関しては全て方角斧に分類可能なものである。その他に未製品、あるいはその原材料と同等可能なものがあった。

詳細な分類は以下の通りである。

方角斧A類：斧身が相対的に厚手で、幅狭なもの（Fig.137-1～7）。擦り切り技法で長側縁を分割している。暗緑色～暗灰色の石材C類を多用。

方角斧B1類：斧身が相対的に薄手で、身幅に対して身長が短かめのもの（Fig.137-8～9）。擦り切り技法で長側縁を分割している。下層では石材C類（蛇紋岩）が多用されている。

方角斧B2類：斧身が相対的に薄手で、身幅に対して身長がやや長めのもの（Fig.137-10～18）。擦り切り技法で長側縁を分割している。

方角斧C類：斧身が厚手で、身長が長い大型品（Fig.137-19～20）。刃角も大きい。このタイプのものは長側縁に調整剥離痕を多くとどめており、擦り切り技法による成形とは考えられない。

方角斧D類：斧身がかなり薄手で、平面形が長方形を呈す（Fig.137-21-23）。身幅に対して身長がやや短かめ。擦り切り技法で長側縁を分割している。白色系の軟玉石材（石材A類）を利用。

方角斧E類：斧身が相対的に薄手の小型品（Fig.137-24～28）。身幅に対して身長が長い大型品。擦り切り技法で長側縁を分割している。

### Ⅲ ブランク素材

L2-1-123（Fig.138-3）とL2-1-143（Fig.138-2）は板状の石材の側縁を中心に調整を施し、石斧ブランク整形を意図しているもの。L2-2-156（Fig.138）例は玄武岩系素材利用の大型剥片で、両面に大型剥離痕をとどめている。同じ石材で調整剥離片と考えられるもの（L2-1-157:Fig.138-4）も存在しており、この大型剥片もブランク素材と考えられる。L1-1-3（Fig.138-5）は、ブランク素材の破片を別目的に再利用しようとしているものではないだろうか。

### Ⅳ 再生剥片利用ブランク

石斧片あるいはその他の石器の破片に再調整を施し、石斧ブランク整形を意図しているもの（L3-1-108:Fig.138-6）。これも、上層部でのみ確認されている。

### Ⅴ 再利用石斧片

石斧片に再加工（研磨、調整剥離）を施して、石斧以外の石器に利用しているもの。

No.104（Fig.138-10）、No.129（Fig.138-7）は擦り切り石斧片を刃器として再利用している例である。

No.103（Fig.138-11）やNo.146（Fig.138-9）も再生の後に、再び折れたものではないだろうか。

No.7（Fig.138-12）やNo.124（Fig.138-13）は擦り切り整形の方角斧片の一侧縁を調整を施している。

No.103（Fig.138-11）も同様に側縁や切断面に再調整を施している。No.145（Fig.138-14）は方角斧A類の破片切断端面裏面に調整剥離を施している。No.7（Fig.138-12）やNo.145（Fig.138-14）は切断面あるいは調整剥離痕上に摩耗面が観察され、他の石斧の消耗程度の激しいものと同様、楔として再利用

されたと考えられる。No.100 (Fig.138-15) とNo.124 (Fig.138-13) 例は共に方角斧片の体部片あるいは刃部片の切断面や斧身面を磨きあげたものである。磨きによる再加工面 (No.100は下端部、No.124は上端部と上面) は、石斧整形のための磨きより、より細かく光沢をもつ磨き面になっており、使用によるものとも考えられるが、使用する以前にある程度の磨きにより、平坦面を作出しておかないと、磨面として機能しないであろう。後述の砥石の一類に含めた、磨面を有す石片と同機能を果たしたと考えられる。土器製作の磨きに用いた可能性もあろう。

## VI 小結

こうした石斧類の観察を通じて認識できることは以下のようなことである。

上下層を通じて、擦り切り技法により製作された石斧の比率が極めて高い。ただし、遺跡上層部のみに残された石斧製作を示す資料 (ブランクや調整剥離片) は打撃調整と敲打法のみを示しており、擦り切り技法が当遺跡で実行された可能性は非常に低い。

また、比較的厚手の石斧に、上端部が欠けていたり、再調整剥離痕や刃部が摩滅していたりするなどの現象がしばしば観察される。これは石斧として機能した後に、楔として転用されたことを示すものである。

型的には、下層部ではA類、上層部ではC類とD類が特徴的な型式で、B2類とE類は両期を通じて存在する。また、下層部 (マードン・ホアロック期) では蛇紋岩の利用が、上層部 (フングエン期) では軟玉の利用が目立つ。

## VII その他の石器類

### a 樹皮叩き棒石器

非常に硬質な白色の石材を長方形6面体に磨きだし、上下の長方面に長軸に沿った溝を数条並行に作出したものである (L4-2-115:Fig.139-2、L5-2-118:Fig.139-1)。側面全体に柄に縛り付けのためのへこみが作出されている。この凹み面は柄付けによる使用のためか、非常に平滑で光沢を帯びる程度になっている。下層部にのみ出土している。

### b 石核と剥片

チャート質あるいは軟玉質の石材を利用している。上層部のみでしか出土していない。剥片 (L2-3-153:Fig.139-9) は薄手の平坦なもので、辺縁に二次調整や使用による刃こぼれ的なものが若干観察される。石核 (L2-3-154:Fig.139-10) は原礫面を一部残すもので、多面体形に応じて、薄く平坦な剥片をはぎ取るように打撃を加えられている。しかし、その剥片生産法に規則的な連続生産を認めることはできない。

### c 砥石

形態的には3種類に分類することが可能である。

砥石A類：長い溝を有するもので、L4-2-114 (Fig.139-3)、L3-1-126 (Fig.139-4)、L2-1-151 (Fig.139-8) のように棒状のものに単独の溝をもつものや、L5-1-117 (Fig.139-7) のように溝が直交したり、旧溝部分を利用して裁断したものもある。

砥石B類：棒状砥石。細長の棒状のものに磨面を全面に作出したもの。L2-1-132 (Fig.125-6) は上端部がややすばまっている。また表主面に小さい溝がある。L3-1-139 (Fig.139-5) もやはり、上端部がすばまっている。

砥石C類：平坦な磨面を有するもの。この類が量的に最も多い。大きさや厚さにもばらつきが多い。一部は、鋭利な刃部を集中的に磨いたためであろう細い溝が走っているものがある (L4-2-116:Fig.140-6, L2-4-133:Fig.140-3, L3-1-150:Fig.140-1)。

石材に関しては主に2種類に分類することが可能である。第1種は堆積岩系の軟質かつ目が非常に細かいもので、硬度は1から3の間に納まるものがほとんどだが、L5-1-117 (Fig.139-7) のみは硬度4を示した。A類のL4-2-114 (Fig.139-3) とC類多くに使用されている。第2種は硬質で、石粒がより粗いものである。硬度は1例のみ5と6の間を示したが、残りは2から5の間に納まり、かなりが4と5の間に納まる。A類、B類、C類全てに利用されている。

#### d 磨き石

L1-2-99 (Fig.141-5) は一見、石斧と見まがうものであるが、石材や磨面のあり方から判断すると、石斧ではない。横断面形が長方形、縦断面がくさび形になるように全面を磨出している。そして、裏主面や上端面と下端面に磨きによる光沢平滑面が残されている。表主面の辺縁には打撃による剥離痕が残されている。上端部側のものは、光沢平滑面形成前のものであるが、下端のものは光沢平滑面形成後のものである。使用によるものか調整によるものかははっきりしないが、使用による打撃剥離痕形成後に、磨出により別機能の石器に作り替えた可能性もある。モース硬度が2と3の間に納まり、砥石に使われている石材の中にも同じものと考えられるものがあることから、砥石からの転用の可能性が高い。L2-2-160 (Fig.141-2) も棒状に石片を磨出し、下端面に光沢平滑面が形成されている。これらは前述のL2-1-100 (Fig.138-15) 例とL4-2-124 (Fig.138-13) 例と機能的には同じものと考えられる。おそらく土器製作時の磨きなどに、頻繁に利用された結果であろう。L1-2-161 (Fig.141-3) は円礫で磨き面をもつもの。

#### e 叩き石

叩きによる潰れを辺縁に残した円礫 (L1-2-152:Fig.140-8, L2-1-200:Fig.141-1など)。ほとんどが3層以上の上層部から出土している。硬度は5から7の間のもので3程度の2種類があった。

#### f 打製石器

L2-4-155 (Fig.141-6) は河川礫の片面の側縁に剥離を施した旧石器の小型サイド・チョッパー的なものである。L4-1-60 (Fig.141-4) も河川礫の周囲に剥離を施したものだが、前者ほど明確な刃部形成には至っていない。

g 台石

L5-9-158 (Fig.140-7) は石片のやや丸みを帯びた平坦面に叩きなどによる窪みを残している。

h 石環削り抜き残芯

管鑽法による削り抜き残芯が1例 (L2-1-120:Fig.141-7) のみ出土している。片面からの削り抜きである。石環 (腕輪) 類の製作に伴うものであろう。

i 石環

断面が隅丸方形 (L2-1-9:Fig.141-11, L2-1-13:Fig.141-10, L3-2-54:Fig.141-8) あるいは縦に長細い方形のもの (L3-1-43+51:Fig.141-9) がある。

j 管玉

細長い管状製品で、軟玉質の石材を利用している管鑽法により芯央が中空にくり抜かれている (L3-1-48:Fig.141-16, L2-2-19:Fig.141-14など)。白色の軟玉質の石材を利用しているものあり。上層部のみでの出土である。

k 玦状耳飾り

扁平な輪状製品で、一端に玦状部を有すものである。通常これは耳飾りとして使われたと考えられている。断面形はレンズ状 (L2-1-10:Fig.141-20など) のもの、あるいは外端が尖りだし、内端が方角 (L2-2-18:Fig.141-18) になっている。白色の軟玉質の石材を利用している。上層部のみでの出土である。

1 99年発掘調査からの補遺

有肩石斧が1点、下層部に相当するレベルから出土している。T字形の断面を有す石環が、上層部に相当するレベルから出土している。

XIII マンバック遺跡の石器利用について

上記の石器群観察から以下のことをまとめ出すことができる。

1 : 石斧、樹皮叩き棒、石環、管玉、玦状耳飾りなどにおいて、その形態や有無に関して、明らかな時期差を認めることができる。石斧A類などはL3-2層以下の下層部でしか確認されず、樹皮叩き棒や4層以下、有肩石斧下層でしか出土していない。石斧C類、D類はL2-3層以上でしか出土していない。

2 : 石材に関しても時期差が認められる。白色系の軟玉質石材 (石斧石材A類) はL2-2層以上、つま

り、フングエン期に限定される。また、灰色系軟玉質石材（石斧石材B類）はL4-2層からL2-3層の間、さらに、石斧石材C類（蛇紋岩）、D類は1例を除いて全てがL3-1層以下（マードン・ホアロック期）での出土である。

軟玉などを中心とする石器石材の研究をしている飯塚義之氏（私信）によれば軟玉（nephrite）より、蛇紋岩のほうが硬度などの理由により、加工が行いやすいとのことであるので、マードン・ホアロック期からフングエン期への石材加工技術の発展のひとつに挙げられるかもしれない。

3：白色系の軟玉質の石材に関しては、石斧、玦状耳飾り、石環など複数器種間の利用が認められ、遺跡での最終整形が行われている可能性もある。

4：上層部、L3-1層以上において再利用石斧片、再生剥片利用ブランク、ブランク素材などが出土している。叩き石もL3-1層以上において頻出している。従って、L3-1層から上層において石斧の再生利用活動が活発で、石斧の生産活動もあった可能性が理解できる。

## C マードン遺跡の石器群

### I 遺跡概要

ハータイ省Son Tây（ソントイ）市Dương Lâm（ドゥオンラム）社Hung Thịnh（フンティン）社に位置するマードン遺跡の石器群資料は、土器から判断するに、マードン・ホアロック期が遺跡形成の主要期間と考えられる。1m程の文化層であったとされる（Phạm L.H. 1973）。残念ながら詳しい報告が残されないまま遺跡は破壊され、考古学院にその部分的資料が残っている。マードン類型として北部後期新石器から金属器時代への移行期議論の俎上にしばしばのせられる遺跡だが、きちんとした研究が行われていない。その内容を紹介し、マンバックとの比較を行う。

### II 石斧類

#### a 部分磨製石斧

大型の河川礫を利用したもので、打撃剥離と敲打により整形している。蛤刃に近い刃部を有す。剥離痕や敲打痕を明らかに残しており、完全磨製には至っておらず、他の石斧と磨製度合いが全く異なる。後期新石器時代の石斧体系に存在し得るものではなく、マンバック最下層のように、前期新石器時代の文化層が若干あったのではないかと推定する。ダーブット文化に特徴的な部分磨製石斧レベルか、それより粗い仕上げといえる程度のものである。

#### b 方角斧

平面や断面が角張るもの（A類）、丸みを持つもの（B類）に分類できる。

A-1類：断面が角張って、上端と比べ、下端の幅が若干広いもの（MD72-H2(2) -11:Fig.142-2, MD72-M11:Fig.142-3）。最も普遍的なタイプで、擦り切り技法で製作したと考えられる。

A-2類：断面が角張り、長細いもの（MD72-H2(2) -16:Fig.142-4）。片刃で、側縁に剥離痕を磨き残し

を多く残す。

A-3類：有肩石斧を方角石斧に再生したもの（MD72-H6(1) -28:Fig.142-5）。

A-4類：剥片を擦り切って、磨き、石斧にしようとしたもの（MD72-H2(4) -88:Fig.142-6）。これは石斧の破片あるいは再生時に生じた剥片の再利用と考えられる。

B-1類：断面形は、上主面がやや膨らみを持ち、下主面が比較的平坦で、両端が不整である。上端部幅と下端部幅にはある程度の差がある（MD72-H2(2) -17:Fig.142-7）。

B-2類：断面形は角張っておらず、下端部幅が上端部幅よりかなり大きい。

MD72-H3(2) -92例（Fig.142-8）は、左側縁の磨き痕が擦り切り技法時による可能性があるが、断定はできない。右上端に再生剥離を施した後に側縁を磨いている。MD72-H4(2) -8（Fig.142-9）例は、左側縁に再生剥離が加えられている。これらは再生による上端幅を中心とした器幅減少が作り出したタイプと考える。

#### c 有肩石斧

有肩石斧も平面形や断面が角張るもの（A類）と、丸みを持つもの（B類）に分類できる。

A-1類：超大型の有肩片刃石斧（MD72-1:Fig.142-10）。石材が他の石斧類とは異なっており、また、擦り切りによる製作か否かも判断不可能。

A-2類：上端と下端の間の幅にあまり差がないもの。最も普遍的なタイプである。MD72-H2(2) -21（Fig.142-11）例は、擦り切り製作痕を肩部に残している。

A-3類：肩部の幅が相対的に非常に小さいもの（MD72-H3(5) -26:Fig.142-12）。

A-4類：肩部を斜めに作りだしたもの。もともとは角張っていた肩部を、損傷等により斜めに再生したと考えられる（MD72-H1(4) -48:Fig.142-13）。裏面に擦り切り痕を残しているため、この肩部再生自体を擦り切り技法で行ったと考えられる。

B-1類：着柄部の断面の側縁は膨らみを呈し、主体部は断面が角張った方形を呈している（MD72-H2(2) -37:Fig.143-3, MD72-H2(4) -89:Fig.142-14）。

B-2類：着柄部と主体部共に、断面の側縁が膨らみを呈すもの（MD72-H2(1) -6:Fig.143-1）。

B-3類：断面はレンズ状に膨らむが、器体全体は平坦なもの（MD72-H2(3) -86:Fig.143-2）。

#### d 有段石斧

なだらかな段部を作出しているもの（MD72-H4(1) -3:Fig.143-4）。利用石材は暗黒灰色軟玉質（おそらく蛇紋岩）のもので、マンバックでも、下層部に方角斧石材に類似石材が存在した。擦り切り技法による製作である。

#### e 有肩有段石斧

着柄部断面は上主面が膨らみを持ち、下主面は比較的直線に近い。その両端もほぼ直線に磨き出さ

れている（MD72-H4(2) -9:Fig.143-5）。肩部は、ややなめらかな小さい幅のもので、段部が作出されている。

#### f 石斧の石材・製作技法的特徴

石材に関しては、マンバックの特に下層で使われているような、石材を多く見る事ができた。また、有肩と方角タイプの間に、石材差はほとんど見られない。方角斧B-1類に属すものは全て白色の軟玉質石材（nephrite）で、硬度も7前後の最も硬質石材であった。石材の硬度に関しては5前後のものから7前後のもので、軟玉質の石材が最も硬質（6から7）で、特に方角斧B-1類の白色軟玉石材は、硬度7を示した。局部磨製石斧利用石材にも硬度6を示すものがあった。

製作技法としては、擦り切り技法が方角斧、有肩斧、有段石斧などに適用されている。ただし、方角斧B類、有肩斧B類などの、平面形、断面形に丸みを有すタイプは、擦り切り技法による製作ではない可能性が高い。また有肩斧が再生により方角斧に作り替えられている例が確認できた。

### III その他の石器類

#### a 樹皮叩き棒

MD72-H(4) -104 (Fig.143-6) 例は下端面に並行な細溝を、器体中部に凹みを作出したもので、マンバック出土例と同型式と考えられる。MD72-H1(2) -24 (Fig.143-7) 例は溝自体は前例ほど深くなく非常に浅いが、それは使用のためかもしれない。やはり器体中部に浅い溝を作出しており、縛り付けのためのものと考えられる。MD72-H1(8) -19 (Fig.143-8) 例は前2者と違い、スレート質の堆積岩を使い、下端部を鋸歯縁状に作出しており、器体中部にやはり溝を作出している。石材や器体の薄さにおいて、前2者と違うが、中部の溝などはMD72-H1(2) -24(Fig.143-7) とよく似ている。

#### b 玦状耳飾り

No.55 (Fig.143-14) は側面外形が逆水滴状で、平面形が不整な円形に近い。上端に□部作出されている。同類のものはホアロックでも報告されている。

#### c 石環

形態的に2種類に分別される。両者共に内径が4.4から5.6cm位の小型のものが主を占めるようだ。

A類：断面がT字形に近いものである。吉開（1992）が、かつてT字型石環の分類でB2類としたものである。しかしフングエン期のもののように角張ったT字形にはなっておらず、ホアロック同様突出部の作出がなめらかで、三角形の両辺にさらに磨出を加えて形作った感をうける。

B類：断面が三角形あるいはそれに近いものである。吉開（1992）が、かつてT字型石環の分類でB1類としたものである。

両型式間に技術的違いはないだろう。フングエン期のものは軟玉質の石材（例：Trang Kenh, Bai Tu 等）を使っているのに対し、当遺跡例はホアロック同様、軟玉石材利用ではない。またフングエン期



のものは、管鑽法で断面方形のドーナツ形製品を削り抜き、そこからT字形になるように、さらに管鑽法で角張った整形を行っているが、当遺跡例にそのような例は見られない。時期差を反映しているようだ。

#### d 管玉

MD72-H2(3) -75 (Fig.143-9) は管鑽法で両側から穿孔を行ったもので、石材は軟玉質のものではない。フングエン期のものと比べ、全体的に作りが粗く、管玉外面の平滑度が劣っている。

#### e 石錘

MD72-H2(3) -17 (Fig.143-10) は細長い棒状の形をしており、十字状に交差するように中央部に溝をめぐらせている。両端の先端は若干凹んでいる。

#### f 石刀

MD72-H3(8TS) -34 (Fig.143-11) は堆積岩の薄い剥片を両面で磨き、上下両端に刃部を作出したものの。両側が折れているので、全体器形が把握できない。

#### g 砥石

小型砥石類：MD72-H2(4) -92 (Fig.143-12) はバナナのような形状をしており、断面でわかるように長軸に沿って幾条も面取りされている。MD72-2 (Fig.143-13) は半月形で、弧状の刃部のようなものが作出されているが、尖りだしているわけではない。前者は硬度4、後者は硬度5を示した。

#### h マードン遺跡石器群の位置づけ

部分磨製石斧を除いて、石器群も土器群同様、マンバックやホアロックとの類似性を示している。フングエン期の石器群とは、近いレベルの製作技術（管鑽法、擦り切り技法など）を有しながらも、石材の利用のあり方、型式、最終整形の精巧さなどの点において違いを認めざるを得ない。

### D ダイチャック遺跡の石器と青銅器利用について

#### I 遺跡概要

Đại Trách（ダイチャック）遺跡は、ドゥオン川右岸のバックニン省トゥアンタイン県Định Tô（ディントー）社ダイチャック村に位置する遺跡である。90cm前後の文化層においてドンダウ期の文化層、ドンソン期の墓葬、さらには居住起源の一定量のゴームン期とドンソン期の土器片が確認された。当遺跡は1996年に筆者とPhạm Minh Huyềnが分布調査を行い、1999年の試掘を経て、2001年に60平米の発掘調査が実現できた（Phạm M. H.&Nishimura 2004）。上下2層（L1とL2）の文化層に分

けられるが、L1はさらに6レベルに、L2は3レベルに細分されている。ドンソン期の墓葬以外は、ドンダウ期の文化層が大半だが、L1-1からL1-3あたりで、ゴームン期やドンソン期の土器が若干確認される。下層部（L2-1層以下）で、青銅器鑄造関連遺構（F16, F19）が出土しているが、上層部では確認されなかった。

なお、本論は新石器時代から青銅器時代への移行期を考察対象とするため、ドンソン期の青銅器や石器は考察の対象としない。

## II 石器の分類

### a 石斧

2点のみで、共に主面、断面が方形の方角斧である（L1-5-94:Fig.144-1, L2-1-141:Fig.144-2）。両方とも擦り切り技法で製作されている。青みのある灰白色の軟玉質石材を利用している。

### b 管玉

L2-1-148（Fig.144-3）は黄色系の軟玉質の石材を利用したもので、片側側面に擦り切り痕をとどめている。

### c 石環

L2-2-166（Fig.144-4）は横断面が縦長長方形のものである。白黄色の軟玉質石材を利用している。L2-2-177（Fig.144-5）は横断面が二等辺三角形に近い形をしている。硬質で緻密な石材を利用している。

### d 石環剥り抜き残芯

片面から管鑽法を施したもの（L2-1-138:Fig.144-7）、両面から管鑽法を施したもの（L1-3-4:Fig.144-6）両方がある。両例とも黄色系の軟玉石材である。

### e 垂飾

L2-2-156（Fig.144-10）は水滴を逆位にしたような形をしており、上端に穿孔がされていた。黄色系軟玉質石材を利用している。L1-4-76（Fig.144-11）は、白灰色の軟玉質石材を使った長方形の板状のもので、3カ所両面から穿孔されている。

### f 軟玉素材

F13-250（Fig.144-8）は、長方形をしており、両長軸側縁に擦り切り痕をとどめている。F16-251（Fig.144-9）は両主面が磨面であるが、それ以外は全て打撃による剥離面である。側面を中心に周辺部が被熱により黄色化している。両例とも、もともと白色系軟玉系石材だが、良質な軟玉石材として利用できる部分は極めて少なく、石材としては利用尽くした感が強い。

## g 砥石

A類：溝砥石。厚手の石片に磨面を作出し、そこに断面の丸い溝を作出している（L1-6-104:Fig.145-1, L1-3-254:Fig.145-2）。

B類：薄片状砥石。薄くて小さいもの。両面が磨面として使える（L2-3-258:Fig.145-3）。下層部のみでの出土。当類はTràng Kênh(チャンケン)などの、軟玉石器製作址でも確認される小型砥石と類似している。

C類：盤状砥石。大半がこの種類に属すが、磨面を平坦面に作出したものである。

大きさなどにもばらつきがあり、大型品はL1-3-51（Fig.145-7）のようなものから、L1-3-60（Fig.145-4）やL1-3-252（Fig.145-5）のように、小型で軟質な石材を利用しているものまである。L1-3-51(Fig.145-7)、L1-3-60(Fig.145-4)は鋭い刃物を研いだ跡が残っている。金属器利器に使用したのであろう。ただしこうした明瞭な刃物を研いだ跡は、上層部（L1-4以上）で多く確認された。下層部では同様な石材はあるものの、研ぎ跡がそれほど明瞭に残っていない。さらに、堆積岩利用の砥石は、使い込まれて磨面が凹んだものものも多く、また上層部での出土例が多い。ドンダウ期以降の砥石の混在も考えておくべきである。

このような差が生じる別の可能性として、遺跡（場）の機能差がある。下層部ではF19、F16などの青銅器鑄造関係の遺構が確認されているが、上層では居住痕跡しか確認されていない。遺跡内の活動差を反映している可能性があるだろう。

D類：L1-3-255（Fig.145-10）は、円盤状の砥石あるいは磨き石であろう。両面共に非常に平滑で、側縁には縦方向の磨り跡が観察できる。

石材に関しても5種類の差異を認めることができた。比較的目が細かく灰色系の石材（硬度5と6の間）が砥石B類に使われている。褐色の石材で現代の砥石にも見えそうな比較的目の細かい石材（硬度5）は砥石A類とC類に使われている。明らかに堆積岩とわかる暗灰色軟質石材はC類（硬度3と4の間）に利用されている。また最も多い硬質な白色系の石材（硬度5と7の間）も砥石C類に利用されている。砥石D類はえんじ色の非常に硬質な石材（硬度7）。

## h 磨き石

L2-3-192（Fig.146-1）は円礫の下端部に磨り跡を明瞭に残している。L2-3-212（Fig.146-5）は不均衡な方形を呈し、下端部が使用のためか光沢を帯びるほど平滑になっている。灰色の軟質石材を利用しているが、主面辺縁に擦り切りによる切断痕が残っており、石戈のようなものの破片を再利用している可能性が高い。マンバック出土例のように磨き石として使われた可能性も否定できない。

F8-16(Fig.146-3)はドンソン墓からの出土だが、両主面に磨き痕が残されている。

## i 叩き石

河川礫の端部や央部に潰れを有すもの。叩き石として使われたと考えられるが、硬度は5から7の間

に納まる硬質のものと、硬度が2から3の間に納まる軟質なものがある。F10-2(Fig.146-8)は、硬度2から3の間に納まる軟質なもので、礫中央部と上端部に細かい潰れを有し、下端部に打撃に伴う剥離痕と潰れがある。また中央部には金属刃器を研いだような研磨痕も残されている。叩き石、台石、刃部研ぎ出しの3つの機能を果たしたと考えられる。L2-1-211 (Fig.146-9)は両端に叩きによる潰れ、主面中央に台石利用から生じる潰れが観察される。

叩き石は下層部での出土が多く、石器のみならず、青銅器鑄造関連の作業にも使われている可能性がある。

#### j 剥離痕・打撃痕を有する石

A類：L2-2-253 (Fig.146-7)は長い珪岩質河川礫の長側縁に打撃剥離を加えたものである。硬度は7である。一見、旧石器・ホアビニアン時代のサイドチョッパーに見えるが、鋭い刃部形成には至っていない。辺縁を中心に打撃による潰れが目立つが、叩き石に頻出する細かい潰れではなく、それほど頻繁な打撃を受けたわけではなかろう。火打ち石として使用したのではないかと考える。

B類：L1-5-257 (Fig.146-11)は河川礫を裁断し、やや厚みのある扁平な礫片を作出している。上面下端に使用かあるいは作為の打撃剥離痕が集中している。礫下端部から側縁にかけ繰り返し形成された打撃痕や潰れが集中している。L1-4-72 (Fig.146-10)も同様に河川礫を扁平に裁断している。片方の主面は使用による磨れのためか剥離面が摩滅している。そして、その後、打撃剥離が辺縁に加えられている。この器種に関しては打撃を加えるものか、あるいは加えられる対象であったか、両方の見地から検討する必要がある。

### Ⅲ 青銅器、鋳型、るつぼ

#### a 青銅器

##### 1 釣り針

L1-4-84 (Fig.147-1)はやや大きめのかえりを持つもので、横断面は扁平な方形である。L1-3-58 (Fig.147-2)は基部が一回転しており、先端にかえりを作って鈎部としている。横断面は隅丸方形。L1-3-53 (Fig.147-3)は曲がりの弱い小さい鈎部をもつ。横断面は円形である。

##### 2 袋状錠頭

この器種には二つの下位分類が可能である。

A類：L1-2-33 (Fig.147-4)は横断面が楕円形の袋状の形をしており、下端部は他部より厚みを持つように作られ、叩かれて潰れている。L1-2-158 (Fig.147-5)も袋状を呈しているが、横断面が隅丸方形に近い楕円形で、下部が上部に比べややすぼまっている。片面の上端部はやや厚みを持つように作られ、帯状に段をなしている。下端部は厚みを持つように作られているが、叩きによる潰れはない。L1-2-2 (Fig.147-6)も上部がやや膨らみを持つように作られている。叩きのためか下端部が少し膨れている。

**B類**：L2-1-140 (Fig.147-7) はA類に比べ長めのもので、下端部がより細長く、その厚みも器体長の半分ほどを占めている。

### 3 扁平筒状製品

L1-2-22 (Fig.147-8) は、袋状鋤頭と形態的に類似しているが、中空で下端部が閉じていない。また下端部両面に小さいえぐりがある。

### 4 針状製品

L1-4-90 (Fig.147-9) は上端部が1回転するように曲げられ、先端が尖り出している。断面は正方形である。L1-3-62 (Fig.147-10) は、一長側面に細く溝が走るようになっており、横断面が凹字状になっている。

### 5 鋸歯状刺突具

L1-5-98 (Fig.147-11) は基部破損のため、全体形はわからないが、先端部は横断面が扁平円形で、両側縁に鋸歯状になっている。

### 6 輪状製品

L2-1-139 (Fig.147-12) は横断面が縦長の方形で、隅丸方形になるように折り曲げてある。

### 7 矢鏃

L1-3-63 (Fig.147-13) は鏃部にかえりがあるもので、茎部がの断面が円形に近いものである。  
L1-4-85 (Fig.147-14) は、鏃部の中央に稜線が走り、断面が菱形に近いレンズ状である。茎部は折れている。

### 8 錐状製品

L1-2-9 (Fig.147-15) は、上端部の端が中空になっており、先端が釘の先端のように尖り出しているものである。横断面は円形。L1-5-260 (Fig.147-16) とL2-2-161 (Fig.147-17) は共に横断面が正方形だが、Fig.147-17は器体が曲がっており、両端が欠損しているため、別器種である可能性もある。

### 9 ヤス状刺突具

L1-3-44 (Fig.147-18) は、基部が中空になっており、先端部は実芯である。固定具装着のための方形坑が対照になるように基部に位置している。横断面は円形で、先端は尖りだしていたと考えられる。中空部に木質遺存体が若干残っていたので、柄付けをしていたことは確実である。L2-2-175 (Fig.147-19) もL1-3-44 (Fig.147-18) と同様の形状をしているが、より小型で、装着のための穴も一つ

しかない。

## 10 方形刃器

L1-6-114 (Fig.147-20) は、平面形が縦長方形で、横断面が扁平な台形をしている。下端部と両側縁部は尖り出しており、刃器として機能したのであろう。

L1-4-71 (Fig.147-21) 、同じく平面形が細長だが、片方の長側縁にしか刃部が作出されていない。刃部作出側が若干内湾している。

## 11 長靴形刃器

L1-4-73 (Fig.147-22) は、L1-6-114 (Fig.147-20) に近い形態・機能が有すと考えられるものであるが、下端部が裾拡がり、平面形が長靴に近い形をしている。上面下端部には5条の浮文が三角をなすように施されている。

## 12 くちばし形刃器

L2-1-195 (Fig.147-24) は、縦断面形が半月形で、平面形が鳥の嘴のような形をしている。湾曲度の大きい下側縁のほうが、鋭利に尖りだしている。L1-3-218 (Fig.147-23) は、この器種の先端部片と考えられる。

## 13 形態不明製品

L1-3-11 (Fig.147-25) やL2-2-219 (Fig.147-26) は、細長い板状の形をしているが、欠損部もあり、形態、機能が不明なものである。L1-2-37 (Fig.147-27) は横断面が半月状だが、表面側は3面で構成されるため角張っている。平面形は長方形に近かったと考えられる。特に刃部が作出されているわけではない。

### b 石製鋳型

石材は目の細かい砂岩で、分割式の鋳型である。鋳造面は鋳銅との接触で変色している。下層部に集中して出土しているのが特徴である。L2-3-256 (Fig.147-30) は、袋状鋳頭の鋳型である。L2-2-168 (Fig.147-28) は返しの付いた鋳頭の鋳型である。L2-3-197 (Fig.147-29) の凹面は湯口の部分であろうか、かなり黒色化している。L2-2-168(Fig.147-28) とL2-3-197(Fig.147-29) は側面に合范のための印である溝が残されている。

また、L1-2層で土製の鋳型片らしきものが1点出土しているが、現在まで、ドンダウ期の土製鋳型は報告されておらず、墓葬に並行するドンソン段階のものの可能性があることから、本論では論述しなかった。

### c るつぽ片

L1-5-204 (Fig.147-33) は、半球状のるつぼの口縁部と考えられる。内面に溶銅などに伴うカラミなどが付着し硬化面になっている。胎土は泥質で、最外面が砂含みの層になっている。L2-2-202 (Fig.147-32) は砂粒含みの胎土で、部位は不明であるが、内面に細かい砂質土を3ミリ程度塗ってある層が残っている。L1-6-259 (Fig.147-31) は、内面に青銅のカラミのようなものが付着している。外面は激しい被熱で硬化・変色している。

#### d ダイチャック遺跡の石器と青銅器利用について

まず、石器に関しては軟玉系石材の石器を磨製石器・石製品として多用していることである。白色系の軟玉石材を遺跡に持ち込んで、加工していることは、それを利用した石器製作活動があった可能性を示している。製作技術については、打撃法以外に、擦り切り技法や管鑽法も存在している。また、こうした軟玉石材石器が下層部で多く出土しており、DT-251例 (Fig.144-9) などは鑄造関連遺構F16の中から出土している。鑄造関連遺構の対象は青銅器のみと、今まで思いこんでいたが、軟玉石材は明瞭に火を受けた跡が残されており、軟玉石材の被熱加工もこうした遺構で行われた作業として、想定すべきなのかもしれない。今後課題として、青銅器製作（鑄造その他）に用いられる石器、石器製作に用いられる石器を明らかにする必要がある。

青銅器については最下層で青銅器や鑄型、るつぼ片、さらには鑄造関連の遺溝と考えられるものが出土しており、石器製作や利用と並行して青銅器製作やその利用が行われていたことが理解できる。また、こうした出土遺構や遺物から判断すると、ドンダウ段階の青銅器鑄造は既に、ある程度の完成されたものであることが理解でき、青銅器鑄造初現段階と呼べるようなものではないと判断され、技術の導入・移転による可能性が高い。

#### E ゴームン遺跡の石斧

ゴームン遺跡はゴームン期とドンソン期の複合遺跡だが、考古学院所蔵資料には5点の石斧が含まれている。うち2点が大型の方角斧 (GM65-H1C8-L3:Fig.147-37, GM65-H2018-L5:Fig.147-34) で、フート省の生産遺跡で使われているような石材を利用している。1点のみ軟玉質の石材を使った擦り切り技法による中型サイズの方角斧 (GM68:Fig.147-36) があり、残り2点 (GM65-H1B-L4:Fig.147-35、GM65-H1D8-1:Fig.147-38) は風化の激しい石材であったが、うち1点は有肩石斧である。鑿型石斧などに分類可能な、小型で細身の石斧類はなかった。

#### F マンバック遺跡とダイチャック遺跡の比較

ダイチャック遺跡の石斧は比較的大型の石斧であり、マンバックなどの後期新石器時代の石斧と比べると、サイズや形態にバリエーションが少ない。その代わりに、刃器などの青銅器の利器群が役割を果たしたと考えられ、石器から青銅器への置換を読みとることができる。この置換は石斧の再利用にも具現されている。マンバックでは石斧片などの再生利用、つまり石斧への再生利用、他器種（磨

き石や楔)への再利用を頻繁に確認できるが、ダイチャックでは石斧片の出土もなければ、石斧片の再利用例も出土していない。これは青銅器の利用開始により、マンバックほど石器類を大事に使い込む現象がなくなったことを意味している。

この違いは、砥石類の変化からも理解できる。つまり、マンバックでは硬度が1から3に納まる軟質なもの、硬度が4から5の間に納まる硬質なものを中心であった。細長い石や扁平な板石に溝を作出したA類、棒状石片に凸面的磨面を作出したB類などが、特徴的に存在する。

しかし、ダイチャックでは、マンバックB類相当の砥石は存在しないし、A類に関しても大型品に溝を作出しているものはあるが、小型品は存在しない。また鋭い金属刃器を研いだような跡を持つ砥石が確認できるのもダイチャックの特徴である。また、やや硬質な石材(硬度5-7)の砥石は金属利器に対応したものであろう。逆に、マンバックの砥石の一部にみられる浅い条痕が、ダイチャックの砥石群ではほとんどみられなかったが、これは石斧類の刃部再生時の磨痕と解釈すれば、なぜマンバックに存在し、ダイチャックにないかが理解できる。

マンバックの中期段階と時期的に重なるゴーマードンも、考古学院所蔵の砥石においてはマンバックと同様な石材を利用している。

石器製作技術においては、ダイチャックの軟玉石器の製作技術は擦り切り技法や管鑽法であり、マンバックなどの後期新石器時代の技術を継承している。

## G 紅河平原先史におけるマンバック遺跡とダイチャック遺跡の石器・青銅器群の位置づけ

### I 方角斧と有肩石斧の問題

後期新石器時代の諸遺跡における方角斧と有肩石斧の比率の違いも未解決の問題である。石斧量における有肩石斧の比率は、ホアロック期を確実に含む各遺跡間においてすら異なっている。Mai Pha (マイファー: 7.1%, Bùi V.&Nguyễn C. 1997)、マードン (60.3%, Phạm L.H. 1973)、マンバック (1999年調査は1.4%: Hà V.P. et al. 1999、2001年調査は0%: Nishimura 2003b)、ホアロック (2.3%, Pham V.K.&Quang V.C. 1977)、Bãi Bền (バイベン: 53.6%, Nguyễn K.D. 2001) となり、マードンとバイベンの比率がずば抜けて高い。また、ホアロック類型との近似性を指摘されるハティン省のThạch Lạc (タックラック)でも37%の高率である。概してハロン類型の諸遺跡やゲアン省やハティン省の後期新石器では有肩石斧の比率が高く、紅河平原やタインホア平原部との違いを見せている。このことに注目し、Hà Văn Tấn (1991)は紅河平原やタインホアを抛り所とし、キン族の祖先となるオーストロアジア語族系と中部ヴェトナムを抛り所とし、チャム系集団の祖先となるオーストロアジア語族集団の言語集団差にその違いを求めた。ハロン類型の場合、北接する広西・広東・香港の新石器諸類型と関係が深く、有肩有段や有肩石斧の形態的類似性もそちらに求めうる。また、Hà Văn Tấnの説を認めるなら、香港から広西にかけての有肩石斧卓越地帯もオーストロネシア語族の故地の一つに挙げなくてはならない。

こうした仮説の可能性を筆者は否定はしない。しかし、これらの議論の根底は現在の語族分布と過去の遺物分布を結びつけるもので、かつてHeine-Geldernが行った方法論となんら変わるところはない。



ここでは、そうした議論を進める前に行うべき、製作技法と石斧形態の関係について、少し議論しておきたい。

マンバックでは99年調査で有肩石斧唯一例が、最下層部（第7レベル）から出土しているが、この出土レベルは2次調査の結果より、ホアロック・マードン期と考えてよい。当遺跡の石斧群は、厚手のC類石斧以外とフングエン期の石斧ブランクや再利用ブランク以外は、擦り切り技法による製作である。この擦り切り技法適用比率の高さはホアロック遺跡でも同様のようである。

マードンの石斧群の中には確かに、マンバック下層にある方角斧（A-1類）が存在し、土器と共に両遺跡間の時期的重なりを示している。しかし、有肩石斧の比率、有肩有段石斧の存在など、マンバック下層やホアロックとの非常に大きな違いも存在する。有肩石斧に関しては整形の角張ったA類に関しては擦り切り技法の存在が指摘できるが、肩部が緩やかなカーブを描くB類は、擦り切り技法での製作はあり得ない。また、有段石斧や方角斧A類は明らかに擦り切り技法を用いており、その中には軟玉系石材もある。また方角斧B類に関しては、残された磨痕には積極的に擦り切り技法適用を確定させるものがない。ただし、軟玉質の石材もB類に存在する。

バイベンが所属するハロン文化は、土器から見ると、マードン・ホアロック期並行と判断される（10章参考）。当遺跡では有肩石斧類は玄武岩や輝緑岩系の硬質な石材であり、方角斧類にもその石材が存在する。こうした石材はハロン湾では、ハロン文化以前から使用されているが、基本的に擦り切り技法が適用されない石材のようである。また肩部の作り出しが、曲線状の緩やかなものが多く、擦り切り技法適用には適していない。チャンケンと同じような軟玉質の石材が小型方角斧（鑿型石斧）に利用されているので、小型方角石斧に関する限り、擦り切り技法の存在の可能性がある。同じく、ハロン文化のバーヴン遺跡（クアンニン省：11章参考）でも、肩部の作り出しの曲線状の有肩石斧が多く、若干例の肩部が角張った有肩石斧以外は、擦り切り技法適用例は見られなかった（筆者クアンニン省博物館実見資料）。従って、マードン・ホアロック期に並行するハロン文化の石斧群は有肩石斧、有肩有段石斧の比率が高く、擦り切り技法適用比率が低いと判断される。

従って、上述の傾向をまとめると、マードン・ホアロック期において、有肩石斧の比率と擦り切り技法適用率は、ある程度反比例的な相関関係にあることを認識できる。また、紅河平原のフングエン期の石斧群の場合は、Bãi Mèn（バイメン：Hoàng V.K. 2002）、Đồng Đậu（ドンダウ）、Thành Dền（タインゼン：Bùi V.L.&Phạm Q.Q.1991）等などは、限られた資料実見の限りでは、擦り切り技法による方角斧がかなりを占めるであろうと推定される。従って、有肩石斧比率が非常に低い、逆に方角斧への擦り切り技法適用比率は非常に高いと理解できる。

ただし、有肩石斧が比率の高い遺跡と低い遺跡が明確な分域をなしているわけではないようだ。また、マードンでは擦り切り技法で有肩石斧を製作している例が多くあり、ホアロックでは、身の薄い有肩石斧が多く出土している特異な現象もある。

現在、紅河平原と南隣のタインホア省ではいくつかの石斧製作関係の遺跡が確認されている。その中でTràng Kênh（チャンケン）、Bãi Trú（バイトゥ）は共に、擦り切り技法による軟玉系石材の方角斧生産が行われている（Nguyễn K.D.1996）。また、フート省のDoan Thượng（ドアントゥオン）をはじめ、Tam Nông（タンノン）県、Thanh Thủy（タイントゥイ）県の各生産遺跡では、Spilite（玄武岩の一種か？）などを使って、打撃剥離と敲打法で生産が行われている。タインホア省のĐông Sơn（ドン

ソン) 県のĐông Khôi (ドンコイ)、Thiệu Yên (ティウ) 県のNúi Nương (ヌイヌオン) などでも、Spiliteなどを利用して、打撃、敲打法による石斧ブランクが、製作されている。またハティン省のRu Dau (ズーザウ : Hà V.T. 1976) でも、打撃、敲打法による石斧生産が確認されている。ひとつ特筆すべきはこれらの生産遺跡では、有肩石斧の未製品がまだ報告されていないことである。

この問題に関しては以下の可能性を想定する必要がある。

一つは、これらの生産遺跡が有肩石斧率の低いフングエン期所属の場合である。チャンケン、バイトゥに関しては、その通りだが、ズーザウに関してはタックラックなどとの並行関係が確認されており、マードン・ホアロック期のものも含まれていると判断され、この可能性のみでの解決は難しい。次は、有肩石斧の場合、肩部を一定のブランク成形後に作出している場合である。これに関しては、それぞれの石斧生産過程を追跡しなければ、明言はできない。しかし、有肩と非有肩間に石材上の作りわけがなければ、その可能性は否定はできない。この場合、石斧製作址から伴出後に、意匠に応じて有肩部作出・不作出が選択された可能性もあるということになる。擦り切り技法の場合、方角斧状に成形後に肩部を作出したと考えられるが、上記の場合は打撃・敲打法製作も含まれているから、今後注意を要す視点である。

以上の認識・問題をまとめると以下のようなだろう。

マードン・ホアロック期においては一般的に有肩石斧、有肩有段石斧、有段石斧などの比率が高いが、マンバックやホアロックのように、有肩比率が非常に低い遺跡もある。この比率関係は擦り切り技法適用率に反比例するようだ。そして、またマードンの事例で観察されたように、再利用により有肩斧が方角斧に作り替えられている例もあることから、使い込みが進めば有肩比率が低くなる可能性もある。マンバックでの石斧類の使い込み度は、このことを反映しているのかもしれない。おそらく、この問題は、石材入手条件、製作址からの距離、石斧機能といった複合的視点で考えていく必要があるが、石斧のリダクション・ライフサイクルが、深く関係していることは間違いない。

フングエン期においては軟玉 (nephrite) 石材の石斧が多用されるが、それは擦り切り技法の方角斧で代表されている。これは加工が難しく、なおかつ貴重石材であることを考えれば、形態的にも製作技法的にも合理的であると言える。軟玉 (nephrite) 石材の原産地は未だ確認されていないが、石灰岩岩塊周辺の変成岩に形成されるものなので、石灰岩地帯周辺にあることになり、紅河平原においては辺縁の山岳地域にしかない石材となる。当然、平原内の石材供給においては石材の効率的利用法が存在しておかしくない。ただ、有肩石斧比率がマードン・ホアロック期からフングエン期にかけて、激減することは、このような軟玉石材の効率的利用と供給のみでは説明できない部分もある。この点については南部と北部で問題を同じにしているわけだが (Nishimura 2002a, Nishimura et al. in press)、石斧の機能差なども踏まえて考えていく必要がある。

## II 青銅器生産遺跡としてのダイチャック

ダイチャックの場合、発掘総面積60㎡に対して、ドンダウ期に限定できそうな、合計13点の石製鋳型と60点の青銅器が出土している。この量は同時期の他遺跡に比べ、やや突出した量である。ドンダウ文化の指標遺跡となったドンダウ遺跡の場合、出土遺物量が把握可能な1965年、1968年 (Le

X.D.&Hoàng X.C. 1983) と1999年 (Ngô T.P.&Nguyễn M.T. 2002) の調査を併せて、計571m<sup>2</sup>の面積に対して、鑄型8点、青銅器251点の出土である。タインゼン (Hà V.T.et al. 1985, Bùi V.L.&Phạm Q.Q.1991,Hà V.P.1998) の場合、発掘面積146m<sup>2</sup> (1983年、1984年、1996年の総計) において、鑄型50点、青銅器88点の出土である。タインゼンは北部ヴェトナムにおいて、最も石製鑄型の出土量の多い遺跡であったが、面積あたりの鑄型や青銅器の出土量では、ダイチャックもそれに匹敵するような遺跡であることが理解できる。さらに、各遺跡との比較をしてみよう。

ドンダウ、タインゼン共に、最下層がフングエン期の文化層があり、その時期の石斧は比較から差し引かねばならないが、深度単位の発掘のため、フングエン期とそれ以降の区別を行うことができない。タインゼンの96年発掘地点 (1-11レベル) では、鑄型は第10レベルから第2レベルにかけて4例出土し、青銅器は第11レベルから、1点出土しているが、残り23点は全て第7レベル以上からである。石斧は33点のうち、第11から8レベルまでで、21例出土し、残り9例が第7レベル以上である。特に、下層部では方角斧が多く出土していることと、鑿とされる小型の片刃石斧が下層部に集中していることが認識できる。84年発掘地点では、鑄型8例、青銅器19例が出土しているが、青銅器が確実に出土した第4レベル以上において、石斧は8例出土しているが、第5,6レベルにおいては14例出土しており、後期新石器のフングエン段階からドンダウ以降の金属器時代にかけて、石斧利用において明らかな減少があったことが推定される。そのなかで、方角石斧は下層部 (第5,6レベル) に集中していることが理解できるし、鑿とされる小型石斧も第3レベルで1点しか出土していない。83年発掘地点では鑄型38片、青銅器30例に対して、総数13例の石斧が出土している。フングエン期とそれ以降の区別ができる情報は無いが、ドンダウ期以降の石斧の数はもっと少ないはずだ。

ドンダウ遺跡の場合、タインゼンの84年、96年ほど明確な変化は読みとれないが、それでも方角斧、小型石斧共に、中・上層部で明らかな減少が看取される。

バックザン省のĐông Lâm(ドンラム) 遺跡 (Trịnh S. et al. 2003) は、ドンダウ期・ゴームン期の居住が確認されているが、ここでは100m<sup>2</sup>の発掘に対して、6例の石斧、1例の鑄型、44例の青銅器が出土している。石斧には鑿とされるような小型石斧は含まれていないようだ。

### III まとめ

以上より、筆者はドンダウ期ではじめて、石器から青銅器への置換が始まったと理解する。もちろんこの置換は石斧類の中でも小型石斧類使用の極端な減少に具体的に現れているし、砥石の変化も石器から金属器の利器への置換を示している。従って、石器から青銅器への置換や砥石の変化のないフングエン段階はまだ後期新石器時代と考えるべきである。

さて、ドンダウ段階が青銅器時代の始まりとするなら、他地域との比較で興味深い問題が生じる。前述したようにドンダウ段階では中・大型石斧に代わる青銅斧は存在しない。しかし、現在までの資料を拠り所とするなら、メコン河流域の南部ヴェトナム (Nishimura 2005a)、タイ (Higham 1996)、さらには雲南西部は青銅器時代初期から青銅斧が存在する可能性が高い。一方、北東隣の広西では南寧市元龍坡 (広西文物工作隊他1988) でも、青銅器と石斧 (軟玉の鑿型石斧) の共存が確認でき、北部ヴェトナム同様な状況があったと考えられる。

この原因は何であろうか？一つには、北部ヴェトナムには後期新石器時代以降、初期鉄器時代のド

ンソン期まで、軟玉質の硬質な石材を擦り切り技法、あるいは管鑽法などで連綿と石器や石環、管玉類を製作する伝統が存在する。非軟玉石材においても、フート省の諸生産遺跡のように、石斧と石環などを同所、同石材で製作している例がある。こうした石材利用システムがあればこそ、石斧も青銅器時代以降も、一定期間存続できたのであろう。

南部ヴェトナムにはこうした硬質な石材を、擦り切り技法あるいは管鑽法で石斧・石環・管玉などに利用する体系は存在しない。ドンダウ段階の青銅器鑄造技術は、やや大型とはいえ、分割式鑄型で斧を作るには十分な能力を備えている。青銅斧を製作できなかったと考えるよりは、石斧を青銅斧に優先させる考えが存在したと考えた方がよい。それが、石斧入手が青銅斧入手に比べコストが高いからそうさせたのか、玉質石材などへのこだわりがそうさせたのかは、今後の追求すべき問題だが、筆者は両方の可能性が高いと考える。ヴェトナムの場合、こうした玉質石材の擦り切り技法、あるいは管鑽法による製作・利用システムは北部ヴェトナムと中部ヴェトナムの北部域一部（Phạm T.N. 2000）に限られるようだ。

## 第11章 メコン・ドンナイ川平原域における重層マウンド遺跡とその土器群に関する考察

### A はじめに

東南アジア大陸部には、小さい独立丘のように見える遺跡が数多く分布する。この外見的特徴と長期間にわたり形成された文化層から、重層マウンド遺跡 (Mound site with deep stratigraphy) と筆者は呼んでいる (例: 西村1994, Nishimura 2002a, 2003a)。

東南アジアの重層マウンド遺跡を調査した例はタイのBan Kao (バンカオ: Sorensen & Hatting 1967)、Khok Charoen (コックチャロエン: Watson & Loofs-wissowa 1967)、Ban Chiang (バンチェン) などが早い例であろうが、いずれも重層マウンド遺跡としての地形的特徴を発掘時に特に注視した形跡はない。ヴェトナム紅河平原のドンダウ遺跡も、3つのマウンドを合わせると面積が86000m<sup>2</sup>に及び、文化層が5mを越える巨大重層マウンド遺跡だが、発掘でもその厚い文化層の形成理由を考えてはいない (Le X.D. & Hoang X.C. 1983)。重層マウンド遺跡が盛り土によって形成されたと考えたのは、東北タイのNon Yang (ノンヤン) 遺跡を調査した新田 (Nitta 1991) が最初であろう。

重層マウンド遺跡で土器焼成を最初に同定したのはVincent (1984, 2004, Higham et al. 1987) であろう。東北タイのバンナディ (Ban Na Di) やチャオブラヤ平原東部のコックパノムディ (Khok Phanom Di) での土器とその胎土分析や遺跡周囲の鉱物学的環境の考察、さらに土器の叩き製作に使うアンヴィル (あて具) や磨き石の出土などから、遺跡での土器の生産を同定している。いずれも文化層がそれぞれ、5m、6.8mにも達した大型重層マウンド遺跡で、後者は重層マウンド直径が200mを越える。多量の灰レンズ層や粘土塊の出土を土器製作に結びつけてはいるものの、遺跡内で確認された考古学的現象や遺構と土器製作を結びつける考察が弱いことが残念である。

また、これらの遺跡発掘の組織をしたハイアム (Higham & Kijngam 1984, Higham 1989) は、バンナディの調査で生活廃棄物や洪水形成層などを厚い文化層の形成理由と考えているようだ。コックパノムディでは、構築物のようなものに伴う張り床層的存在を認めながらも、分厚い文化層自体は居住や土器製作に伴う廃棄物による形成と考えているようだ。

ところで、筆者は先行研究において、南部ヴェトナムのヴァムコー川とドンナイ川流域の先史時代 (新石器時代から鉄器時代) の土器編年を詳述した (Nishimura 2002a)。しかし、その土器群 (土器アセンブリッジ) の性質を遺跡との関わりで詳しく述べることは行わなかった。本章では、筆者が調査した遺跡を中心に、文化層の性格や土器群の構成比の問題を述べ、重層マウンド遺跡との関係を考察してみたい。

### B アンソン遺跡の研究

アンソン遺跡 (Long An省Đức Hòa県) 遺跡は、行政上ロンアン (Long An) 省ドゥックホア (Đức

Hòa) 県アンニンタイ (An Ninh Tây) 社に位置し、ヴァムコードン川左岸の自然堤防上に位置した重層マウンド遺跡である。いる。西北500mのところにロックザン遺跡が位置している。重層マウンドは遺物分布をもとに判断すると重層マウンドは長軸が東西に、短軸が南北に沿ったもので、不均整な台形を呈している (Fig.148)。長軸は約170m、短軸は西側で約100m、東側で約50mを計る。周囲水田との比高差は6 mに及ぶから、最大文化層厚 (4.5m) を差し引くと、地山層は1.5m程度の高さをもった微高地であったことがわかり、地山層は砂層であるから、この微高地はVàm Cỏ Đông川が形成した自然堤防であると考えてよい。

筆者らの1997年の発掘 (Fig. 148のPit 1) では重層マウンドの西端で4 m近い文化層が確認された (Nishimura&Nguyễn K.D. 2002)。また、1978年の発掘ではマウンドの中央部で4.2-4.5m厚の文化層が確認されている (Lê X.D.1978)。筆者の編年案 (第6章) では、新石器第1期 (AS I期) から第4期 (ASIV期) まで存続した居住期間の長い遺跡で、1000年程度の遺跡形成期間を想定している (Nishimura 2002a)。

当遺跡の文化層は非常に独特の堆積層を観察することができた (Nishimura&Nguyễn K.D. 2002)。L3-5層からL3-1層まで砂質土が主の文化層であるが、L3-5層 (ASI期) は上層部分が無遺物に近い堆積で、下層部でのみ遺物がまとまって出土した。従って、L3-5層とL3-4層 (ASIII期初頭) 間には、間層が存在したと推定される。

最上層 (L1-1層からL2-2層) は、後世の攪乱のため、原堆積層が確認されなかったが、L2-3層からL2-21b層 (ASII期からI期) にかけては、セクション図 (Fig.152, Pl.9,10) に表されているように、非常に特異な層堆積が確認されている。つまり、赤褐色や黄褐色の硬化土層や灰白色の粘質硬化土層と灰や炭化物を多く含む黒色・黒褐色・暗褐色あるいは褐色の締まりの悪い層が交互に折り重なるように堆積していた。赤褐色や黄色の硬化土層は単に火を受けて焼き固まった土層ではない。なぜなら純粋に被熱によるものなら硬化面や赤化面はその層の最上面で確認されるべきだが、これらの層は一定の厚みをもって確認され、特に層の上面で被熱色が濃いわけでもない。土層中には被熱した土や炭化物、土塊、骨などの食糧残滓などが小片になって混じり合ったもので、人為的な配合なしにはあり得ないものである。また、移植ごてが簡単には入らないほどの層のしまり具合やその層をはがしていく最中に、さらに薄い層に分かれて層がはぎ取ることができたことなどから、配合した土を薄い層にして叩き締めるようにして、何枚も重ねて硬化土層を形成したと考えている。

また、暗褐色あるいは灰黒色の締まりの悪い層では灰や炭化物以外に、土器片、貝、焼土塊などのいわゆる遺物が多く含まれている。こうした堆積の基本特性は南部ヴェトナムの重層マウンド遺跡では、どこでも確認できることのようなのだ。

全層を通じて、焼土塊片 (Fig.155) が非常に多く出土し、総数1万個強、総重量250kg強に及んでいる。特に第3期の文化層では溝状炉址 (Ditch-like hearth place: Fig.151) と呼ぶ、貝や炭化物、土器片が多く混じる遺構が各層ごとに、徐々に形を変えながら確認されたが、この炉址の中で、まるでデポのように集中して確認された例があった。この焼土塊はいくつかのタイプに分かれる。量的に圧倒するのが、3cm-15cm前後の塊で、褐色で胎質は砂を含み、植物繊維が故意に不均等に混ぜられていることもある (AS97-23, AS97-507, AS97-519: Fig.155-1~3, Pl.14,15)。AS-507例 (Fig.155-3, Pl.14) は石核の剥離痕のように打撃により土塊をはがしたような跡が残っている。また、AS97-519例 (Fig.155-1

）は、非常に巨大例であるが、中心部まで火があまり通っておらず、中心は生焼けのまま脆くなっている。

また、量的に小数ながらも、小さな円柱状の焼土塊（AS97-502,503:Fig.155-6,7, Pl.17）や円柱状の凹面を有す長めの焼土塊片（AS97-L2-14:B1, AS97-510:Fig.155-4～7, Pl.16）等も確認できた。これらは前者の焼土塊と違って、灰色でもろく、焼成の度合いも前者に比べ弱い。また意図的に植物繊維が混和されていることもない。

この両者の存在理由に悩んでいたところ、先頃ラオスと東北タイで土器作り村を調査した際に、解決の糸口を見つめることができた。まず後者の灰色焼土塊の円柱状の類であるが、これは土器の焼成時に使う燃材、特に細い孟宗竹ような幹の端部に土などが詰まっているときに、土が燃材と共に焼成を受けかたまって残ったものであることが理解できた。また、円柱状の凹面を有す長めの焼土塊片に関してもこれをヒントにして、解釈を与えることができる。つまり、燃材を重ねあって焼成を行うときに、泥を燃材上にかぶせて簡易的な窯のようにして、還元気味に覆い焼きを行う例が雲南のタイ族の土器焼き事例に知られているが、この覆い焼きの泥が燃材の痕を残して、結果的に焼き固まる場合である（柏原1997、石橋1997）。雲南の事例は燃材が藁だが、これを薪に置き換えれば、当遺跡例に円柱状の凹面を残した焼土塊が残された理由も説明できる。当遺跡の土器の精緻な文様を施されたものの中には、暗褐色、黒色に近い器表色を呈しているものがあり、還元的焼成が行われたことを示している。

ところで、量的圧倒を占める褐色焼土塊の方であるが、これは故意に製作したものであろうから、灰色焼土塊とは別の解釈が求められる。東北タイの土器焼き民族例（Ban Thud Thai：2003年筆者調査資料）では、籾や葉などの植物繊維を池の泥と混ぜて、大きなボール状にして焼成し（AS97-519例に類似）、焼成後臼で細かく砕き、土器の混和剤として利用している。これと同じような解釈を当遺跡例にも当てはめてよいのではないかとそのように解釈すれば、遺跡での多量出土、あるいは剥離痕のような打撃痕をもつ焼土塊の存在にも納得がゆく<sup>4)</sup>。タイでは民族例で現在でも焼成土塊を作り砕いて混和剤としているが、先史時代の土器においても、それは確認されている（Vincent 1985, 2004）。

前述の植物繊維を混和した軟質繊維土器の中には、植物繊維以外に褐色や赤褐色の微少な土塊片が、混じっていることが多い。これらはこうした焼土塊を砕いて混和した結果と推察する。この焼土塊以外に、胎土の混和剤として利用したのではないかと考えられる候補が一つある。それは土器自体である。土器片の中には、しばしば土器の破損面が削られていたり、あるいは剥離を故意に受けている例が確認できた（Pl.13）。中には、メンコ状のように小さく加工されていたようなものもある。最初、筆者はこれらが意図的にメンコ状に加工された製品と考えていたが、その数が多いことと、しかも不定型なものが多いこと、さらには大きな破片などにも加工面が見られることから、それらが、土器片を削ったり剥離した時の副次的産物ではないかと考えるに至った。民族例で観察されているように、土器の混和剤としての再利用を考えるべきであろう。実際に、当遺跡の硬質混砂土器には焼土塊片か土器片の細かいものが混じっているのが肉眼で観察できる。

第3期の文化層（L2-21b層からL2-8層）からは多量の貝が出土している。また、この貝から製造したであろう石灰が土器片の内部に大量に付着していたことも確認できた。そして、この時期の繊維土器には、石灰が混和剤として利用されている。従って、これらを土器生産遺跡としての傍証として挙

げることができる。

土器は砂を混和した硬質混砂土器(SP) と植物繊維を混和した多孔質の軟質土器(FP) とに分類可能である。第1期は硬質混砂土器のみだが、第2期以降は軟質繊維土器が20%前後の比率を保っている(Fig.161-1)。土器群の中で、構成比上目立つのが、第2期と3期から出土した波状口縁鉢(ABD類)である。第2期の器種構成比上、40%以上を占め、普通最も普遍的な広口壺より多い比率となっている。また、第3期でも10%以上の比率を占めている。この器種は、後述のロックザン遺跡やその他の並行期の遺跡でわずかしこ出土していない。

第4期(L2-7層からL1-1層)は広口壺が、硬質・軟質土器を合わせ90%以上を占めるに至っており、単純な生活廃棄による土器群と考えるには、器種構成上バランスを欠いた構成比になっている。

### C コーソントゥ遺跡の研究から

コーソントゥ遺跡(ロンアン省Vĩnh Hưng(ヴィンフン)県)はヴァムコータイ川中流域右岸に位置した重層マウンド遺跡である(Fig.150)。マウンド径は100mほどで、マウンド中央部に寺が建っている。寺のお堂そばでPit1(3×3m)の発掘を行い、3.2mほどの文化層が確認できた(Nishimura 2003a)。Pit1から北側に30m離れた斜面地でPit2(2×2m)の発掘を行い、約1.5mの文化層が確認された。Pit1の最上層部(第1層)を除けば土器の型式分類から連続的変化の確認できる先史時代末期(鉄器時代)の堆積である。堆積はPit1では、灰含みの灰褐色層や褐黒色層、灰色シルト質土層、炭化物層、硬化土片や灰、赤褐色土片の混じった褐灰色粘質土層、橙色硬化土層、赤橙色硬化土層が、交互に重なり合うように確認されている。赤褐色や橙色の硬化土層は最上層部に集中している(Fig.153, Pl.11,12)。Pit2では第3レベルと第6レベルで土製支脚複数個を正置した状態で周囲の土が、土器片と共に火を受け焼き固まっている状態で出土した。それ以外は灰含みの褐黒色層が主で、硬化土層面はなかった(Fig.153)。この発掘より、赤褐色や橙色の硬化土層はマウンドの中心部で発達している認識が生まれた。

出土遺物は植物繊維などが多く混じった芯黒の軟質土器(Fig.15)と土製の支脚(Fig.156-5~12)が主で、あとは、わずかの砂混じりの硬質土器ある。全出土遺物の中で、重量統計中最も多いのが土製支脚である(Fig.159, Fig.161-2)。第1坑では全体の61.7%、第2坑では全体の59.5%を占めている。特に第1坑の下層部と第2坑の上層部で多く出土している。その次に多いのが、浅鉢型の土器(S.Bowl 1とS.Bowl 2)である。第1坑では、全体の28.9%、第2坑では、全体の26.1%を占めている。また土製支脚を除き、容器類の土器のみで換算すれば、浅鉢類は第1坑では64.4%、第2坑では75.5%の高比率となる。

興味深いのは、土器の出土量が多い場合、土製支脚の出土量も多いという傾向である。また土製支脚を除いた土器の中で、浅鉢(S.Bowl 1とS.Bowl 2)の占める比率は、全層を通じて非常に高いことがわかる(Fig.160)。浅鉢が半分以上を占めるのは普通で、多い場合には90%以上というのも稀ではない。これは一般的な居住遺跡の土器群の器種構成比から考えれば、異常といわざるをえない。

また、土器分類時に明らかになったのは、第1坑と第2坑の間で、浅鉢により、時間的並行性が確



認められたが、それ以外の器種については、両坑間で出土している同型式のものが非常に少ない現象が認められた（Nishimura 2003a）。

また土製支脚については第2坑において、使用時の固定状態が確認されたものの（Fig.154）、それらを何ために使ったかについては説明ができなかった。しかし、これもジャワ島ジョグジャカルタ郊外や東北タイの土器製作村を調査した際に解決のヒントを得ることができた（Nishimura 2003a）。Fig.157-1はジャワ・カソンガン村での土器焼成の図である。釜形土器を焼成するため、焼成面に焼成済みの植木鉢型の土器を設置し、その上に釜形土器を積み重ね、火の通りを良くしているのである。また、Fig.157-2は東北タイのバンティモー村での土器焼成例である。ここでは、上部に凹部を作り出した土製支脚（Fig.158）を定間隔に配置し、その上に、長い薪をわたし、その上に薪を直交して重ねて焼成台を作り、さらにその上に釜形土器を重ねて、焼成を行っている。筆者はコーソントゥの事例は、支脚の機能としてはカソンガン例に近いものと考えているが、形態的にも、機能的にも近いものが、バンティモー例で、現在でも使われていることに興味を覚える。従って、コーソントゥ第2坑での土製支脚出土事例も、土器の焼成場と考えれば、激しい被熱面なども納得がいくものである。

#### D その他の重層マウンド遺跡・土器生産遺跡より

以下、筆者が調査を行った遺跡以外について、重層マウンド遺跡や土器焼成などの情報を抜粋し、ならびに筆者の編年観を付する。

ロックザン遺跡（ロンアン省ドゥックホア県）はアンソン遺跡の約500m北西のヴァムコードン川脇に位置した重層マウンド遺跡である。1988年ホーチミン市社会科学委員会が発掘をしたが、正式な報告はされておらず、1993年にヴェトナム歴史博物館が発掘を行っている（Quang V.C.&Ngô T.P. 1994）。1978年の表採調査では東西300m、南北150mの分布面積をもった重層マウンドとして認識されている（Le X.D.1979）。1993年の調査では2地点で発掘を行い、比高差の高い第1坑では約2.1mの文化層が確認されている（Quang V.C.&Ngô T.P. 1994）。第1坑では上層部深度約0.6-1m前後まではオケオ文化、あるいはそれ以後の遺構が食い込んでいるが、下層部（層厚1-1.5m前後）は先史時代の文化層である。その先史文化層の最上層部（第3層）は褐色砂質土層で土器などの遺物が多く混じっている。次の第4層は黒色土（炭化物混じり）、赤褐色土、灰赤色土、黄色土などの薄い層（5-10cm）が交互に重なり合っている。調査者は炭化物混じりの黒色土層を含めた各層を居住活動起源のものとし、居住面を高くするための盛り土もあるのではないかと考えている。最下層はわずか20cm厚で、灰褐色の川砂で構成された土器や細かい炭化物含みの層である。

筆者の編年と比較すると、石器・土器共に、ASⅡ期からⅣ期までの遺物を含んでいる。

土器は砂を混和した硬質土器、植物などを混和した芯黒の軟質繊維土器、表面を丁寧に磨いた磨研土器の3種類に胎土を分類しているが、純粋な胎土による判断では最後の磨研土器は前者の硬質土器に編入して構わない。硬質土器と軟質繊維土器と二分した場合、後者は全体の20.5%を占める。

器形分類は口縁分類が主であり、図面の不正確さや分類の大まかさからアンソンとの単純比較は無理である。しかし、土器群全体で考えるとアンソンより明らかに出土量の少ない土器器形が存在する。

一つは波状口縁の浅鉢で、もう一つは三足の円形ストーヴである。前者は具体数は不明だが、調査者に確認をとった限りでは非常に少なかったようだ（Ngô T.P.私信）。後者はわずか2片しか出土していない。

ザックヌイ（ロンアン省カンズオック県）はヴァムコータイ川とヴァムコードン川の合流した本流に注ぐ支流沿いに位置した重層マウンド遺跡である。遺跡は汽水域に位置し、現周囲は水椰子が覆い茂るような平坦な低湿地帯であり、現海岸線にも10km強程度の位置といった自然環境条件は、海あるいは汽水に関係した生業を基盤にしなければ居住は成り立たないであろう。

マウンドのプランは円形に近く径100-120mを計る。1978年の発掘（Phạm Q.S.1978）では5m厚の文化層が確認されている。文化層は最上層の耕作土層を除いて、3層に分けられている。上層は平均60cm厚で、暗褐色の堅くしまった土層で、土器片や石器も多く含まれている。中層は平均3.2m厚あり、明褐色土層を基層とするが、黒色土（炭化物を多く含む）、灰色土、灰白色土、淡橙色土などの薄い層が幾層も交互に違えて堆積している。骨などの有機遺物はこの層で最も多く出土している。下層は平均1m厚である。青灰色土層が基層だが、中層同様、褐色土層や黒色土層（炭化物含み）を交互に交えている。

出土した土器のなかで、細砂を混和した硬質土器の比率は10%にも及ばない（Fig.161-4）。残りは全て植物などの有機物を多く含んだ芯黒の軟質土器がしめているようだ。同時期のアンソン土器群では、複雑な文様を有す土器のほとんどは混砂硬質土器に属しており、筆者がホーチミン市社会学人文研究センター所属考古学センターの当遺跡資料を管見したときにも、文様を有す混砂硬質土器の量的に非常に少ない印象をもった。繊維混和軟質土器のなかで最も多い器形が、口頸部が直立あるいはややすぼまった深鉢が最も多い。そして次に多いのが頸部のくびれた釜型土器である。

ゴーオーチュア（ロンアン省Vĩnh Hưng（ヴィンフン）県）は、現在のカンボジアーヴェトナム国境に近いヴァムコータイ川の上流域に属し、ドンタップムオイの北部に位置している。遺跡は3つの不均整な円形マウンド（北丘、中央丘、南丘）が、北東-南西方向に連なりあった平面形を呈している（Fig.149）。中央丘が面積的にも、比高差的にも最も大きい。北丘から南丘に至るまでの長軸は420mあり、中央丘の最大短軸は120mに及ぶ。重層マウンドの南西側には、ヴァムコータイ川の注ぐ小河川が流れている。1997年のヴェトナム歴史博物館による発掘（Ngô T.P.&Bùi P.D. 2000,2001）は中央丘で行われ、筆者も2週間弱参加した。第1坑はマウンド面の高位部に設定され、第2坑はマウンド南側の斜面地、これに小規模な試掘坑を2カ所、マウンド高位部の中央東南側に設定した。周囲水田との比高差は中央丘で最大3.5m以上あるが、マウンド面高位部の第1坑の発掘では文化層厚は約2.5mであるから、原地形自身、水田面より1m以上高い微高地であったことになる。

報告では、土器は砂を混和した粗製土器とされるものが第1坑で約3%、第2坑で約10%を占めている。そして、土器の芯部が灰黒色の土器が、第1坑で80%近く、第2坑で約45%を占めている。残りを芯部が黒色や、赤褐色、灰黄色などの土器が占めている（具体数値不明）。土器の芯部を色で分類するのは、表面色で土器を分類するのと同様、ほとんど意味がない。筆者が実見した限りにおいて、これらの土器は胎土に植物繊維や有機物を多く含むもので、コーソントゥやゴーカオスーの芯黒でやや軟質の土器と同じ素地のものと考えてよい。

容器以外の土器として量的に目立つものは、三叉支柱型土器（Fig.156-1～4）と土製支脚である。

三叉支柱型土器は、出土土器片総量57000片強のうち48260片（84.7%）にのぼっている（Fig.161-5）。この土器は先端部が三叉状に分かれており、それぞれが、一定の角度で支柱から外側に開き出すように尖りだしている。支柱は18-20cm程度の実芯部となり、下端部は漏斗を逆にしたような形をしている。報告者は出土量の多さから、この土器がこの遺跡で製作され、なおかつ、遺跡外に交換などを目的として持ち出されたのではないかと推測を行っている（Ngô T.P. et al.1998）。

土製支脚は700点以上出土しており、北部ヴェトナム先史時代のもと同様の形態と機能が想定されているが、これはコーソントゥで出土しているものと同じ形態のもので、その機能は前述した通りである。また、形態は不明だが、焼土塊がかなりの量出土している。報告者はこの焼土塊を土器の混和剤の原料として使った可能性を考えている。

ゴーカオスー（ロンアン省ドゥックホア県）はヴァムコードン川からは10km強離れており、古い時期に形成された沖積平野上に位置した重層マウンド遺跡である。マウンドは円形で、遺跡面積は4000㎡あったとされている（Trần A.D. et al. 2001）が、遺跡が完全破壊された現在は確認のしようがない。1995年の発掘では1.4m厚の文化層が確認されている。文化層は大きく3層に区別されている。第1層（14-25cm厚）は灰色の耕作土層であるが、もともとは文化層であったものが耕作により攪乱されたようだ。第2層（17-62cm厚）は黒褐色土層で最上層部には多量の土器片が混ざった硬化層があったようだ。第3層（19-42cm厚）は灰黒色土層で、土器の包含量少なく、焼成による硬化面（？）あるいは硬化土塊の分布が確認されている。省博物館保存の写真では、他重層マウンド遺跡同様、黒色土層や明褐色土層が交互に重なり合った現象が確認できた。

土器に関しては表面色や文様の種類による分類が報告されているのみである。遺物も現在、典型的な破片が選択的に保管されているのみなので、器形分類比を検討することは全く不可能である。筆者の遺物研究では、他遺跡同様、胎土には2種類あった。数量的に多いと見られるのは、植物繊維あるいは有機物などが多く混ざった、芯黒でやや軟質の土器である。土器の表面は灰白色の層が薄く覆っているように見える場合が多く、これを白色粘土を使ってスリップ状に塗りつけたと解釈する考え（Trần A.D.2001）もあるが、これは土器の焼成や表面研磨による表層部の変質であり、意図的な塗布、貼りつけによるものではない。なぜなら表層部と芯黒部の間の変化は漸移的だからだ。当遺跡の表採資料で、同様な素地の土器を偏光顕微鏡分析したところ、酸化（つまり焼成）による表層色変化と判明し、胎質上の差は認められなかった（河西私信）。

そして、少量を占めると考えられるのが、砂を混和し、褐色に発色したやや硬質な土器で、相対的に薄手である。当類の土器には胎土中に焼土塊の小片を混和している例が確認できた（Pl.19）。土器以外に注意を引く遺物として、砂含みの焼土塊が多く出土しているが、これらの中には金属の鑄かすのようなものが見えたり、高熱による明らかな変色や胎質硬化が観察できるものもあるようだ。しかし具体的資料化が行われてないので、詳しい理解が不可能である。

ローガックはヴァムコートイ川上流域に位置する遺跡（ヴィンフン県）。径40m程度のマウンドが2つ接しあった遺跡で、2005年の調査では、コーソントゥやゴーオーチュアと同様の文化層が確認された。出土土器によれば、時期的にはコーソントゥ遺跡と並行する。文化層は最大2m前後あると考えられる。人為的に土、焼土塊、石灰などを混ぜた硬化土層も確認できた（Pl.18）。

ゴーソアイは、ヴァムコードン川中流域に位置した小型重層マウンド遺跡で、コーソントゥやゴー

オーチュアと同様の文化層が確認されている (Bùi V.L. et al. 1996)。また出土土器からゴーカオスーなどに並行する鉄器時代と考えられている (Nishimura 2005a)。

ジンオン (タイニン省Bến Cầu (ベンカウ) 県) は、ヴァムコー川中流域に位置する大型重層マウンド遺跡で、1990年に調査されている (Bùi C.H. 1991)。アンソンと同タイプの土器・石器が出土している。

カオソントゥ (タイニン省Gò Dầu (ゴザウ) 県) はヴァムコードン川左岸脇の自然堤防上に位置した大型重層マウンド遺跡である。1999年の筆者らのサーヴェイでは、長軸約100m、北西側 (つまり川側) の短軸が約70m、南東側の短軸が20mほどの大きさで、マウンドの頂上には現在大きな寺が建っており、正確な計測は表面からでは不可能だが、川と寺の基盤の比高差は8.5-9mあり、マウンド周囲の水田の高さから判断して文化層は最低でも5mはあると推測した。マウンドの細長台形状プラン自体とよく似ている。土器・石器の表採からアンソンとほぼ同時期と判断した。

ビンダー (ドンナイ省Biên Hòa (ビエンホア) 市) はドンナイ川左岸の河岸段丘上に位置した重層マウンド遺跡である。遺物分布は、長軸が東西に500m、短軸が南北に150mにも及ぶとされる (Phạm D.M. et al. 1997)。1979年の西側斜面地の第1次発掘 (174m<sup>2</sup>) では文化層厚は最大2.9mあった (Lê X.D. et al. 1991)。土取りによる遺跡破壊に端を発した1993年の第2次発掘 (40m<sup>2</sup>) は、第1次発掘坑より西側の斜面地で行われ、文化層厚は2.2mから2.8mあったようだ。両次発掘の文化層記述は細かな層認識ををしておらず、実態が掴みにくくなっているが、筆者が93年に発掘中の現場を訪れた時の記録では、炭化物含みの黒褐色土、明褐色土や灰赤色土が薄い層を交互になるように堆積してあるのが観察できた。

当遺跡は筆者の編年と比較すると、石器・土器共に、アンソン第2期から第4期までの遺物を含んでいる (Nishimura 2002a)。土器に関しては、細かな分類統計が発表されておらず、また遺物も選択されて保存してあるので、器種比率などを把握するのは困難である。しかし、ドンナイ省博物館における筆者の2度にわたる土器研究では、ザックヌイやゾンカーソイに非常に多く、アンソンでも普遍的に存在した芯黒で軟質の植物繊維を多く含む土器、特に口縁が直立あるいはややすぼまった深鉢タイプの土器が非常に少ない印象を受けた。

ゾンカーヴォ (ホーチミン市) とゾンフェット (ホーチミン市) は南シナ海に面した半島部 (Cần Giỏi (カンゾー) 県) の先端近くの位置している。周囲はマングローブ林で囲まれた小島状の遺跡である。遺跡面と水面との比高差は最大でも2mのようである。遺跡面積は約10000m<sup>2</sup>とされる。両遺跡共にゾンカーヴォ型、ゾンフェット型という円錐形土器が特徴的な土器で (第7章参考) である。ゾンカーヴォでは口縁数量で全体の85%、ゾンフェットでは全体の98.5%を占めるに至っている (Fig.161-3)。また報告者は、文化層中に見られる土器の集中廃棄層を土器製作に伴う集中廃棄層と考えている。

ゾンカーソイ (ヴンタウーバージア省Tân Thành (タンタイン) 県) は、ティヴァイ川河口近くのマングローブ林帯の中に分布する、小型重層マウンド遺跡群の一つである (Bùi C.H. 2000)。マウンドの直径は約20mで、面積は約300m<sup>2</sup>である。1998年の発掘 (第1坑と第2坑併せて156m<sup>2</sup>) では、最大1.1mの文化層が確認されている。

土器に関して、具体数量比は不明だが、ザックヌイ同様、芯黒で軟質の植物繊維を多く含む土器、

特に口縁が直立あるいはややすぼまった深鉢タイプの土器が、口縁分類中で最も多いと報告されている。

バージア市東郊外のブントム遺跡は、青銅器時代の低湿地居住遺跡で、重層マウンド遺跡ではない。青銅器の石製鋳型が多く出土している遺跡だが、やはり土器の比率がやや異常である。全体の60%異常が硬質混砂土器の高坏である（Vũ. Q.H.&Hò K.B.1999）。西隣りに位置するブンバック遺跡は同時期、同性質（Phạm D.M.1996）の居住遺跡であるが、土器全体の口縁数計算で、高坏は19.31%にしかない。

同じくカイヴァン遺跡も、新石器時代から青銅器時代にかけての遺跡であるが、重層マウンド遺跡ではない。低湿地あるいは河水面での杭上住居と陸地部の遺跡が複合した居住遺跡である。この陸地部の遺跡側で、筆者がコーソントゥ遺跡（Nishimura 2003a）で報告したような、土器片が土と混じり合い激しい被熱により硬化している現象が報告され、土器製作址と考えられている（Luu V.D.&Nguyễn Đ.H.P. 1998）。硬質混砂土器、軟質繊維土器がほぼ2対1の比率で出土している。器種別の偏りに関しては、口縁分類が単純なため判断が難しいが、長頸壺などの比率（全体の20%以上）が他に比べ多い可能性はある。

## E 重層マウンド遺跡の性格

以上、重層マウンド遺跡の文化層的特徴、出土する土器群の偏り、さらには土器焼成を行ったと考えられる直接的・間接的証拠を叙述・列挙してみた。こうした観察事実から推論は、以下にまとめる事が可能である。

1・筆者の編年案から判断すれば、重層マウンド遺跡はヴェトナム南部平原部において、新石器時代と鉄器時代に形成されている。現在までのところ青銅器時代の重層マウンド遺跡は、まだ確認できない。この問題は、先行論文（Nishimura 2002a）で論じたように、新石器時代から青銅器時代にかけての集落パターンの変化（立地変化、遺跡数の激減など）に関連すると考えられるが、その理由説明にまでは至っていない。

2・筆者のヴェトナム南部編年から判断するなら、こうした遺跡は連続した居住により形成されている場合のみである。新石器時代の遺跡の重層マウンド文化層上に鉄器時代の別の重層マウンド文化層が形成されているような、間歇的文化層形成例は存在しない。

3・重層マウンド遺跡では大量の炭化物や灰混じり土層と焼土塊片などを混ぜた硬化土層が交互に堆積した文化層が確認される。重層マウンド遺跡の文化層、出土する遺構や遺物から、こうした遺跡は土器焼成を頻繁に行った遺跡で、なおかつ特殊な配合を行って盛り土をして硬化土層面を造成している。結果的には土器製作に伴う大量の炭化物や灰と硬化土層面造成が重層文化層形成の主因である。

4・重層マウンド遺跡の土器群は、しばしば器種的偏りが認められる(Fig.161)。上述したように、同時期形成された遺跡どうしにおいても、器種構成に大きな偏りが見られる場合がある。新石器時代のアンソン、ザックヌイ、ロックザン、ゴーカーソイ、鉄器時代のコーソントゥ、ゾンカーヴォ、ゴー

カオスー、ゴーオーチュアなどはその典型例である。また、重層マウンド遺跡ではないが、青銅器時代のブンバックとブントム間にも同様な傾向が存在する。こうした器種組成の偏りは、そこで生産された土器の機種別組成比を反映していると考ええる。

#### F 重層マウンド遺跡が土器生産遺跡とするなら

ところで重層マウンド遺跡で土器製作を活発に行ったと仮定すれば、土器群の器種別の偏りも解釈が可能となる。

第9章で述べたように、メコン・ドンナイ複合平原部において、先史時代の利器製作において重要な石、金属の入手可能性は非常に乏しく、沖積土地においてはその可能性は皆無である。当然、素材にしろ、製品にしろ、自ら資源を開発するか、交換・交易で入手するしかない。農耕と定住生活がある程度、普遍化していたであろう新石器時代以降の社会において、石材・金属資源が自らの開発行動で自由にできた状況は想像しにくく、おそらく、その領域はすでに人間集団により管理されていたはずである。従って、低地社会の人間はそれらを、より上流地域や山岳地、つまり高地の人間から交換・交易で入手するしかなかったと想像される。

その場合、低地集団にも対価になる物品がなくてはならないが、それは何であろうか？食糧に関しては、塩と海産物以外に可能性はない。なぜなら、それら以外は山間部において全て入手できるものである。塩や海産物も海岸部のごく限られた地域しか直接生産に携われなかったはずである。

筆者は、この交換物品の一つとして土器を想定する。土器の原料は無限であるし、それなりの価値ある工芸品であったはずだ。もちろん、高地でも土器生産が行われていることは確実であるが、高地と低地の2点間直接交換を想定する必要もない。交換を細かい間隔で繰り返すなら、隣の集落から石斧を得、隣の集落が生産していないあるタイプの土器を渡すといったことで、長距離交換は成立するからだ。そのように考えれば、ゾックチュア（Dóc Chùa: Đào L.C.&Nguyễn D.T. 1993）、ブンバック、ブントムなどでの石環、青銅器、青銅器鋳型の集中製作も納得ができるものとなる。Stark (1991) はフィリピン・ルソン島の山間部で、各集落間で集中生産する手工業品生産品目の重点度の違いを見だし、ありがちな説明である社会組織の進化に伴う手工業の専門化といったものではなく、寡資源地域のひとつの適応手段として論じているが、メコン・ドンナイ複合平原にもそのことは当てはまるだろう。

#### G 今後の研究にあたって：なぜ重層マウンドでなければならないのか？

重層マウンド遺跡と土器焼成の問題を、より時間的・空間的に拡げて考えるとどうなるのであろうか？

タイのチャオプラヤー平原、東北タイコラート平原、ヴェトナムのメコン・ドンナイ平原、紅河平原、カンボジアの平原部、ビルマのイラワディ平原（Ming Aung Tve私信）など、東南アジア大陸部の平野部で確認される遺跡形態である。そして、筆者は土器作りとそれに伴う盛り土が、重層マウン

ドを作り上げたと考えている。問題はなぜそのような現象が起きたかということである。ここでは、環境条件の制約と文化的嗜好を合わせた形での仮説的説明を将来の研究課題として掲げておきたい。

新石器時代以前において、北部ヴェトナムを除く、東南アジア大陸部は、ホアビニアン礫石器インダストリーの時代である可能性が高く、本格的な農耕の始まっていない、人の居住が非常に疎らな地域と考えられ（西村1996、Higham 1996）、当時の平原部は森林が密に茂る生態環境であったはずだ。ザックヌイが位置する環境は汽水域で、マングローブなどの汽水林の密林と考えられ、アンソンでさへ、汽水域の貝が多量に出土していることから（アンソン遺跡分析資料）、汽水林（ミズヤシなど）などに近い環境と想像される。そして、新しく出現した農耕民が新石器時代以降、土器焼成を集中的に行うにあたって、周囲より高みのあるところを選定したことは、不思議でも何でもない。遺跡の周囲を森林伐採後は可耕地として利用し、遺跡形成面を居住地域として使い続けるのが最も合理的であつただろう。それは、マラリアなどの疫病防御、風通しの良さ、水はけの良さなどの居住快適性を考えれば納得がいくことではなかろうか。コックパノムディでも花粉分析（Maloney 1991）などから、マングローブ林の生い茂る汽水環境で、植生破壊が進み、イネ科の植物が増加することが確認されている。

土器焼成を行った場合に大量の灰が出るが、その焼成面をそのまま居住面と利用することは困難である。なぜなら、大量の灰は湿気や水分を吸えば泥となり、とても衛生的な居住面にはなりえない。現在の土器焼成民族例でも、焼成場所をその他の居住活動に使っているところはないようである。居住や生活の範囲面積が限定されているラオス・ルアンプラバン郊外のBan Pan Lung（バンパンルン）集落の場合、焼成場も繰り返し利用されており、分厚い灰層の堆積が確認された（2003年筆者調査資料）。青銅器時代の土器焼成を行った遺跡と推定されるCái Vặt（カイヴァン）やBung Thom（ブントム）の場合、湿地や河水面に杭上住居を造り、居住域としており、重層マウンド遺跡を形成する必要がなかったのであろう。土器焼成の作業場の上に盛り土をして、快適な居住面を造成することは合理的と思われる。

もう一つの立場からの説明は、文化的に一つの場所にこだわった定住性である。この背景を現在説明することは無理であるが、新石器時代の南部ヴェトナムやカンボジア南部の高度の高い丘陵地帯では、環状（土塁）集落が典型的な遺跡形態（Chanthourn 2002, Nguyễn T.Đ. 2004）で、長期間にわたって形成して居住を行っていることが認められる（Nishimura 2002a, Nishimura et al. in press）。そして、低地の重層マウンド遺跡は、まさにその現象と対照をなすもので、遺跡の形態こそ違えど、長期安定居住を、低地でも丘陵地でも実現しており、そこには強い定住性を読みとることができる。おそらく、当時さほど人口も多くない当地域において、各農耕社会は、小さい集団で疎な居住を行うことよりも、まとまってある程度の人口数を持つ定住集落を形成することに、生活の容易さを見いだし文化に組み込んだと考えざるをえない。青銅器時代には低地でマウンド遺跡がなくなることを前述したが、環状（土塁）集落も同じ傾向をたどっている（Nishimura et al. ibid.）。

また、重層マウンド遺跡が形成されなくなった理由も考えてみる必要がある。北部ではドンソン文化以降、南部ではオケオ文化以降、重層マウンド遺跡は出現しないようだ。オケオ文化の場合、低湿地での杭上住居居住が盛んだし、ドンタップ省ゴータップでは盛り土での幅広い居住面を造成した可能性がある（Le Thị Liênと筆者による2003年度発掘資料）。従って、重層マウンド遺跡のように狭い

範囲に集中居住をすることを行っていない。この理由には森林開伐が進み、人が住みやすい環境が増えてきたこと、より大きい単位の人口が居住する条件が必要になり、狭い範囲での集住が不可能になったことも関係しているのではないだろうか。

このように考えれば、重層マウンド遺跡はさして大きな人口を収容できないことに気づく。例えば、コーソントゥの場合、直径100mほどのマウンドで、例えその半分の面積を居住に利用したとしても約4000m<sup>2</sup>にしかならない。1家族の居住利用範囲を100m<sup>2</sup>として非常に狭く見積もっても40家族、一家族を6人として240人である。つまり、せいぜい小規模な村落しか成り立たないことになる。もし、国家形成などの社会進化が進み、集落の階層差の進行あるいは再編がすすみ、マチ、クニなどが形成されていけば、こうした居住形態が放棄されるのは、非常にありうるのではないか。従って、重層マウンド遺跡は、森林が卓越していた平原部で、森の海の中に浮かぶ島のように形成された定住集落と考えたい。当時の環境下では、そのように集住して居住する方法が、安定居住の一つの方法であったと考えたい。

ところで、スオイリン (Suối Linh : Bùi C.H. et al. 1997) やフーミー (Phú Mỹ : Trịnh S. 2001) 各遺跡は、重層マウンド遺跡ではないが、土器製作のためのアンヴィルが出土している。しかし、上記の重層マウンド遺跡では未だ確認されていない。土器の叩き製作技法は上述重層マウンド遺跡で、頻繁に適用されている技術で、アンヴィルなしはあり得ないことである。木製か石製の可能性を想定する必要がある。また、なぜ青銅器時代の重層マウンド遺跡が確認されないのか。非重層マウンド遺跡で土器製作を行っている遺跡と重層マウンド遺跡での土器生産はどのような関係にあるのか、集落パターンの変化と合わせて、研究を重ねる必要がある。

#### 注釈

(1) 日本でも、縄文や弥生の遺跡で焼成粘土塊の出土が報告されるが（例：田中1991）、混和剤としての利用可能性を検討すべきではないだろうか。



## 第12章 紅河平原域の紀元後1000年紀の城郭遺跡の問題

### A はじめに

ルンケー (Lũng Khê) 城址はヴェトナム紅河平原 (Fig.162) のほぼ空間的中心にあたるバックニン省、Thuận Thành(トゥアンタイン) 県のThanh Khương (タインクオン) 社のをLũng Khê (ルンケー) 村を中心に旧Dâu(ザウ) 川の緩やかな自然堤防上に位置する城郭遺跡である (Fig.163) <sup>(1)</sup>。当城址は歴史的に”Luy Lâu (ルイロウ：羸婁) 古城”と呼ばれている。河川の流路を利用して、水濠が巡るように城堡を水濠の内側に盛り上げた城郭である (Fig.164)。城堡規模は北側680m、南側520m、東側320m、西側328mとされ、城堡基部の最大幅は20mを越え、その比高差5m前後に及んでいる (Fig.3 : Tổng T.T.&Lê Đ.P.1987)。

当城址は、前漢の武帝が紀元前111年に設置した交趾郡の九縣のなかで筆頭に記録され、前漢代の交趾郡郡治の所在地とされる羸婁縣の中心と考えられてきた (Maspero 1910, Madrolle 1937, 桜井1979, Trần Q.V.2001)。一般に後漢代のある時期に羸婁から龍編に郡治が遷ったと考えられているが、羸婁縣自体は南朝中期ごろまでは確実に存在していたようだ <sup>(2)</sup>。また、後漢代末から三国時代初頭にかけて、一族と共に交州全域で勢威をふるった交趾郡太守、士燮の居城を当ルンケー城址とし、文献上の羸婁縣あるいは羸婁城址と重ねて考えられている。なるほど、城郭内中央には士燮の廟と士燮関連の碑文が残され、城郭周辺には士燮に関連する仏教初伝伝説や士燮の墓とされる廟があり、士燮との繋がりを濃密に感じさせる。また、北東5.5kmのドゥオン川右岸には大型港址 (紀元後2世紀以降) のPhà Hồ (ファーホー) 遺跡もある。そして、羸婁縣=現トゥアンタイン県周辺域、羸婁城=ルンケー城址という考えを一つの根拠として、先学は水経注葉楡水37条に登場する河川や縣の位置比定を行ってきた (例：桜井1979)。

ヴェトナム史では、一般に武帝侵略 (前111年) から呉權の独立 (938年) までの中国歴代朝廷に服属した期間を”北属時代”と呼び、羸婁縣やルイロウ (ルンケー) 城址はその時代の歴史舞台の一つである。しかし、その長い時間に対するヴェトナムでの歴史解釈は、中国の侵略と支配、抵抗するヴェトナム民族という単純な図式しか浮かび上がっていない。考古学的にはドンソン文化が紀元後1世紀頃に終結し、中国系文化が支配的となる時代であるが、考古学調査例も少なく、データの公表も進んでいない。筆者は紅河平原域を研究の1地域としていることから、北属時代の考古学に一定の関心をもち、また、破壊に瀕したルンケー城や磚室墓の保護や緊急発掘にも関係してきた (Nishimura&Phạm M.H.1998, Nishimura1998,2001, 2002a, 2002b, 西村2001)。こうした研究経験をふまえて、本稿ではルンケー城址と交趾郡域にほぼ相当する紅河平原域の北属時代を近年の考古学資料からの研究と文献資料からの検証を交え、様々な解釈を提出し、今後の研究の活性化を行いたい。

### B ルンケー城、羸 縣をめぐるこれまでの解釈・研究

ルンケー城と羸婁縣を巡る問題に関しては、主に文献史学と考古学の二つの異なる方法論からの研究が存在する。以下にこれまでの研究の概要をまとめてみたい。

## I 文献史学からの理解

フランス植民地時代から、現在まで羸婁城あるいは羸婁縣に関しては数多くの研究が存在する（Maspero 1910, 1918, Madrolle 1937, Trần, Q. V. 1959, 1999, Đào, D.A. 1964, 桜井 1979, Taylor 1983）。これらの研究を振り返ると、主に二つの大きな問題が存在することが理解できる。一つは縣あるいはその中心である城の位置比定であり、もう一つは羸婁から龍編へいつ郡治が遷ったかという問題である。前者は特に水経注の記述を基本に交趾郡の各縣の具体的位置比定が議論の中心である。後者は漢書、後漢書、三国志、水経注、太平寰宇記などの史料からの解釈が中心である。

これらの研究を通じて理解できることは、以下のことである。

1. 交趾郡郡治は前漢代に羸婁にあった。
2. 後漢代に羸婁から龍編へ遷ったが、その時期は交趾郡刺史周敞の時（142-144年頃）とする考えがある。
3. 士燮の時期に羸婁に郡治が再遷し、その後、再度龍編へ戻ったという解釈が根強い。士燮関連の伝承や廟がルンケー城とその周辺に集中することなどを理由に、『越史通鑑綱目』や『大南一統志』以来の、士燮の治所である羸婁とルンケー城を同一視する考えをMaspero以外が採用している。しかし、士燮時代の郡治在所についての意見は混乱している。また、桜井（1979）は士燮が羸婁に治した積極的根拠が古い時期の文献に見いだせないことも認めている。
4. 龍編の位置に関しては、全てがバックニン市や隣接するYên Phong(イエンフォン)県周辺に比定している。しかし、その根拠は水経注の解釈に主にしていて、具体的物証との対応は全くない。

## II 考古学からの理解

ルンケー城址はヴェトナム独立後、早い時期に国家級の「歴史文化遺跡」に指定されてはいたものの、発掘を含めた学術調査は諸々の事情により、さほど活発には行われていない。1969-70年に考古学院が城郭外の南城での発掘と、西側城堡の切断発掘を行っている（Trần, Đ. L. 1970, Trần, Q. V. et al. 1981）。西側城堡の切断発掘では盛り土を2期（李陳期と六朝-隋唐期）に分期し、その盛り土層の下の文化層を、後漢期の五銖銭出土を根拠に後漢後期に比定しているが、城郭外の南城での発掘では、遺物研究に基づいた具体的年代観を提出するには至っていない。

1986年には考古学院と現ハノイ社会科学人文大学の考古学研究室が、城郭内の中央近くに位置する士燮廟周辺と城郭外のDầu (ザウ) 川脇のBãi Đồng Dầu (バイドンザウ) 地点で小規模発掘を行い、同時に城堡の規模をはじめて数値化している（Tống, T.T.& Lê, Đ.P. 1987）。城堡の存続時期に関しては、その切断発掘より、城堡の盛り土層を3層に分層し、最上層が李・陳朝以降、中層は六朝から隋唐期に、最下層はそれ以前と判断している。士燮廟周辺の4地点の発掘地点から出土した小型磚のサイズが隋唐期の磚室墓や磚窯のものに近いことと、大型磚のサイズが後漢後期から六朝にかけての磚室墓

のサイズに近いことから、それぞれ、城郭の利用最終期を7-10世紀、城郭利用開始期を後漢後期に求めている<sup>(3)</sup>。また、東側城郭域（現集落内）で多くの墓が発見され、それらのレンガサイズや遺物が六朝期や隋唐期初頭のものに比定できることから、六朝期以降、東端域は城郭域としては放棄されたのではないかと考えている<sup>(4)</sup>。

ルンケー城址の発掘調査者で、なおかつ文献史料を扱うことのできるĐỗ V.N. (1989) は『大越史記全書』の龍編と羸婁が同じとする考えを継承し、土變の時代は龍編と羸婁であるとしているが、龍編縣と羸婁縣が別々に史書に記載されていることへの説明を全くしていない。同じく、ルンケー城址の発掘調査者の一人であるTrần Đình Luyện (1999) は、城域で2世紀から7-8世紀にかけてとされる厚い居住痕跡が確認されていることと、龍編と羸婁を同一とする大越史記全書の記述などから、Đỗ V.N. (ibid.) とほぼ同じ考えで、土變時代に羸婁から龍編に呼称が変わったにすぎないと考えている。

## C ルンケー城に関する近年の考古学的研究

### I 研究概況

筆者は1996年よりルンケー城に興味を持ち、断続的ではあるが、城郭や周辺域の分布調査を行い (Phạm, M.H. & Nishimura 1998, Nishimura & Phạm, M.H. 1998)、1999年の5-6月には、筆者は城郭内の青銅器鑄造工房の一角 (LK1地点) をハノイ社会科学人文大学の考古学研究室や考古学院の研究者との共同発掘調査 (ĐNCKQTCLL2000) を行い、上半分を掘り終え、2001年の継続調査で完掘した (Fig.164)。さらに北側城壁の残存部の露頭部を利用して城壁断面を観察するために、城壁を横断する形で、細長い試掘坑をLK4地点とLK5地点に設定した (Fig.165)。また、1999年と2000年の12月にはハノイ社会科学人文大学の考古学研究室が、学生実習で発掘 (LK3地点) を行い、その1999年の遺物整理は筆者が行った。LK3地点は、LK5地点に近い、城郭中央部に位置している。

また、近年の土地開発や骨董ブームは破壊、盗掘に拍車をかけ、城郭や周辺域もその被害を多々被っている。90年代半ば以降の城郭内レンガ工場の操業による破壊は1999年初頭まで続き、破壊により確認された資料もある。本論では発掘調査や新発見資料に基づいて考古学的見解を以下にまとめてみたい。

### II 城郭の存続時期について

1999年のLK1,3地点の発掘では下層部からわずかながらも、先史時代 (ドンソン文化以前) に相当する土器、石器等が出土している。また、ルンケー城の北2kmに位置するダイチャックや東2kmに位置するTam Á (タムアー) でも青銅器時代に相当するĐồng Đậu (ドンダウ) 段階からドンソン段階にいたる遺跡が調査、確認されている (Phạm M.H. & Nishimura 1998, Phạm M.H. 1999, Nishimura 2002b)。それらはルンケー城が位置するドゥオン川南岸域が青銅器時代にはすでに居住域になっていたことを示し、そうした居住の上に、ポスト・ドンソンとも呼ぶべき中国系文化色が濃い人々の居住・土地利用があったことになる。

城郭域の存続期間を考える場合、まず城壁内発掘地点の文化層の時期比定が重要な根拠となる。特に層位的発掘をもっとも細かく行ったLK1地点の資料がもっとも信頼性が高い。そしてLK4と5地点の資料の比較を行えば、ほぼ城郭の建設から放棄に至る時期に関するある程度正確な見通しが立てられよう。また、LK3地点に関しては、1999年度の調査資料を見る限りにおいて、LK1地点と全く同時期の遺物と考えてよい。1969-70年と1986年の発掘資料の残留状況（現Bắc Giang:バックザン博物館所蔵）は良くなかったが、報告書類（Trần Đ.L.1970, Tống T.T. & Lê Đ.P. 1987）と併せて判断すると、LK1、LK3地点と形式的にはほぼ同じ遺物が主を占めていたと判断できる。本稿では城郭内利用の最初期段階と最終時期とを論じるため、上層部と下層部出土資料に焦点をあてる。

また、城郭内の最上層部では唐代並行期から現代までの陶磁器が出土しているが、これらを捉えて、城郭の利用時期の下限とする考えに筆者は与さない。確実な城郭遺構の最終末のものを捉え、城郭利用時期の下限とすべきである<sup>(5)</sup>。

#### a 城郭建設時期について

各土器・陶磁器類に関しては、まず、ドンソン文化末期や漢系木槨墓資料との比較が必要である。ハータイ省Phủ Xuyên（フースエン）県のXuân La（スアンラー：Phạm, Q.Q. & Trịnh, C.1982）の削り抜き木棺墓群は大泉五十（初铸紀元後8年）や五銖銭（たぶん更始五銖：初铸紀元後23年、高漢銘（1988）参照）が出土したドンソン文化の最終末期（紀元後1世紀前半）に属するものである。同県のPhủ Lương（フールオン）も、更始あるいは東漢五銖（初铸紀元後40年）がドンソン文化の土坑墓より出土している（Hà, V. P.1986, Bùi, V.L. & Hà, V. P.1988）。ハイズオン省のゴックラック墓群はタインホアのティウズオンと並んで、紀元後1世紀頃の数少ない漢系木槨墓である<sup>(6)</sup>（Lê, X. D. 1966）。これらは、前述のスアンラーのような終末期のドンソン文化がまだ紅河平原に確固として存在しているときに併存したもの、あるいは、ドンソン文化的実体が物質文化の表面から消え去っていく段階<sup>(7)</sup>の漢系文化の浸透の様相を表す資料であるが、LK1,4,5の各地点では上述遺跡の遺物に対応する遺物はない。1999年と2001年の層位的発掘より、遺物、特に陶器の編年を組み上げることが可能となった。Fig.17からFig.19はルンケー城の城郭利用時期を主に3時期（前・中・後）に分けて理解した場合の、主たる陶器類である。そして、現在までのところ、ルンケー城の最初期の遺物様相を知るのに最も適した遺物群が、LK1地点の最下層（第4層）である。この遺物群はLK4地点と5地点の最下層の遺物とも、全く同じ型式の範疇に収まる。これらの遺物群のなかで年代議論の最も行いやすいものが、陶器類であり、特に出土例の多い印紋陶は他遺跡との比較も行いやすい。ただし、留意しなくてはならないのはLK各地点の最下層資料が全て、ルンケー城最初期のものとは限らないということである。持ち運び可能な陶器であるから、建設以前のもので、ルンケー城建設時、建設後に持ち込まれて継続して使用されたものもあるであろうから。もちろんその量は非常に少ないであろうが、考古学的思考の手続きとして、最下層資料の性質を強調しておきたい。

この最下層の遺物群は筆者がいくつか研究してきた遺物群、つまり、同じトゥアンタイン県内の磚室墓資料（Nishimura & Phạm M. H.1998, Nishimura 2002b, 西村他2005）やMạo Khê（マオケー：クアンニン省）、タインホア省の後漢後期以降の磚室墓群（Janse 1947, 1951）に同類資料が見いだせることから、紀元後2世紀のものであることが理解できるし、紀元後1世紀の遺物（例:ゴックラック）は

含まれてないことが理解できる。また最近、公表されたヤンセが1930年代に調査したタインホア磚室墓群の資料研究（宮本・俵2002）はさらに細かい年代議論を可能としている。こちらと比較すると2世紀半ばから後半の資料がルンケー城最下層の資料の主をなしているようである。従って、城郭の建設時期は2世紀に位置づけるのが妥当だろう。

#### b 利用最終期について

LK1地点で第1層、第2層からの出土遺物（Fig.18,19）が判断材料となる。LK3地点では第3レベルまでの上層部約30cm厚の文化層からの出土遺物や壺と鉢を合わせ口にした墓の共伴遺物が判断材料となる。

ここでは南中国（広西、広東、福建など）の紀年磚を有する磚室墓資料との比較を行うため、施釉陶器の特に碗に注目する。理由は施釉陶器の出土量は全体の遺物量において少量しか占めないが、ほとんどが在地の生産品と考えられる無釉陶器や土器などに比べ、北部ヴェトナム域内に搬入品としてもたらされた可能性が最も高いもので、南中国との直接の比較が可能と考えるからである<sup>(8)</sup>。

Fig.19-5はLK1,3地点の上層部出土施釉碗である。口縁直下の沈線、膨らみを有する体部、削り出された実芯の高台、高台部近くまで施された灰緑色青磁釉などが特徴である。在地製品と考えられる、ほぼ同型の実芯高台をもつ碗は、五足の筒型トチンによる重ね焼きを行っているが、上述例は個体焼成あるいは器面内央の施釉部をわずかに搔き取り、土塊を挟む重ね焼きを基本としており、焼成技術の異なりを見せている。

中国陶磁の変遷史においては明らかな高台を有した碗が出現するのは南朝期（420-589年）とされる。また、器形的には、器幅に対して器高が徐々に高くなっていく傾向が認められる（中国珪酸塩学会編1982）。この傾向はLK1,3両地点の遺物整理でも同様に確認でき、当遺跡の陶磁類の一部は、明らかに中国内地の変化過程に対応していることが理解できた。ここでは、資料も豊富で時期的特徴を出版資料からも判別しやすい施釉碗について、紀年磚室墓の資料が多い広東省の事例と比較する（Nishimura 2001）。紀年磚をもつ磚室墓資料（谷1999）は、副葬遺物の絶対年代の下限を押さえることができる。

広東曲江県南華寺の元嘉十八年墓（441年：広東省博物館1983）から出土している碗は、器幅に対し器高がまだ低いタイプでLK1,3地点と完全に同タイプとは言い難い。

揭陽県赤嶺口北坡墓群（3基）ではLK1,3地点と器形、高台部の整形法とも酷似した碗が出土している（広東省文物管理委員会他1984）。3基中、2号墓は大明四年（460年）の年号磚が出土し、他の2基からの出土品は2号墓と差はないとされ、ほぼ同時期と考えられる。広東英徳県石墩嶺の永元元年墓（499年：広東省文物管理委員会他1961）や同墓近くの各16,31号墓（徐1963）、韶関市西河工地点の南朝墓群（楊1983）で出土しているものはLK1,3地点の上層部資料と器形、施釉範囲等がほぼ同じである。浚洸鎮各16、31号墓は永元元年墓と、墓構造も遺物も同型であることが報告されている（徐同上）。

広東始興南朝墓群の赤東11号墓（6世紀後半に比定<sup>(9)</sup> 広東省博物館1982）の青磁碗になると、器幅に対する器高がより高くなり、LK1,3地点のものとは異なってくる。隋朝期（581-618年）になると、さ

らに器幅に対する器高がより高くなり、施釉範囲も高台部までに及ばなくなり、また口縁部の器体厚も厚みを増してくる（例：広東韶関市西河11号墓：林1986）。同様の資料は、南朝末期から隋唐初期の広東英徳県石墩嶺墓群のなかでも早い時期のもと考えられる墓からすでに確認されている（徐恒淋同上）。

以上の磚室墓資料よりLK1,3地点の上層部資料はほぼ5世紀後半から6世紀初めに当てはまる可能性が最も高く、遅くとも6世紀前半に納まるものと考ええる。また、LK1,3地点共に城郭利用最終時期と見られる6世紀以降の遺物は両地点とも最上層部で出土している。

### Ⅲ 城壁建設に関する知見

LK4地点LK5地点の発掘から、北側城壁の中央部での横断面が復元できた（Fig.166）。

発掘の所見から当城壁は以下のような過程で造営されたことが理解できる。簡単に城壁造営の過程を述べる。

第1工程：最初に粘土の基盤層に造営せんとする城堡の長軸に沿って細い溝（Fig.166のL14C層）を作る。これは設計の基本線のようなものであろう。LK1地点の最下層でも南北に沿った同様な溝が確認された。その溝の両側に粘土を中心とした盛り土を1m以上盛り上げ、前述の溝を基底としてV字状の大きな溝（幅4m、深さ1.5m）を形作る。さらに南側の城郭内側の盛り土層の上には、五銖銭を中心とした銅銭混じりの土層や瓦片を敷き詰めた土層を重ねている。そしてその上で、火を集中的に焚くような行為を行い薄い焼土層を作っている。

第2工程：前述のV字状溝に、炭化物や遺物混じりの層が純質な粘土に挟まるように間層として入れている。このV字状遺構の埋土の中には五銖銭が意図的に混入されている。また、この埋土の上層に相当するLK5地点のL8C層で銅鼓の鋳型小片が確認された。さらに城壁の内域からV字溝を横断するように盛り土が重ねられている。最終的にV字溝の真上では盛り土は2m以上と最も厚く重ねられ、城壁の主体部となっている。土盛りにはレンガや瓦片を混ぜた土を間層として幾層も挟み込んでおり、コーロア城の城壁建設でも用いられている工法であり、版築法とはやや異なっている。

第3工程：城壁上部では幾つかの大きな柱を埋めるための穴を規則正しい間隔で掘り、レンガ片等を隙間埋めに利用している。遺物の違いから城壁造営後の時期的に新しい工程と理解できる。木柵等の柱穴と考えられる。また若干の盛り土とレンガ構築も新たに行われている。

現在までの遺物研究では第1工程と第2工程の間にはほとんど時間差がないと見られ、2世紀に収まるものと考えたい。第3工程はLK1地点の中層、つまり3世紀あるいは4世紀に納まるようだ。

### Ⅳ 城郭内遺構の性格と城域の範囲

LK1地点の発掘では、鋳型、炉などを伴う青銅器の製作工房が確認され、その周囲に同様な痕跡が確認できることから、城郭内中央北域にかなり大規模な青銅器工房があることが理解された（DNCKQTCLL2000）。これは青銅器製作が城郭内居住者により管理されていることを示しており、城郭外での生産が行われている陶磁器類（例：Dai Lai:ダイライ遺跡）とは違った、より特別な政治・社会的意義が推測される。今後城郭内の生産工房に注目する必要がある。城堡の外側にも遺物分布範囲

は確認できる。すでに1986年の城郭の西脇のザウ川脇のBãi Đông Dâu(バイドンザウ) 地点の発掘では河川脇での厚い文化層が確認されているが、城郭が位置する旧ザウ川左岸の自然堤防帯ほぼ全域にわたってその厚い居住文化層が確認できる (Fig.2)。城郭外南域には仏教初伝の地とされるDâu(ザウ)寺が位置しているが、その周辺一帯も当時の居住文化層が確認できる。ザウ寺の位置が昔から変わっていないと仮定すれば、城郭に連続する居住域の中にザウ寺が位置していたことになる。城郭外に隣接する同時期の居住文化層を有す地域を“城域”として捉えるべきであろう。また、城郭外の東域と北西の水田地帯は磚室墓の墳丘が分布する墓域となっている<sup>(10)</sup>。

## V 非中国系あるいは東南アジア大陸部各地との関係を示す遺物

城郭域で出土する物は陶器、磚、瓦がほとんどを占める。それらの生産地は前述の施釉陶器をのぞいて、ほぼ在地製品と考えられるが、器種、技術の起源は、嶺南地域あるいはさらに中国内地方向に求めうる。しかし、中国系遺物以外に、量的に多くはないが非中国的な遺物が出土、発見されている。それらは当城郭を拠点としたであろう政権（集団）の性格を推察する上で非常に興味深い。以下にその幾例かを挙げて、その背景を論じてみたい。

Fig.167-1は人面紋瓦当である。この種の遺物は城郭域で比較的多く発見されている。LK 1 地点では上・中層部でほとんど出土せず、下層部から非常に多く出土した。

この人面紋の起源を求めることは容易ではないが、現在までに同時代資料として確認されているのは、ヴェトナム周辺域では当城郭遺跡、タインホア省のTam Thợ (タムト) 窯址や漢墓 (Janse 1947)、そしてTrà Kiệu (チャーキュウ) のみである<sup>(11)</sup>。チャーキュウの人面紋瓦当群は非常にモチーフの種類が多いこと<sup>(12)</sup>、逆にルンケー城址やタムト窯址では種類が限られ、特にルンケー城址ではその出土時期も限られることを考えあわせると、チャーキュウの人面紋自体に時期差を想定した方がよく、モチーフ自体はチャーキュウから北ヴェトナムへという伝播方向の方がその逆より可能性が高いと思われる。その出現もほぼ同時期であること、このモチーフがより頻繁に利用されているチャーキュウは後に、インド系宗教の繁栄をみていることなどを考え併せると、この人面紋瓦当もインド系宗教に関係するモチーフではないだろうか。この人面をインド起源のマカラ面とする意見 (Trần Q.V.&Hoàng V.K. 1986) を吟味する必要があるだろう。最近、南京で人面文瓦当が多量に出土し、それらは3国時代の呉のものと考えられているという (山形私信)。筆者は、製作技術的には中国起源だが、モチーフとしては東南アジアあるいはインド方向の可能性を維持しておきたい。そして、チャーキュウ、ルンケー、南京を結ぶものは、仏教と推察している。

また、蓮華文瓦当も上述全ての地域で確認できるが、ルンケーでは人面紋瓦当と共に最下層から出土しており、上層まで継続して、多量に出土する。東アジアでは蓮華文瓦当は仏教美術と関連が深いと考えられており (谷1992)<sup>(13)</sup>、城址外の南域にヴェトナム仏教初伝の地、ザウ寺があるし、当城址に深く関係していると考えられる土燔に関する唯一確実な文献資料である『三国志土燔伝』に、土燔往来時に胡人が香を焚く情景が記されている。こうした傍証を考慮すると、当城郭建設時に蓮華紋を仏教関係のモチーフとして瓦当に採用していた可能性は極めて高い。この仮説を、より補強するものとして、ルンケー 中・後期の瓦当文様の主体は蓮華紋であり、当時の交趾郡で仏教が栄えていたことが文献研究 (例: Lê M.T.1999) から裏付けられることが挙げられる。従って、蓮華紋瓦当と仏

教の密接なつながりが交趾郡でも確認できることを強調したい。

Fig.167-2は漁網錘である。同型式の漁網錘はタムト (Janse 1947)、チャーキュウ<sup>(14)</sup>、Óc Eo (オケオ: 西村1997b) の各遺跡で出土している。形態的には中国起源のものであるが、日常の生業で使用する道具で共通性が見られることは興味深い。おそらく水上交通の発達をもたらした結果であろう。

Fig.167-3は、Kendi (クンディ) と呼ばれるインドに器形起源を持つ水注で、城域内操業のレンガ工場の土の採掘で発見されたものである。東南アジアのかなりの地域で出土しており、ヴェトナムではチャーキュウやメコンデルタのオケオ文化の各遺跡 (Lê X.D. et al 1995) で確認されている。形式的にはチャーキュウで発見されている例 (山形1999) に近いが、この種の遺物は、オケオ文化のみならず、タイ、マレー半島など東南アジアの広範囲に見つかる物で、形態的共通性も高い。地域間比較による伝播方向 (例: 山形1997:174) を抜き出すのではなく、全体の変化の流れから地域性を抽出する必要がある。クンディと関連して、北部ヴェトナムで留意しなければならない遺物に、象頭をかたどった注口付きの壺 (Fig.167-4) がある。水注部は明らかにクンディ類からの影響であろう。器種的に中国内地に起源を求められる物でないことは明らかである (三上1984:10)。当例に限れば、接円線文が施されており、この文様は磚や後述の銅鼓に施される在地的な文様である。当例は中国、在地 (北部ヴェトナム)、他の東南アジア大陸部の3つの要素を備えた、極めて珍しい遺物で、ルンケー城址からドゥオン川を挟んで北約10kmのところに位置していたNghi Vê (ギーヴェ) 磚室墓での出土である。この磚室墓群では45×22.5×7~8cmの磚が報告されており (Parmentier 1918)、紀元後2世紀と考えられる。タインホアのLạch Trường (ラックチュオン: Janse 1947) にも類例があり、ともにその年代は紀元後2世紀まで遡る可能性がある。クンディが紅河平原域にもたらされたのも、それと同時頃と推察される。

Fig.167-5は連続半円文をコンパス状工具で書いた土器の胴部破片である。胎土はクリーム色の軟質、かつきめの細かいもので、他の土器・陶器とは異質である。同様な施文方式は現在までのところオケオ文化の土器文様 (Malleret 1960) にしか確認できない。LK3地点の最下層近くの出土であることから、紀元後2世紀頃まで遡るものと考えたい。

Fig.167-6は脚台付きの石皿で、城域内操業のレンガ工場の土の採掘で発見されたものである。柱状の乳棒と共に、東南アジア大陸部から、マレー半島、インドネシアで発見されるインド起源の遺物で、北部ヴェトナム域では他に発見例はない。同型式の脚台付き石皿はヴェトナムでは、中部ヴェトナム Trà Kiệu城やメコンデルタのオケオ遺跡 (Malleret 1960) で出土、発見されている。形式的にはこれらヴェトナム中南部で発見されている物と全く異ならず、おそらくそうした地域からの搬入品であろう。インド系文化を持つ人間が直接に使ったと考えうる遺物である。後代になると脚が高くなるように、当遺跡例はかなり早い時期の例と考えられる。紀元後4-6世紀頃と考えられる Cần Thơ (カントー) 省のNhơn Nghĩa (ニョンギア) 遺跡 (Nguyễn, D. T.&Nguyễn, P. A.1995) の出土例より古いと考えられることから、紀元後2-3世紀頃のものと考えたい。

Fig.167-7は土製銅鼓鑄型片である。1998年11月に城域内のLK2地点付近でレンガ工場の土採掘坑の排土より発見されたものである (Nishimura 1998a)。ヘーガー I 式銅鼓の鑄型としては初の発見例である。鑄造面の大きさは8.5×8cmほどで、弧の中心から外側に向かって、複段の櫛歯文、複段の接線二重円文、櫛歯文、米粒のような点文、さらに圈線が順に、スタンプ技法を中心に凹文で施文されて



おり、鼓面外縁部の鑄造面であることがわかる。鑄造面は灰赤色で、やや硬化しており、鑄型が鑄造後のものであることを示している。鑄型の多量の粉殻を中に含んだ軟質なもので、黒色炭化している。外側の圈線をもとに直径を算出すると50-55cm程で、ヘーガーⅠ式としては中型の部類である。そして第2例目がLK5地点の第8c層から出土した当片は、第1例目と同じ接線二重円文を持つもので同時期と考えられる。第8層は城壁形成層の第2工程の上層部に属している。先述したように城壁築造の第1と2工程は2世紀に限定でき、第3段階は3-4世紀に納まりそうである。鑄型片も2世紀に落ち着く可能性が最も高い。

問題はこの鑄型と型式的に類似した銅鼓は何かということである。

全く同じ文様パターンはないが、文様パターンを重視すればPhủ Phương Ⅰ鼓（ハータイ省バーヴィ山）に類似している。スタンプ技法と接線円文を重視すればĐắc Glao鼓（中部高原Cộng Tum（コントゥム）省）やThôn Mống鼓（Ninh Bình省）に類似している。明確なスタンプの多用ということを基準とすれば、Đắc Glao鼓やThôn Mống鼓により類似している。Phủ Phương Ⅰ鼓は今村（1992）編年の2b期（紀元後1世紀）、俵（1995）編年のⅢ-2期（紀元後1世紀後半以降：俵私信）、吉開（1998a）編年のⅠ式中期（1-3世紀）、Đắc Glao鼓やThôn Mống鼓は今村編年の3a期（2世紀以降）、俵編年のⅢ-2期、吉開編年のⅠ式中期となる。さらには、ラオス南部のChampasack（チャンパサック）周辺などにもĐắc Glao鼓に類似した例がある。こうした類似例は形態的にも特徴を共有しており、ヘーガーⅠ式のなかでも胃中型の特異な一群をなしている。こうした鑄型に類似した銅鼓の分布をながめると、決して紅河平原には存在せず、むしろその南の外縁からさらに中部の山岳地域周辺に分布を拡げているのが理解できる。

これはそれ以前のドンソン型銅鼓が紅河平原西域からゲアン省の山間部や平野部に密に分布し、さらには海路を経て中南部ヴェトナムやタイやマレー半島、インドネシア群島にまで分布を拡げているのとは明らかな違いが存在する。生産形態に関しては時の権力者たる交趾郡太守クラスの居城内で、銅鼓鑄造が行われていたことである。銅鼓が中国系、あるいは紅河平原在地の人間が造っていたかどうかは別にして、政権側の集団が銅鼓を青銅器工房の一角で生産し、それらを紅河平原の外域あるいはさらなる遠隔地の異質な集団にもたらすようなシステムがあった可能性さえある（例：西村2002b）<sup>(15)</sup>。銅鼓使用者と製作者が完全に異なっていると考えられ、紀元前後頃までドンソン文化の脈略で製作されていた銅鼓とは性質的に異なると考えてよい。

#### D 他城郭、土塁遺跡との比較

紅河平原ではルンケー城以外にも、Cổ Loa（コーロア：古螺）、Mê Linh（メーリン：麋泔）、Quên（クエン）城、La Thành（羅城：後のハノイ西域）などの古代の城郭が具体的遺跡として確認されている(Fig.168)。このうち考古学的調査が城域で行われているのは、有名なコーロアのみで、あとは簡単な踏査等が行われているに過ぎない。

コーロア城はハノイ市北域のドンアイン県コーロア社に位置している。文献で登場する封溪縣の中心という理解が一般的である（桜井1979）。Hoàng Giang(ホアンザン)川の湾曲部に沿うように城堡を築いており、河川との密接な繋がりを感じさせる。三重の城堡は非常に大規模で、最も外塁が周囲

長約8000m、城壁高は3-4m、中塁が周囲長約6500m城壁高は6-12m、内塁は周囲長1650mである（Trần Q.V. & Hoàng V.K.1984）。外塁と中塁は不均整な長方形に近い形で、内塁は均整のとれた長方形で18カ所の瓮城とも呼ぶべき突出した土塁が確認されている。各土塁は下層に石を敷き、その上に瓦片などを撒いた層があり土塁の盛り土の安定を図ったと考えられる。フングエンからドンソン文化段階までの遺跡が土塁下、あるいは土塁の外域で確認されている（Trần, Q.V.1969）。また、中塁と内塁の間のMả Tre(マーチェー) 地点でヘーガー I 式銅鼓が、大量の青銅製鋏先や三翼鏃と共に出土している（Nguyễn, Đ.B.1983）。問題は城郭建設とその存続の年代である。城堡基底部からは瓦が多量に出土しているが、瓦当、軒丸瓦、平瓦共に前漢末から後漢前半のものと考えられていた（Trường, H.C.1969）。筆者の採集資料では平瓦、丸瓦共に両面共縄蓆文を残すものばかりで、丸瓦は輪積み成形によるものである。布目を裏面に残す模骨法による成形が中心のルンケー城の瓦とは全く異なり、時期的に違うものと考えてよい。また、土塁上部で2世紀後半から3世紀初頭に比定できる磚室墓が見つかり、城郭建設と利用の年代下限を示している（Trần, Q.V. 1969）。2002年11月から2003年1月（第1次）、2003年10月に行われた、コーロア城の脇を流れるホアンザン川の対岸Bãi Mèn（バイメン）地点の緊急調査では、コーロア城の典型的な瓦と紀元前2-3世紀に比定可能な遺物の確実な共伴が確認されている(Nishimura&Trần T.K.Q.2005)。従って、城郭の建設もこの時期に収まると考えられ、従来の城郭建設年代に関してより遅い時期を想定した意見を否定している。ただ、この城郭の利用年代に関してはさらに不明な点が多い。多くの踏査にもかかわらず、城郭建設期の居住文化層を城郭内で確認できていない。紀元後2-3世紀の磚室墓も城郭周囲や土塁上で見つかったので、そのころに城郭やその周辺に居住があったのは確実であろう。しかし、内塁と中塁の間の居住適地と考えられる微高地でも瓦片は採集できても、居住を具体的に示すより種類豊富な考古学的遺物群は確認できない。内塁内は現集落が位置するため、その直下にある可能性は否めないが、単純にルンケー城と比較しても、居住痕跡の少なさは明らかである。筆者はコーロア城は少なくとも紀元後1-3世紀頃には現存する3重の城郭を全面的に利用するほどの大規模な利用はなかったと推察する。

メーリン城はヴィンフック省Yên Lãng（イェンラン）県Mê Linh（メーリン）社のHà Lôi（ハロイ）村に位置しており、南には紅河本流が流れている（Phan, Đ. D. 1973）。徴姉妹を祀ったđền（神社）があり、当城址は紀元後40年に徴姉妹が義挙した際に、最初に攻め落とした麋冷縣の城であると考えられている。城壁は二重であったようで、外壁は壁高1.8m、壁のすそ幅4.6m程度のもので、内壁との間はわずかに2.65m程度しか離れていなかったとされる。城郭の規模は破壊が進んでいたため、詳細は不明だが、正方形に近く、面積が36000㎡あったとされており、一辺の長さが190m前後となる。土塁からコーロア城やルンケー城で見つかるものと同類の瓦が見つかるから、少なくとも後漢並行期にまで遡ることは間違いない。

クエン城はハータイ省クオックオアイ県Liệp Tuyết(ラップトゥエット) 社Đại Phú（ダイフー）村に位置し、西側にはTích（ティック）川（下流でダイ川に合流）が流れている（Đỗ,V.N.1970b）。残存の程度はよくないが、一辺170m、高さ1.5-2mの土塁が隅丸方形をなしていたようだ。十二使君時代（10世紀後半）の杜景碩（Đỗ Cảnh Thạc）の根城とされているが、土塁からコーロア城やルンケー城と同類の瓦類や後漢代と考えられる土器片が確認されており、城郭建設が後漢代にまで遡るのは確実である。

羅城はハノイの西、南西をめぐる蘇歴江沿いの城址がその一部と考えられ、増修築を重ねて、昇竜城そして現ハノイへ至っている。現在、市街域との重なりから、その規模や存続時期を考古学的に確認するのは非常に困難である。城郭としての初出は蘇歴江の河口脇に李賁が梁軍を阻むため城柵を立てたという『陳書・高祖紀』の記述である（Trần, Q.V.1960）。以後、交趾太守丘和による618年<sup>16)</sup>の子城建設（周囲長が900歩：約1600m）<sup>17)</sup>という『大越史記全書』の記述が続き、安南都護、張伯儀による767年の羅城築城、同じく張舟の809年増築をへて、868年に同じく高駘の大修築（『資治通鑑』では周囲長が3000歩（約4700m）、『大越史記全書』では約1982尺約6160m）に至っている。規模・呼称において、7-8世紀以降は唐の城郭建設思想にのっとり、都城的城郭としての道を歩んだと考えられる<sup>18)</sup>。仮に李賁の城柵が子城や羅城のさらなる前身であったなら、その規模はさらに小さかったであろう。

この他にThành Vườn（タインヴオン）やThành Dền（タインゼン：Phạm, Đ. D. 1973）など、徴姉妹や馬援関連の城塞として報告されたものもあるが、それぞれ陳朝期の小規模土塁（西村1999年1月踏査）と先史時代の居住遺跡（Hà, V.P.1998）の誤認である。

中部ヴェトナムのQuảng Nam（クアンナム）省Thu Bồn（トゥーボン）川中流南岸に位置するチャーキュウ城は、林邑の都、典冲に比定されている。城址は東西に長い長方形を呈し、東西幅約1500m、南北幅約550mの規模がある。城郭内では建築基壇を含んだ厚い居住文化層、盛り土層が確認されている。年代は紀元後2世紀から3世紀にさかのぼると考察されている（山形1999）。また、城郭自体の切断発掘（Nguyễn C. et al 1991）により、33m幅、3.1m高の土塁の中央基底部には石が撒かれ、さらに両端にレンガを少しずつ奥にずらしながら、十数段積み上げているのが確認されている。基底部の作り方、レンガの積み上げ法などはルンケー城と類似している。

広西壮族自治区興安県秦城遺跡は靈渠と大溶江が交わる三角州上に位置し、周囲長が1070m程のややゆがんだ長方形を呈している（広西壮族自治区文物工作隊他1998）。10m幅ほどの土塁の外側には濠が巡っているが、平面図からはさらに濠の外側に途切れ途切れの土塁状のものが連なっており、外塁があった可能性もあるようだ。土塁の四隅には突出した角楼が築かれており、コーロア城の内塁の瓮城的突出部とやや類似している。また、土塁の基底部からは川原石がかなり意図的に混ぜられており、これもコーロア城やルンケー城で磚や瓦の破片を混ぜて、盛り土の安定を図っている方法と同じ発想であろう。当城址は出土遺物から前漢中期の造営で、後漢期に増築したと考えられている。瓦などはコーロア出土のものと類似しており、城郭造営技術共に共通性を感じさせる。

以上より、紅河平原の唐代以前の城郭遺跡においてコーロア城の規模が突出して大きく、周囲長1800m強のルンケー城はその次に大きいことがわかる。しかし、コーロア城は前漢並行期の建設である。後漢並行期には城址に磚室墓が造営されるなどして、前漢並行期ほどの大規模な面積での城址利用はなかったと考えられる。また後漢並行期のルンケー城域ほどの厚い居住文化層、巨大な青銅器工房などもここでは確認できていない。従って、ルンケー城が建設された紀元後2世紀には、コーロア城は紅河平原域の支配中心をなすような存在ではなかったと結論できる。

また、ルンケー城域の厚い居住文化層、巨大な青銅器工房などは他では確認できない。現在までの事例で考えるなら、コーロア城とルンケー城は規模、様態として中心的城郭としてふさわしい。ルンケー城はその建設時以降、紅河平原最大の城郭で、交趾郡太守クラスの人物が居した城郭と判断し

てよい。また、それらよりずっと小規模なメーリン城やクエン城は、各縣治クラスの城郭であろう。クエン城は水経注の記載を頼りにするなら句漏縣あるいは安定縣の県城ということになるだろうか。現在のところ、縣治単位で比定できる城郭遺跡が非常に少ない。中国南部では県治所在地が城壁を持たなかった例は宋代以降でも少なくなかったようで（伊原1993）、城郭が後世の諸活動で消えただけでなく、もともと城壁がなく、県城として確認できない場合が多いと考えねばなるまい。土塁の土盛り法としてルンケー城はコーロア城や中国南部の城郭やチャーキュウ城と共通点を有し、磚積み上げによる土塁の安定化に関しても、チャーキュウ城や中国南部の城郭と共通点を有す。ただ、磚を土塁中に積み上げる点など、より早い時期に建てられたコーロア城や興安縣秦城などとの相違点も存在する。また、これらの城の立地として興味深いのは全て、河川の脇に位置し、水上交通の利を考慮していることである。

## E ルンケー城は羸 城ではなく龍編城

本章ではこれまでに述べてきた考古学的データに沿って、文献資料の再照射を行ってみたい。特にルンケー城の年代と文献に登場する交趾郡縣名比定は密接な関係をもっており、考古資料の発言の意味は大きいと考えるからである。

前述したようにルンケー城は現在確認されている羅城以前の城郭遺跡において、コーロア城に次ぐ第2の規模を持ち、その利用期間から交趾郡の中心的存在であることを前節でのべたが、このことは考古学的資料（大規模な青銅器工房、大規模な磚室墓群）からも裏付けられる。これらより、ルンケー城は交趾郡の中心城郭と考えてよいように思える。では、当城址は文献に登場するどの県に位置していたかが問題となる。ここでは無批判にルンケー城を羸隲城あるいは土壘の居城と同一視する考えから離れて文献資料の見直しを行う。

紅河平原地域で最も早く登場する確実な城郭の記述は『後漢書24馬援伝』である。「明年正月（43年）……援所過輒為郡縣治城郭、穿渠灌溉」とあり、馬援が徵側・徵貳の起義を討ち、西干県分割後、城郭を築いたと考えられる。その次に出現する記述は『水経注37葉榆水条』に「水自麋冷縣東、逕封溪縣北……又東逕浪泊……又東逕龍淵縣故城南、又東左合北水」とあり、龍淵（編）縣の故城の存在が記録されている。しかし、「羸隲縣」に関しては「中水又東逕羸隲縣南」と記述するのみで、『交州外域記』を引用して「縣、本交趾郡治也」と伝えている。これは前漢代の郡治のことを指しているであろう。他の事績や城郭などについては何も記されていない。このあと龍編や羸隲の城郭に関する具体的記述が登場するのは、9世紀初頭成立の元和郡縣図志を待たなければならない。『元和郡縣図志38嶺南道五』には龍編縣の記述部分に「交州故城在縣東十四里吳時刺史陶璜所築」として、3世紀末の交州刺史陶璜が築いた故城の存在を伝えている。現城址から考えるなら、位置的に最も近いのはルンケー城である。羸隲については宋平縣の記述部分に「羸隲故城在縣西七十五里本漢縣屬交州郡有差官後漢交趾刺史理於此後徙龍編」として、龍編以前の刺史が治した故城の存在を伝えている。さらに「南定縣..東北至府60里本漢羸隲縣地」として、羸隲縣が唐代の南定縣に位置していたことを伝えている。元和郡縣図志の距離や方向についての信憑性は先学が疑問を呈しているが、例えばコーロア城と同定できる”安陽王故城”については宋平縣の県城から31里東北としており、先述の陶璜の故城が龍編と

考える場合同様、距離や方向に大きなずれはないと思われる。羸𨵿縣が昔位置していた南定縣は府より南西へ60里、羸𨵿故城は西へ75里とされている。検証を行う必要があろう。以上より、羸𨵿縣が龍編以前の郡治存在地であることはわかるが、その具体的故城の位置に関しては現ルンケー城と比定できる記述はない。

次は士燮に関する見直しを行う。羸𨵿城を士燮が治した故城としての認識は14世紀成立とされる『越南幽霊集』の「王治羸𨵿及広信二城」という記述にまでしか遡らない（桜井1979:19）。また、ルンケー城を士燮の故城かつ羸𨵿城として認識した確実な物証も、城内の士燮廟の碑林にある永寿六年（1661）記の羸𨵿城重興聖廟碑までである（Nguyễn, T. N.1999）。唯一縣名に関係する記述は龍編侯に封じられているということのみである。この封爵名である龍編侯が交趾郡郡治の龍編と重なるならば、士燮関連の遺跡伝説が集中するルンケー城は龍編城であったことを想定する必要がある。

『三国志49士燮伝』が伝えるところでは、交趾郡太守の士燮は二度の封爵を受けている。最初は建安五年（205年）頃に交趾郡の太守を漢朝に安堵された後、「是時天下喪乱、道路断絶、而燮不廢貢職、特復下詔拜安遠將軍、封龍度亭侯」として、龍度亭侯に封じられている。二度目は呉の孫権からの封爵で、「建安末年（220年）……権益嘉之、迁衛將軍、封龍編侯」と記すように、士燮は益州の土豪を寝返らせた功により、龍編侯に封じられている。士燮と同時に、士燮の弟、合浦太守であった士壹は偏將軍、都郷侯の封爵を受けている。士燮が後漢政權から受けた龍度亭侯の亭侯は、後漢代の爵級では郷侯とならんで卿や亭などの集落の戸を食む爵級の一つと考えられており、士壹の都郷侯も都亭侯などと並んで、後漢代より続いた、縣や郷などの城郭があるような集落を封地とする爵級と考えられている（守屋1968:218-219）。守屋は都郷侯や都亭侯に地名が冠せられてないのは、都卿・都亭が縣城や卿城に密接したものであるから、固有地名を冠す必要がないとしている<sup>(19)</sup>。両封爵名が封地を有す爵級であること、後漢や魏の爵制においては縣侯には地名のみを冠している場合が一般的であることより、龍編侯も治所と爵名が一致する龍編縣侯と考えるが、念のため他資料にもあたっておく。

同じく『三国志52歩騭伝』では「騭因承制遣使宣恩撫納、由是加拜平戎將軍、封広信侯」とあり、交州刺史であった歩騭が広信侯に封じられている。『宋書38州郡志』によれば、建安8年（203年）に交州刺史は蒼梧郡広信県を治所とする記述があり、交州刺史治所と封爵地名の重なりがここでも確認される。

また、士燮の死後に広州刺史となった呂岱は、士徽配下の甘醴や桓治の反抗軍を撃破した功により、番禺侯に封じられている『三国志60呂岱伝』。番禺は広州の郡治所在地である。

『宋書92杜慧度伝』には「義熙七年（411年）杜慧度龍編縣侯、食邑千戸」とあり、交州刺史の杜慧度が、廬循の龍編への侵攻軍を撃破した功により、龍編縣侯に封じられ、食邑を得たことを示している。そして、『南史70 杜慧度伝』では、子の杜弘文は父を継ぎ、交州刺史となり、龍編侯の爵位も承襲している。両者の場合、龍編が交州郡治である時代に、交州刺史かつ龍編（縣）侯であったことになる。注目すべき事実、交州、広州の太守、刺史となった人物が改めて、賞される形で郡治や刺史治所の所在県の侯に封爵されていることである。刺史や太守クラスより下の官吏にこうした封爵が与えられた例はみうけられない。例えば三国時代末に交趾郡の吏であった呂興は、『三国志卷4 陳留王紀』では魏が呂興を魏側に着かせるため、陳留王が上督交州諸軍事、大將軍、定安縣侯に封じる

命を出している。これは交趾郡の一官吏（少なくとも太守クラスではない）を交趾郡の非郡治在縣の一縣侯に封じている例である。以上の根拠より、士燮が封じられた龍編侯も、治所名と爵位名が一致している縣侯であったと判断する。

交趾郡郡治として龍編が機能していたのは後漢代のある時期から、南朝あるいは隋代までと考えられ、その存続期間はルンケー城の存続期間にかなり対応する。従って、筆者は上述の各理由によりルンケー城は羸隲城ではなく龍編城と考える<sup>(20)</sup>。

ではルンケー城が龍編城であると考えた場合に、どのような問題が新たに生じるであろうか？今後の文献史学と考古学の協力という意味をこめて以下に綴っておきたい。

1：文献が記す羸隲縣はどこにあったのか？つまり、龍編以前の郡治はどこであったのか？

吉開（1998b）が、伝タインホア出土の古璽「胥浦侯印」の研究で、前漢九真郡の郡治であろう胥浦が南越の官印制度の中に存在したことを論証したように、南越時代に武帝以後の郡県制に連続する地域呼称や官制が存在していた可能性が高くなっている。『漢書』、さらには『交州外域記』などが伝えるように、龍編以前の郡治が“羸隲縣”にあった可能性は高いはずだ<sup>(21)</sup>。しかし、その当時、羸隲に大きな城郭などがあったと想像するのは早計であり、ルンケー城より、遙かに小規模の土塁や集落を想定しておく必要もある。交趾郡の縣比定を含めた地名の位置問題については7章で詳述した通りである。

また、コーロアの位置づけも気になるところである。この城郭は規模において突出しているが、城郭としての全面的利用が長きにわたったとは考えられない。後代の小規模な利用はあったかもしれないが、城郭として機能した役割は非常に短い期間であったのかもしれない。城郭が本格的に利用された時期については、安陽王伝説を含めた漢の本格支配下にはいる以前の歴史的脈絡から再考する必要がある（第15章で関連問題に言及）。

2：『水経注』にある「龍淵縣故城」や『元和郡縣図志』にある陶璜が築いた城はこの城に相当するのか？

仮にこの故城がルンケー城であった場合、故城の南を流れる川（北水南水）はDâu川という可能性が出てくる。しかし、この場合、龍編城は水経注記載の時点ですでに放棄されていたことになる。より別の可能性としては龍編に郡治が遷る以前の龍編縣の城という可能性がある。『水経注』では龍淵縣を龍編縣に改名した理由を故事に併せて記載している。龍淵縣故城であるから龍編縣改名以前のかなり古い時期のものである可能性も高い。

陶璜に関しては、ルンケー城の利用期間が紀元後3世紀を確実に含んでおり、陶璜を祀るdền（神社）や伝承を記す碑文がルンケー城周辺にあることから（Trần,Đ.L.1999,Trần,Q.V.1999）、陶璜がルンケー城を修築・改築した可能性も考えるべきであろう。

3：龍編から宋平（現ハノイ）に郡治が移るのは7世紀初頭とされているが、ルンケー城は5世紀末から6世紀前半が終末と考えられ、それ以後の利用痕跡が非常に微弱である。従って、50-100年程度の空白期間があった可能性が高い。その間、郡治的機能を果たしたのは別の場所であったのか？龍編として他の場所に移っていたのであろうか？6世紀から7世紀初頭は李賁の反乱・即位、李仏子の反乱、ヴェトナム側の所伝による趙越王など、在地勢力の伸長が推察されている（後藤1975）。そうした状

況が、既存の城郭の破壊・放棄あるいは他地移転に関係した可能性も配慮すべきであろう。

## F おわりに：ルンケー城をめぐる歴史的環境

ルンケー城を拠点とした政権の背景とその性質にふれておきたい。

『三国志士燮伝』に伝えられるように士燮は後漢末の中国内地の混乱を利用して、南海交易による利益を背景に一族と共に半ば独立国のような強大な政権をうち立てている。発掘や遺物からも、2世紀あるいは3世紀初頭に各地との繋がりを示す遺物が見つかっており、その国際性の豊かさを裏付けているばかりでなく、仏教関係者あるいはインド系の外来人がこの城郭内で活躍していた可能性がある。仏教初伝の地、ザウ寺が城郭外域内にあることや蓮華紋や人面紋の瓦の多用、青銅器工房一角での銅鼓の鑄造などは、ルンケー政権の性質を考える上で興味深い。おそらく政権内部には多様な文化・民族背景をもった人々が参画していたのではないかと推察される。当時の文献・言語学的研究から士燮政権の多様な背景を論じた研究もある（O'Harrow 2001）。

ただ、その現象が4世紀以降も存続したかどうかは疑わしい。なぜなら出土遺物に他地域との交流を示すものは、ルンケー城上層部では中国内地系の遺物以外あまり見あたらないからである。これは筆者らが行った前述の磚室墓の分布研究でも同じであり、紀元後2-3世紀の磚室墓は紅河平原全域に広範囲に数多く見られるが、それ以後のものはハノイやバックニン周辺に限られ、数量的にも少ないことと関係しよう（西村・西野2003）。紀元後2-3世紀の磚室墓は低地の海岸寄りの農業不適地のような地域でも見つかっており、その背景には河川水路交通の発達を考える必要がある。おそらく航海距離が短い船の中継交易拠点として利用されたのではないかと推察される。そして、三国時代以降、雷州半島の徐聞や合浦（楊1985）と同様、紅河平原域がふるわなくなるのは、大陸沿岸航路から海南島を中継地とする航路への移行が影響したと考えられる。呉による海南島朱崖郡復活や広州刺史呂岱の南海宣化使節もこの脈絡で考えるべきであろう。そして、紅河平原の交易中継地としての重要性は薄れ、逆にそのことが中国政権の紅河平原への関心低下、在地勢力の伸長を促したのではないだろうか。従って、ルンケー城自身がそうした歴史的变化の中心舞台であったはずで、先述した城の規模の縮小の可能性などはこうした変化の表れであろう。特にルンケー城後期については紅河平原内部の在地勢力の伸長とも絡んでくるようだ。

また、紅河平原からさらに地域を拡げてみた場合、嶺南、中部ヴェトナムとの密接なつながりがあることが物質文化の視点からも明らかにできる。近年、論じられている新しい地域史の枠組み（胡1999、吉開2002）に好適な素材ともなろう。支配する中国政権-抵抗するヴェトナム民族、あるいは漢民族の南進による開拓・開化といった硬直した歴史観では、こうした地域間の密接な関係を理解することは無理であろう。今後はこうした類似、相似点がどのようにして生じたのかを、文献資料がもたらす硬直なイメージから離れて、具体的研究をもとにして明らかにしていく必要がある。

## 注釈

- (1) 本稿では文献の羸婁故城と現Luy Lau（ルイロウ：羸婁）城址を同一視する考えに疑義を呈するため、現ル

イロウ城を文献上の羸隲（縣あるいは故城）とは区別して、城郭内の村名よりルンケー城址と仮称しておく。ただ、研究史上必要な場合に限り、“ルイロウ城”という呼称を採用する。羸隲の“羸”に関しては、異字の議論（Madrolle 1937）が存在するが本稿の内容とは関係がないため“羸”に統一する。

(2) 羸隲が交趾郡の縣名として最後の正史に登場するのは『南齊書14州郡志』である。

(3) この年代根拠は極めて怪しい。ルンケー城址の条磚はサイズ上、大まかに、5種類に判別可能。最小型サイズのサイズは、唐代と考えられる磚室墓（例Triệu Khúc出土例：Trần, Q.V. & Phan T.B.1973）やルンケー城外のBãi Đình（バイディン：Đỗ, V.N. 1970a）などの磚窯の磚サイズとは正確には一致しない。また、北部ヴェトナムの唐代の磚室墓は無文磚がほとんどを占めるのに対し、ルンケー城は有文類が圧倒的に多い。磚のサイズは同時期に幾つかのサイズが存在しており、一時期一サイズではない。その中で、最大サイズによる時期指標化は可能だが、小型品に関しては、文様や胎土などから時期判別を慎重に行う必要がある。さらには1986年発掘の報告での磚サイズ記載には明らかなミスが見られ、全面的に信用するわけにはいかない。

(4) 城壘や城郭域の変遷を考える上で興味深い考察である。現ルンケー集落は城郭域内の東端に位置し、土壘廟を中心とする城郭西域は東域よりやや高度が高い。城郭内の機能域が東側が後代に狭小化し、その部分は一般の集落になり、西側が廟や寺の聖域として残っていたのであろう。桜井（1979）は土壘死後の早い時期の神格化を推察しており、そうした現象を反映しているのではないかと考えられる。

(5) 唐代後半期あるいは10世紀以降の遺物が各地点で出土しているが、量的にも城郭利用最終時期の遺物量と比べ、圧倒的に少ない。こうした遺物と筆者が論じる城郭最終期の遺物群とには明らかな時間的隔たりが存在する。従って、城郭利用の終末期からその後の城郭内域の再利用開始までには、ある程度の時間幅（約300年以上）が存在したと考えられる。もちろん再利用開始後の城郭内土地利用は現在の集落のように、全く違ったものと考えられる。注4で述べたような城郭内西域の聖域化の反映であろう。特に陳朝期の遺物が最も多く、遺構としての確認も行われている現象は城郭としての再利用ではなく、城郭廃棄後にできたであろう土壘廟の盛行を反映していると考えられる。

(6) 年代比較は広州漢墓（広州市文物管理委員会他1981）などの木槨墓出土の遺物比較である。

(7) ドンソン文化段階と後続の漢系文化段階の時期区分については徴側・徴貳の反乱前後と判断しているが、ドンソンの物質文化自身は銅鼓（今村1992、吉開1998a）やドンソン系銅盃（吉開1995）などに象徴されるようにその後もある程度の時間幅をもって継承されている。ただ、ヴェトナム研究者にはドンソン文化終末期の漢系文化の浸透の様相を正確な時間軸に沿って評価する意識が弱い。

(8) ヴェトナム人研究者はこの時期の陶器研究において、自然釉のかかった陶器と施釉陶器の判別を行っていない。LK1,3両地点共に、Đại Lai（ダイライ：バックニン省）窯あるいは Bãi Đình（バイディン：ルンケー城址外域）などの製品が多く出土しているが、筆者の分析でこうした窯址の製品は碗外面を中心として、薄い自然釉しか観察できず、碗内面に厚いガラス質の釉がかかっているものは、全て重ね焼き時に最上部におかれたものと判断できた。

(9) 報告者は（南朝期420-589年）を前・後期に分けて報告しているが、この赤東M11号墓に関しては、遺物が隋唐墓に近い物が多いことから南朝晩期に比定しているため、6世紀後半としておく。

(10) 北西域の墓域はそのほとんどが過去5年のレンガ工場の採土により消滅した。

(11) 中国ではわずかに江蘇省の東陽城（尤振堯1985）に表採品が一例、秦代の瓦当として報告されているが、



年代の根拠はない。数量的には少なそうだが、異人的な顔として認識されており、系統関係としては注意すべきであろう。

(12) チャーキュウの遺物に関してはNguyễn Trường Thăng神父 (Trà Kiệu 教会) のコレクションが各時期にわたる遺物を含んでおり、瓦当のバリエーションも多い

(13) 蓮華紋瓦当が一般化する現象はヴェトナムでは比較的早く (後藤1968)、中国より先行する可能性がある。中国では秦代にすでに出現しているが、一般化するのには仏教隆盛化に伴う六朝代である (上原1997)。ただ、中国南部に関しては三国から5世紀中頃までの資料が乏しく、ヴェトナム同様、より早く用いられている可能性がある (谷1992)。

(14) この場合、チャーキュウの早い時期の資料 (つまり Lũng Khê 城の前期並行段階: Nguyễn C., Lâm M.D.&Vũ T.N. 1991, Glover 1995, 山形1998) に蓮華紋瓦当がほとんどない (あるいはない?) ことが対照的現象として興味深い。この違いは蓮華紋と仏教の関係を前提とするなら、その時期チャーキュウでは仏教がチャーキュウ城周辺ほどには浸透しなかったのかもしれない。前述したようにチャーキュウで盛行した人面紋の意味を考える必要がある。また、ヴェトナム南部のオケオ文化で頻出する注口土器 (Kendi) を宗教儀礼と密接に関連したインド起源の土器と見なすなら、チャーキュウ城は人面紋瓦当と注口土器を頻用するインド系の信仰・宗教が当時盛行していたと考えられ、それは仏教ではない可能性がある。政権と宗教の結びつきを考えるうえで重要な問題となろう

(15) 吉開 (1998a) が指摘する”銅鼓の性質の柔軟性”は、ヴェトナムにおいてはより後代のムオン鼓とよばれる類Ⅱ式が参考となる。これらの銅鼓は、仏教やキン族の石彫のモチーフが頻出し、ムオンやタイなどの山岳民が鋳造したものではなく、キン族が鋳造し、贈与品あるいは商品として使ったものとする。多量に出土する陶磁器同様、平地民と高地民の関係の脈絡で銅鼓を考えるべきであり、Lũng Khê 城の鋳型もそうした銅鼓生産のためのものであったのではないか。

(16) Maspero (1910), Trần Quốc Vượng (1959) 共に子城建設を621年としているが、『大越史記全書』では武徳元年 (618年) である。

(17) 1尺を29.5-29.8cm、1歩を6尺とした場合の計算である。後述の大羅城の規模は1歩を5尺で計算している。

(18) 唐代の揚州城では、子城と羅城が隣り合わせに位置している。小規模な子城は以前より存在したもので、その南隣に、より大規模な羅城を増築したと理解されている (紀1979)。この理解は、ハノイの羅城にも当てはまるかもしれない。子城という呼称は、羅城があって成立するものであろうから、以下、2つの可能性が想定される。一つは618年に子城のみならず、羅城も建設されていた可能性、もう一つは、767年以降の羅城建設 (増築) により、以前からの城域が子城と呼ばれるようになり、結果的に大越史記全書が618年建設の旧城郭を子城として記録した可能性である。この丘和の子城建設に関する大越史記全書の記述は独自の記述を含んでいる可能性が高い。

(19) 守屋の考えに基づくなら龍度亭侯の龍度は集落名である。龍編 (龍淵) と関係する地名なのではないだろうか。

(20) 龍編をバックニン市やYên Phong (イエンフォン) 県に求める議論は、現在までのところ候補となるような城址さえ見つかってはいない。郡治であった城郭が小規模な土塁とは考えられず、跡形さえ確認できていないことに疑問を感じる。

(21) Trần Quốc Vương (1959:35) は羸婁を南越時代の交趾郡域の治所と考えており、注目に値する。

# 第13章 ヴェトナム集落の形成：ナムディン省バッコック集落と周辺域の考古学調査から

## A はじめに

村落や集落を対象にした諸研究が盛んな現在の東南アジア研究であるが、そのなかでも時間軸を基礎に据えた歴史的研究は集落や村落の形成、さらにはそのなかで起きる様々な社会現象を考察する基礎を提供してくれる。しかし、その集落やそれらを含む空間を起源に遡って歴史的に研究した例は皆無に近い。理由はそうした分析に耐えうる史料の欠如である。これに対して私が専攻する考古学は先史時代において、研究対象の多くは集落であることが多い。集落遺跡を調査することは発掘の面積内において人々がいつからいつまでどのように居住したかを考察することになる。では、考古学で現在の集落を研究したらどうなるであろうか？考古学は歴史学のように細かく時期区分した枠組みで議論することはできないが、ある物事の始まりから終わりまでを、おおまかな時間設定（例：半世紀、1世紀単位）で議論することは得意としている。

本論では東南アジアのなかでも“村落”研究が非常に盛んなヴェトナム北部の紅河平原域の下流域にある、ナムディン省Vụ Bản(ヴバン) 県のBách Cốc(バッコック) 村とその周辺域の考古学調査（1996-2002年）に基づいた集落形成の問題について論述してみたい。

バッコックとその周辺の学際野外調査研究は、桜井由躬雄氏により1994年より着手・組織されたもので、筆者は考古学担当として1996年より2002年まで参加し、考古学調査や各種物質文化調査を行ってきた。それぞれの調査成果は『百穀通信』（1995年よりヴェトナム村落研究会発行、14号まで発行済み）に、その基礎報告がなされ続けている。

## B バッコック村とその周囲の地理的環境 (Fig.169)

バッコック村は、行政的にはナムディン省ヴバン県Thành Lợi（タインロイ）社に所属している。フランス植民地時代は百穀社として独立した行政村であったが、独立後、村落の再編によりより大きな範囲で成立したタインロイ社の一部となっている。以後、フランス植民地時代以前のバッコック集落を指す時は漢字名で、独立以降はカタカナ名で、使い分けることにする。

紅河の大きな支流にあたるナムディン川は紅河平原下流域の亜中心的都市ナムディン市で紅河から西側へ分流し、ホアビン山塊に沿って流れていたĐáy（ダイ）川の下流で合流している。そのナムディン川に北接しているのがヴバン県で、ほぼ県の南央にバッコック村が位置している。バッコック村は、ナムディン川から西へ逆“コ”の字状に分流していたCốc（コック）川の西側に発達した自然堤防上に立地している集落である。集落は“S”の字をやや崩したような形状を呈しており、S字の頭に位置する北端の小集落がXóm A（ソム A）、集落を南北に切断する形で村の中央部を東西に走る道路を挟んで北側がXóm B（ソム B）、南側がXóm C（ソム C）となっている（Fig.169）。これらの集落のなかに

屋敷地と池が、かなり密に分布している。

周囲の集落としては約500m離れた西の南北に長い微高地上に発達したĐương Lai (ズオンライ)、同じく約500m離れた東に方形を呈する集落Phú Cốc (フーコック)、コック川に沿って位置する小集落Ấp Phú (アップフー) とTrại Nội (チャイノイ)、バッコック村に北接するように発達したQuả Lành (クアリン) やその西に位置したMỹ Trung (ミーチュン) などがある。これらは全て同一行政単位 (タインロイ社) に属している。またバッコック村の北には大型村Tân Cốc (タンコック) が位置している。整然と区画に応じた家々の配置、方形に近い集落のプランなど前述のPhú Cốc (フーコック) によく類似しているが、人口規模の上では圧倒的に多い。

バッコック (百穀) は1945年以前において独立した“社”であり、現在のソムA、ソムB、ソムC、アップフー、チャイノイを含んでいた。しかし、地形的には独立した小集落であるアップフーとチャイノイに関しては成立が新しく (1930年代成立)、古くからある集落はそむソムA、ソムB、ソムCである。

人口規模は1992年時点で、フーコックとズオンライとバッコックを含んだコックタイン (Cốc Thành) 合作社で、戸数は1000戸強、人口は4000人強である。合作社の管理面積は約3.85Km<sup>2</sup>であるから、人口密度は1000人/Km<sup>2</sup>を越えている (桜井1995a)。

バッコック調査隊資料では 旧バッコック社の北半分に相当するソムAとソムBのみで約290戸、ソムCで約210戸、ソムBのみで約500人が居住している (桜井1996、菊池1997)。ソムA、B、C全体、つまり旧バッコック社では2000人前後の人口がいると推定される

バッコック村では、村の構造を考察する上で大切な伝統的宗教施設は、独立戦争や直後の社会混乱で残存状況が良くないが、Đền (Đền :日本の神社に近い)、Đình (亭)、Chùa (寺) は全て現村落の中心部、つまりソムBとソムCが接するあたりに位置していた。因みに現在の村の小学校や農業合作社 (超村落レベルの生産・生活サービス機関) はこれらの跡地を利用している。

## C バッコック村と周辺の歴史的背景

碑文や家譜等の各文字史料や古老からの聞き取り調査により、バッコック村にや周辺に関して以下の歴史的沿革が明らかになっている (i.e. Bui V.T. 1997、桜井1998,2000、嶋尾2000、Sakurai 2002)。

バッコックは現フート省のViệt Trì (ヴェトチ) 近くのBách Hạc (バックハック) から12の族による入植が村の始まりと伝えられている。ただし、それ以前からの居住可能性を唯一想像させる資料として、バッコックとズオンライにおいて、楊文娥 (10世紀前黎朝始祖黎大行の妻) が祀られていることが挙げられる。

また、Bùi Doãn (裴允) 家の家譜ではバッコック村に移住してきたのが陳朝期と伝え、14世紀に裴允元 (Bùi Doãn Nguyên) が、本貫の北寧省玉潤社より百穀社に学問を教えに来た人物で、ちなみに彼の長兄である裴募 (Bui Mộ) は傍眼に合格している。その子の裴光家 (Bùi Quang Gia) は郷貢に1373年に合格している。まだ原資料での確認は行っていないが、ナムディン周辺の歴史に詳しいBùi Văn Tám (1998) によれば、裴允元自身も1304年に科挙に合格しているということである。

黎朝を創始者黎利に従って、属明期（1407-1427年）からの独立戦争に参加し、後にその功績を史書に書き伝えられた裴於台（Bùi U Đài）が、バッコックの出身である。裴於台は進士合格者とされるが、史書等に、その事実は記されていない。Đền Nhật Thôn（第一村神社）に祀られており、開国功臣としての神号が与えられている。15世紀前半の進士合格者（とされる）である裴於台（Bùi U Đài）に対する信仰集団が、現ソム A とソム B（旧第一村の一部）を中心として、15世紀後半には成立していたとされる（桜井1998）。

20世紀初めに編纂された阮功氏家譜では、阮公朝（Nguyễn Công Triều 1647-1702年）が内鑑として、黎朝に仕え輔国上將軍參督芳郡公の官爵を授けられたと記されている。古老の伝承では阮公朝、は百穀の後神として祀られることを願ったが、反対に逢い、村を割って、第2村を建設したという。第1村のデンでは楊文娥と裴於台を祀り、第2村のデンでは阮公朝、と Khe Cau Mang 大王を祀っていたという。第1村はさらに、この阮公朝の長兄の長子で、黎朝から沛郡公の官爵を賜ったという人物、Nguyễn Công Thiều（漢字名不明）が、百穀の知識人集団、官員斯文から後賢として承認され、第1村の後神とされている。彼の妻や母も百穀のみならず、果霊社、小穀村で祀られており、一族の祭祀圏拡大が読みとれる。

ソム C の北端に位置していたCóc（コック）寺（現小学校敷地内）の1573年（崇庚8年）の碑文では、百穀社と富穀社、さらには周囲集落のいくつかの存在が明記されている。阮功氏祠堂の1686年（正和7年）碑文には百穀社壠村（Triền Thôn）が出現しており、これは聞き取りでは、昔の第二村、現在のソム C と同定されている。

19世紀初頭から20世紀前半にかけて、各族（dòng họ）で、家譜の編纂、祠堂の建設などが進められ、族の結合強化が図られている。

また、北隣のタンコック（旧小穀）は、百穀からの分村伝承（1396年：Bùi Văn Tâm 1998）を伝え、つい最近の過去まで、ソム A などと通婚関係を持っていた。1805年編纂の地簿では百穀社の中に百穀村と小穀村があることが記されている。バッコックの西隣に位置するズオンライはバッコックとの分村関係などの伝承は有さないようだ。

## D 地形・遺跡形成研究

### I 地質研究より

春山のボーリングを含めた地質調査や地形分析により、バッコック集落の自然堤防や周辺地形に関して、かなり詳しい地形形成史が理解されている（春山1999、春山他2000）。

まず、航空写真と地形図分析より、バッコック集落が位置する微高地は、現ナムディン川の古い流路であるCóc（コック）川の形成した自然堤防であることが理解できる。また、旧フーコック社（現 Xóm Phú Cóc）も、コック川の流れに応じた小さな自然堤防上に位置しており、その周囲は長期にわたる低地であったと理解されている。このことはフーコックの周辺がバッコック周辺に比べ高度が低いことから納得がいく。またコック川がバッコック自然堤防を形成し始める湾曲部から旧河道がいくつか分かれて走っているのが見えるがこの旧河道は、バッコック集落地図（菊池1997）にも、池と

して現在でも認識できるものがあり、集落内でも起伏差が認識される。つまり、バックコック自然堤防自体が、いくつかの自然堤防（natural levee）が複合してできていることが理解される。旧ズオンライ社が位置する微高地は、紅河が河口に注ぎ込む周辺で形成された砂碛列（sand ridge）であり、バックコックとは起源の違うものである。この砂碛列は紅河本流河口地域に形成されているものである。

ボーリング調査は、8.5m深度の簡易ボーリングがA-E地点で、70m深度のものがND1地点で行われている（Fig.169）。このなかで、Xom Bの中心B地点のボーリングで、は、現自然堤防を構成する砂層より下で、多くの破碎貝層が確認されている。その中でクチベニ貝（Anis ocorbule）の貝層（6.6m深）からの貝サンプルが、C14年代で4780BPの年代値が測定されている。この貝は遠浅の内湾の砂浜や砂底を好むもので、旧汀線を示すものと考えられている。また、ND1地点では、54.5m～70m深で最終氷期時代の河成堆積物が確認され、その後、汽水域化、海面上昇の過程が、最大海進、海退のはじまり、河成堆積作用の始まり、河成堆積物形成と順に確認されている（春山他2000）。

さらに、電気探査の地下構造研究では、現ナムディン川は比較的新しい河道で、フーコックとバックコック間に旧河道の大きな堆積層があり、チャイノイが位置する自然堤防は現ナムディン川の自然堤防堆積物が表層部に堆積した新しい洪水堆積地と理解されている。こうした調査に基づき、Fig.170のような地形分布図が復元されている。

従って、バックコックでは、最大海進後、海退が始まり、河成堆積作用がBP4000から5000前後に始まり、その後バックコック微高地の陸化が始まり、さらにはコック川の河成堆積で自然堤防が形成されたことが理解できる。コック川も最初はナムディン川の本流であったが、河道を東に移し、最終的には現河道が本流となり、コック川自体は、支流化、最後には旧河川化したものと考えられる。

## II 各地点の地形と調査経過

### a はじめに

考古学調査の過程を以下、年次を追って記しておく。試掘位置は、Fig.169に表されている。

1996年7-8月：バックコック村とズオンライ村のサーヴェイ。

1997年8-9月：バックコック村のソムCの旧Vũ Thiên家の敷地（XCSC）地点とズオンライ村のDuongLai Ngoai（ズオンライゴアイ）地点の（DLN地点）試掘調査と遺物整理。

1998年7-9月：バックコック村のソムC（旧名Xóm Bến Ngự:ソムベング）のBùi Huy Vườn氏畑地（XBN1地点）、バックコック村のソムAのBùi Huy Đạt氏の畑地（XA地点）、そしてズオンライ村のDuong Lai Trong（ズオンライチョン）のDuong Đức Sinh氏所有の畑地（DLT地点）での試掘調査と遺物整理。

1999年7-9月：バックコック村のXóm C（旧Xóm Bến Ngự）におけるBui Huy Vườn氏の畑地（XBN2地点）での継続試掘とBùi Trung Ung氏の畑地（XBN3地点）での試掘調査と遺物整理。

2000年8月：バックコック村のXóm BでのBùi Huy Thúc（XB地点）とフーコック村のTrần Văn Quang氏の家の敷地内（PC地点）の試掘調査と遺物整理、そして、バックコック村内のĐền Nhật Thôn(デンニャットン) 地点、バックコックに北接するタンコック村（旧小穀社）と南接するクアリン村（旧果霊社）の表採調査を行った。

2002年8月：クアリン村とヴバン県のいくつかの歴史時代遺跡の表採調査を行い、これまでの発掘資

料の再整理・再研究を行った。

従って、バココック村内で計6地点（5区域）、フーココック村で1地点、ズオンライ村で2地点の試掘を行ったことになる（Fig.169）。こうした調査の基本報告については、日本語（西村1997a、2006b、西村他1999、西村他2000、西村2006b、西野他2006）、ヴェトナム語（Nishimura et al. 1999,2000, Nishino et al. 2001）で報告済みで、現在最終報告書の編集中である。また本論は国際会議に提出した原稿（Nishimura&Nishino 2002）に、さらに修正・加筆を加えたものである。なお Appendix 1に、各地点の発掘経過と結果を概述してある。

#### b 1998年度の Xóm Bến Ngự 1 (XBN1) 地点の試掘

試掘坑を設定したBui Huy Vưon氏の敷地はバココック集落が立地する微高地列の西端に位置し、水田をはさんでズオンライの集落列をよく見渡すことができ（Fig.175）。試掘地点は北緯20° 22' 06"、東経106° 08' 38"に位置している（Fig.169）。敷地内では池造成時に、大量の陶磁器が出土する区域があることが確認されており、その区域の確認のため主屋から2m離れたところに6×1mの試掘坑を、長軸が磁北基準で120° - 300° ライン上に設定した。

#### c 1999年度の Xóm Bến Ngự 2 (XBN2) 地点の試掘

XBN1地点の調査結果では陳朝期から黎朝初期にかけての層位的堆積が良好であることが確認できた。しかし、ヴェトナム考古学においては、特に陳朝陶磁器に関しては編年的見通しが未だ確定していないことから、再試掘を行い、層位資料の再確認と増加を狙った（Fig.175）。前年度発掘地点より北側に約5.5m離れたところに、試掘坑（TS坑1×3m）の長軸を磁北基準で120° - 300° ライン上に設定した。そして、この試掘坑中に1地点と同様な陶磁器が大量に出土する溝状遺構を確認し、その溝状遺構を南側に追跡する形で南側に1.5m×5mの細長い発掘坑（拡張坑）を拡張した。従って、試掘坑の形は最終的には鉤形になった。

#### d 1999年度の Xóm Bến Ngự 3 (XBN3) 地点の試掘

XBN1,2両地点はバココック村が位置する微高地列中の最西端列の西端に位置しているため、微高地列の中央部の過去の姿を知ることができない。当微高地中心部での考古資料補完のための試掘を行うこととした。試掘地点はBui Trung Ung氏の畑地で、XBNが位置する微高地を東西に横断する小道の北脇に位置しており、XBN1,2両地点が位置しているBui Huy Vưon氏の家の入り口から、南へ約30m離れており、XBN1,2両地点とは約50m離れている（Fig.175）。

現在この土地は野菜畑として利用されているが、1947年以前は地主クラスの人の家があり、1947年から1954年にかけて、差し掛け小屋のようなものが存在し、その後、畑地としての利用が続いているという。試掘開始は7月16日で、終了は7月22日である。磁北より30° 時計回りにずらした30° - 210° ライン上に長軸がのるようにして、4×3mの試掘坑を設定した。当地点での文化層は総じて水平に堆積しており、層厚はXBN1,2両地点に比べうすく、約60cm前後しかなかった。各層と確認された遺構は以下の通りである（Fig.6-3）。

#### e Xóm A (XA) 地点の試掘

ソム A (旧称Xóm Thượng) のほぼ中央に位置するBùi Huy Đắc 氏の家の敷地内にあるRau Ngótの畑で3m×3mの試掘坑を一边が南北の軸に載るように設定した。現家屋からは北方向に28m離れており、試掘地点は北緯20° 22' 28" 東経106° 08' 53"に位置している (Fig.172)。発掘坑が位置している区域はMả Tanなどと呼ばれており、発掘地点からさらに北側の微高地は墓地として利用されているところである。文化層は非常に薄い地点であった。

#### f Xóm B (XB) 地点の試掘

伝承で確認されている祠堂は、バックコック集落微高地列のソムB集落の西側、Bùi Huy Thúc氏の敷地内に位置する (Fig.177)。現在は畑として使用されているが、Nguyễn Đình Kiêm氏によると、1959年まではKiêm氏が所有する祠堂があったが、古くて崩壊し別の場所に移動したという。Kiêm氏の記憶する祠堂の位置と一致するように3m×3mの発掘坑を決定する。軸は磁北基準で120° -300° ライン上に設置した。当地点の発掘と報告は西野範子の指導のもと行われているので、これまでの報告 (西野他2006、Nishino et al. 2001) をAppendixに要約してある。

#### g Dương Lai Trong (DLT) 地点の試掘

Dương Lai (ズオンライ) 村集落はナムディンーニンビン線道路からバックコックへ至る道路を境として、北がDương Lai Ngoài (ズオンライゴアイ)、南がDương Lai Trong (ズオンライチョン) に別れている (Fig.173)。

試掘地点は北緯20° 22' 14" 東経106° 08' 24"に位置し、Dương Đức Sinh氏所有の畑地内である。聞き取りによると1954年以前は中農クラスの家族の家があったという。地形図 (Fig.173) から、周辺域に比べ若干標高が高いところに、試掘地点が位置していることがわかる。南約23mのところには大きな池がある。6m×1.5mの試掘坑を、長軸が磁北基準で110° -290° のラインに載るように設定した。DLNやXBN同様、集落が位置する微高地列を横に裁断するように設定したわけである。

#### h Dương Lai Ngoài (DLN) の試掘

ズオンライ集落の位置する微高地はバックコックの位置する微高地の西側に並行しており、直線距離で約300mの距離がある。この微高地の一部はナムディンとニンビンを結ぶ道路を越えて、北側に突き出ており、ここは昔、寺 (Chùa Đé) が建っていたところである (Fig.171)。

Phan Văn Lợi氏の家の隣にある通称” バナナ園” (Vườn cây chuối : 北緯20° 22' 35" N、東経106° 08' 28" ) 地点での発掘を行った。当地点はDLN集落の北よりの中央部に位置している。地元民によれば、この地点がDLN集落の中でも相対的に高いところと認識されている。試掘に先立つ表探調査で、この周辺で陳朝期に遡ることは確実な青磁碗や褐釉碗の破片を採集している。このバナナ園には、もともと地主クラスの人の家 (Bui Si Hue氏) が建っていたが、第二次世界大戦時までに家は何らかの理由で破壊されてしまったという。抗仏戦期には戦場にもなったという。地形測量 (Fig.171) から、



バナナ園の東隣にPhạm Văn Lợi 氏の家の敷地があり、バナナ園とその家の敷地にまたがる形で、微弱な起伏が標高線（0m）により確認できる。そして、バナナ園をめぐるように走る道に沿う形で、次の標高線（-25cm）が確認できる。西側の畑地も相対的に低くなっている。ただし Dương Lai の真ん中を走る合作社への道路面の標高は地形図の0m標高線を基準にした場合-60cm高、道路そばの水路を挟んで隣接する水田の耕作土面の標高が-145cmであった。バナナ園の南側は池がありこの水面高は、-150cmである。また、Phạm Văn Lợi 氏の家の敷地内にある井戸の水面は0m標高線を基準にした場合、-1.55mの水面高であった（8月上旬）。従って微高地といっても非常に起伏差の緩いものでしかなく、水田や集落の中に造成している池などの凹面がいかに起伏があるような人口景観を作り出していることに注意する必要がある。

試掘は1.5×4mの発掘坑を長軸を東西方向より20°ほどずらして（磁北基準で、110°—290°ライン上）設定した。つまり集落地形の長軸線が少し時計方向にずれていることに合わせたもので、集落地形の短軸に沿って切るように発掘坑を設定したことになる。

#### i Xóm C Sân Cao (XCSC) の地形

バックコック集落の中において、北から順にソムA、ソムB、ソムCと区分されているが、もっとも南のソムC（合作社前の道路以南）において、最も相対標高の高いXCSC地点（以下XCSCと略称）を試掘地点として選び、調査を行った(Fig.176)。菊池編（1997）の百穀社版圖で旧バックコック社を構成するソムA,B,Cの地形をみると、最も北端のソムAからソムBを経て、ソムCに至るまで、各々のソム間での若干の地形的落ち込みを挟みながらも50-100cm位の微高地が数多く連続して連なっている様子がよくわかる（バックコックの人達はDải Đấtと呼ぶ）。加えて、地形、景観上もう一つ留意すべき点は、ソムBからソムCにかけて池が列をなして集落の中央部を走っているのがわかる。これは集落が立地する微高地がもともと東側と西側の二列が存在していたことを示している。

ソムCの古老の話では、この東西2列の微高地列のうちソムCの東側をXóm Giũa（ソムズア）、西側をXóm Bến Ngự（ソムベング：Benは船つき場の意）と呼んでいた。そして、Xóm Bến Ngựは、旧コック川（現集落東脇の水路）にかかる橋のあたり、つまり集落中を南北につき抜ける道路が若干西側へ曲がるあたりから南側の集落を範囲とするようだ。また、旧コック川が水流を保っていた時代には、ここは船つき場であったようだ。この旧Xóm Bến Ngự（ソムベング）の範囲において、最も標高が高いのが、託児所の立っているSân Cao（サンカオ）と呼ばれる高台である（Fig.176）。西隣りを走る道路面からは1.4-1.5mほど高くなっている。古老Vu Ba Trang氏からの聞き取りによると、ここには1945年頃までハナム省の巡撫官をしていたVũ Tiên Đế（武善悌）氏の家があり、その後、家売り払って一家は村を出て入ったという。そして、1953年頃にこの家屋敷は焼き払われ、53年以降はこの高台に誰も住んでいないという。1960年頃レンガで、表土を整えて、籾や藁などの乾燥場にしたという。

#### j Phú Cốc (PC) 地点

フーコック地点は試掘は集落の南西端にあるTrần Văn Quảng氏（72才）の屋敷地内の小丘上で行っ

た (Fig.174) 。Trần Văn Quảng 氏の屋敷はPhú Cốcの南西隅にある池 (村の井戸 : Gieng Lang) から北東側の小丘を中心とする区画である集落の南端に位置する道が屋敷地の南限となり、西隣に集落西端の道に接したもうひとつ別の屋敷地がある。屋敷の南、東、北には池があり南側の池を挟んでさらに南の道に面したところには祖先を祀る祠堂がある。Trần Văn Quảng 氏の屋敷のまわりは小丘になっており、道に比べて1m以上高くなっている。屋敷地内の小丘上の試掘地点より南側の道へは約45m、西側の道へは約25m離れている。家主からの聞き取りでは当屋敷地は昔、1945年以前、富穀社の里長を務めた人物が住んでいた。また、里長が存命していた頃 (民主共和国成立以前) は試掘坑が位置するところは里長の家と西隣の家の間に位置しており、溝をなすように低くなっていたという。

文化層厚は約210cmで、当考古調査において二番目に厚い文化層となった。

### III 居住に関連する考古学的現象

当地域における居住活動を理解するための基礎的考古学現象を種類別にまとめておく。

#### a 生活廃棄物の集中廃棄

PC地点では上層部で数次に亘る陶磁器を中心とする生活廃棄物の集中廃棄が確認された。これらは20世紀前半を年代下限とするもので、発掘坑のそばに立っていた里長の住居からの廃棄物と考えられる。

DLN地点では、上層で確認された住居の基礎遺溝 (Fig.189) のなかから大量の陶磁器類が出土した。これは石のかわりに陶磁器片を利用したと考えられ、もともとは家の周囲に廃棄されていたものを集めて入れたものなのであろう。年代の下限はPC地点同様、20世紀前半と考えられる。

XBN1,2地点では、溝状の遺構に陶磁器片を集中廃棄している遺構が複数確認された (XBN-R1,R2, XBN2-L4など : Fig.181) 。集落地形の長側縁に沿う形で、方形の溝穴が設けられ、そこに砂利代わりに陶磁器・瓦片を入れている。14世紀と15世紀を年代下限としている。

#### b 住居址・炉址

柱穴や床面を伴う遺溝あるいは炉址を伴う遺溝を住居址として判断した。

DLN地点では上層部で確認された家の基礎 (Fig.189) は、20世紀前半に比定可能である。また、第8層で炉穴らしきものも確認されている。

DLT地点では住居建設時に地鎮のために、住居の床面下に行う埋め壺が第2層中で出土した (Fig.191) 。埋め壺自体は18世紀のものと判断される。この第2層硬化面では釜形陶器や炉址が出土しており、厨房としての役割があったようだ。第3層のベルト状張り土をもつ遺構は、厠や家畜小屋に付属する可能性がある (Fig.192) 。また第4層でも、炉址と認定できる遺構が確認されている。第6層の柱穴列 (14世紀以前) も建築に伴うものである可能性がある。

XBN3地点では1B層で副屋の可能性がある炉址や柱の基礎が確認されており (Fig.187) 、2Aや2B層でも、柱の基礎をとまなう住居面が確認されている。また、3層で竹を柱として使ったと考えられ

る、炉址を伴う住居址が検出された (Fig.188)。出土遺物よりこの遺溝の年代下限は14世紀と判断される。

PC地点では、18-19世紀と判断されるL4-1層で住居等の柱の基礎と考えられる方形の赤褐色粘土塊が列状に確認されている。

XB地点では、第1層で祠堂の建築基礎、第2-1層で柱穴列、第2-2層では炉址が確認されている。またL4-3層でも木と竹を利用した柱の柱穴群と土製支脚を利用した炉址 (18世紀) が確認されている。

### c 盛り土

XBN1,2地点では、陶磁器片を集中廃棄した長方形土坑が複数確認されている。XBN1地点でR1(溝状遺溝) として報告したのもこうした長方形土坑を部分的に確認したものと判断される。これらの遺溝は、その深さや断面形態などからキムラン・パイナムゾン遺跡で確認されたような建築基礎のための地業とは考えられない。また、単に遺物を集中的に廃棄したものとしては、規格的でありすぎる。また、XBN2TS坑の断面図に明らかなように、土坑周囲の文化層も、単に居住活動 (100-200年) に伴う層形成にしては厚すぎ、水域に近く位置し、土坑の長軸が、集落が立地する帯状微高地の長軸方向に並行することを考慮するなら、意図的な盛り土による居住面高レベル化が当該期に行われ、その中で地崩れなどを防ぐための地盤強化作業の一環と考えてよいかもしれない。

さらに、XCSC (Fig.184) の第3から7レベル (第1盛り土層: 19-20世紀)、第8から13レベル (第2盛り土層: 19-20世紀)、第15から19レベル (第3盛り土層: 18世紀)、XB (Fig.180) の第3層 (18世紀) や第5層 (17世紀)、PC (Fig.186) の第3層 (19世紀)、第5層 (17世紀) のように、17世紀以降の居住面形成のための盛り土層が明瞭に確認できた。これらの盛り土は、純質の粘土で、包含されている遺物がかなり少ないこと、堆積が平坦であることなどが共通した特徴である。DLT地点の第3層 (17-18世紀) なども盛り土層として解釈していいのかもしれない。

XCSCやPCの場合、旧河川の湿地帯のような所を埋め立てており、かなりの規模の造成であることがわかる。

また、DLN地点、XBN3地点などの相対的に高度の高いところでは、まとまった単位での盛り土層は確認されなかった。これは盛り土が低域での居住面高レベル化を図ったとする推察を裏付けている。

### d 墓葬

XAで第1層より、3つの方形土坑(H2,H5,H6) が19-20世紀の木棺による二次葬と判断され、また続く2層下層部で長方形の土坑(H6) が17世紀初頭を下限とする一時墓葬と判断される (Fig.179)。

### e 遺物集積遺構

DLT第5層の下層部レベル (L5-5) で瓦を意図的に環状に集積配置した遺構 (土坑11) を確認した (Fig.193)。まとめて出土した陶磁器類は、16世紀末から17世紀初頭の遺構と判断でき、祭祀的儀礼に伴う可能性が高い (Fig.195)。

XCSC地点の最下層遺物群 (Fig.185) も、何らかの目的でまとめて遺棄された可能性が高い。

#### f 古環境示準遺物

XBNL2-2A層はにぶい黄褐色の混土貝層、L2-2B層は炭化粒が混じる混貝土層である。両貝層ともレンズ状堆積で、L2-2A層ではシジミ、L2-2B層ではハイガイ (*Anadara* sp.) が主をなしていた。L2-3A層は炭化粒の混じる硬くしまった黄褐色砂層。L2-3B層はシジミ様の貝を主とする混貝土層。L2-4層は暗褐色の粘質砂層で若干の炭化粒を含む。L2-5層は黒褐色の混貝土層で、はまぐり様の貝を主としている。

#### g 陶磁器の利用様相と遺跡の機能

ヴェトナムでは生活の諸活動において陶磁器が多く利用されている。無釉陶器を中心として形態的に考古学資料のなかにその祖形を見いだすことが可能である。従って、現在の陶磁器の利用方法を理解することにより、過去の利用を推測することもあながち不可能ではなくなる。ここではバッコック村とその周辺での、いくつかの特徴的な陶磁器の利用のされ方について述べ、考古資料に振り返って考察してみたい。

寸胴筒形をした無釉陶器をVạiと呼んでいるが、この器形は陳朝期以降、無釉陶器の主要機種を占めて、現在に至っている。この種の容器はバッコックでは米櫃、塩入れ、漬け物樽、各種の食物保管容器として使われている。厚くて緻密な胎土は湿気の侵入や水漏れを防ぐのに適している。遺跡からの出土例も非常に多い。

香炉は各家庭のBàn thờ (祖先祭壇)、各氏族のNhà thờ (氏族祠堂)、そして、Đền (神社)、Đình (亭：集会所)、Chùa (寺) などで使われている。いずれも信仰生活において重要な場所である。このタインロイ社に南接するLiên Minh (リエンミン) 社のHồ Sơn (ホーソン) 寺で16世紀の香炉が、ソムCのBui族の氏族祠堂では17世紀の香炉が、現在も利用されている。また、ビンロウの実をかむための石灰壺はバッコック現存唯一の村落の信仰建築 Đền Nhật Thôn (デンニャットン) のなかに石灰がいっぱいになって役目を終えたものがいくつか池の周りに置かれ、その中には、16世紀のものもあった。これは紅河平原の伝統的集落でよく観察される習慣である。香炉、石灰壺ともに、信仰の場や施設に関係の深い陶磁器といえる。また、蓋付きの壺 (chõe, chĩnh) には、祭礼時に川・池などから汲んだ聖水を入れて保管している。

時として儀礼を行う場ともなるこうした宗教施設では、共食のための食器 (碗皿) が多量に保管されていることが多い。こうした碗皿類は現在の各家庭で使われているものより、数十年以上古いものが多く存在する。例えば、バッコック村調査ではソムAの氏族祠堂に200個以上の陶磁器が安置・保管されている例があった。器種的に最も多いのは碗・皿で、他には花瓶、香炉、硯などもあり、古いものでは19世紀に遡るものもあった。碗皿はキン族の個人家屋においても、余裕のある家では共食用にある程度の数で保管されているが、こうした信仰建築内のものは概して個人家屋のものより古い時期のことが多い。これは使用頻度や保管のあり方に関係するのだろう。

基本的にこうした宗教施設では一般の家庭より、古い時期の陶磁器が保存される傾向が強く、また、

香炉や石灰壺など特殊な陶器が残される頻度が高いといえる。残念ながら、発掘調査の方では、こうした傾向は、ソムB地点の上層部で、香炉片が出土した程度で、明確な比較対照となりえるものは無かった。ただ、石灰壺の出土は、発掘地点でほとんど確認されず、Đền Nhật Thôn地点では複数確認されているので、上述したような石灰壺の最終遺棄行動が反映されている可能性は十分ある。従って、発掘地点では、XB上層部を除き、信仰に深い関係のある地点はない可能性が高い。

#### IV 陶磁器の頻度から類推する居住頻度と遺跡機能

##### a 表採調査による追加調査

試掘調査の他に、2000年と2002年に以下の地点で表採調査を行った（Fig.169）。

Đền Nhật Thôn（デンニャットン）：ここはソムCの北西端に位置しており、旧第一村のĐền（神社）が立っているところである。このĐềnの周りは川砂を中心とした微高地になっており、微高地周囲は畑、そしてさらに下位が水田となっている。南東には過去、村へ通じる主道があったと言われている。最古で12世紀まで遡る陶磁器が採集された。また、石灰壺片が複数採集されたのも特徴的である。

タンコック集落（旧小穀社）：バックOCKの北に位置し、百穀村からの分村伝承を持ち、かつては小穀村と呼ばれた村である。住居がフーコックのように整然と列状に並び、集落全体形が方形を呈しているのが特徴である。当集落内での最古の陶磁器片は17世紀であった。

クアリン集落（旧果壺社）：バックOCKと同じ微高地帯の南に位置している。面積的にはBách Cốcに匹敵するほどの大きい村落である。西側のバックOCKと同じ微高地状の集落内では13-14世紀のものが採集され、池を挟んだ西側の区域では17世紀までしか遡らなかった。

##### b 施釉陶器碗皿資料の年代分布

年代認識のための編年は、ヴェトナム陶磁に関してはNishino（2002）、西村・西野（2006）などの編年案に根拠をおき、中国陶磁は山本（2000）に根拠をおいている。そして、施釉碗皿の高台資料全てに関して、分類を行い、時期比定を行った（Nishimura&Nishino n.d.）。その結果がFig.198に表されている。

##### c 無釉陶器と施釉陶器の比率

施釉陶器と無釉陶器による全体の出土量を遺跡単位で比較した（Fig.196）。遺跡間比較より明らかなことは、XBN1,2地点が他を圧倒して、遺物出土量が多いことである。また、施釉陶器と無釉陶器の比較においても無釉陶器の量が圧倒的に多いことが理解できる。特に年代分布としては、ほぼ重なるXBN3地点と比較した場合に、その量的、比率的違いは明らかである。このXBN1,2地点の特殊性は遺跡の機能を考慮しないと説明ができない。まず、その大量の陶磁器の出土量は、居住機能が主であったと考えられるXBN3地点と比較から、居住活動を直接行った場ではなく、モノを集中的に廃棄した場所と考えられる。また、そのモノ自体も、純粋な居住活動起源ではないと判断される。無釉陶器の大半をしめるのは桶、壺などの容器の類であり、その大量利用は、そのモノ自体の利用が目的ではなく、モノを容器として物資運搬を行うことが目的であったと考えられる。この推察は、当地点が水域

に近い所に立地すること、地名に船着き場の名前が残っていること、船着き場的遺跡である Băi Hạ Lan（バイハラン：ナムディン市：Nguyễn Q.H. et al.1996）、Thoi Sành（トイサイン：クアンニン省：Nishimura 1998b）などでも大量の無釉陶器が出土・確認できることなどからも頷けるものである。

#### d 陶磁器の生産地から

西野（Nishimura&Nishino n.d.）の研究では、陳朝の第2首府であった天長府の船着き場遺跡である Băi Hạ Lan（BHL）と XBN1,2の陶磁器組成（陳朝期に限定）に比較から、遺跡の性格の違いを読みとることができる（Fig.197）。一つには年代分布で、BHLの場合、14世紀前半までの資料が中心で14世紀後半は完全に欠落している。これは天長府が機能した期間に遺物群が対応しているものと考えられる。これに対しXBN1,2は14世紀後半からさらに15世紀を通じてまんべんなく存在している。このことはXBN1,2が、天長府のように陳朝王権の盛衰とは直接関係しない遺跡であった可能性が高い。また、出土陶磁器の起源においても、BHLは80%近くが天長府周辺で製作されたもので、それ以外のヴェトナム陶磁は非常に少ない。また、輸入品である中国陶磁が20%近くを占めるのも特徴的である。これに対し、XBN1,2はナムディン省域内で製作されたであろう地元産の陶磁器は20%にも及ばず、大半のヴェトナム陶磁器が他地域産と考えられることである。また中国産の陶磁器も比率的に少ない。これも天長府のような王朝権力と直接関係するところと、そうでないところの違いと考えていいのであろう。つまり、王朝権力の中心的場所では、ヴェトナム陶磁に関しては自前のものが比率的に高いこと、輸入陶磁の比率も高くなることが指摘できよう。

また、陳朝期以外の中国陶磁にも注意する必要がある。XBN1-3地点では9-11世紀の中国陶磁が小数ではあるが存在しており、これは小規模ながらも、陳朝期に先行して当該地点が船着き場的性格を有していた傍証であろう。また、17-18世紀に関しては、XB地点で中国陶磁がある程度まとまって出土していることも注目される。無釉陶器はさほどの出土量がないことから、物資運搬などと結びつけるより、富裕者の存在などと結びつけて考えた方がいいかもしれない。上層で形成された祠堂建築の信仰対象などに繋がるものかもしれない。

PCやDLN地点でも19-20世紀の中国陶磁がまとまって出土しているが、これは明らかに里長や富裕者の存在と結びつけて解釈できるものである。

## V バッコック村とその周辺の集落形成過程

以上の考古学的認識をまとめてみると以下のようなバッコックと周辺を巡る居住史の認識が成立する。

1：バッコック微高地の中央部では新石器時代に小規模な居住が存在。これは紅河デルタ居住域の最前線に位置していた可能性がある。南西隣のLương Kiệt社の後期新石器時代の遺跡がある(Bùi V.L.&Ngô S.H.1990) ことから納得がいく。

2：ズオンライ、バッコックともに1-10世紀の居住痕跡を残す。特に8-9世紀以降になるとバッコックのXBN地点での居住が明瞭となり、ズオンライはほとんど居住がみられない。

3：11-12世紀になるとズオンライでの居住が再び明瞭化するが、バッコックのXBNは安定した居住

が存在したようだ。

4：13世紀後半以降はXBN地点での居住規模が拡大化し（Fig.199）、14-15世紀にその最盛期を迎えている。

5：16世紀以降はXBN地点での居住頻度は前段階に比べ衰退するが、20世紀まで連綿と居住は続く。XBN地点以外のバックック各地点では17世紀以降の居住頻度が増加をし、フーコックやタンコック現集落の居住も開始される（Fig.199）。

生産地（外国かヴェトナムか）、稀少器種を陶磁器の質の判断基準にした場合、9-11世紀と14-15世紀のXBN地点が他を圧倒している（Fig.194）。9-11世紀は、越州窯系などの中国陶磁（Fig.194-1～3）、14-15世紀は、高級な青磁碗、輸出タイプに相当する鉄絵、青花や白磁陶器、他地点では出土を見ない、大型平瓦や蓮華文瓦当などは、そのことを象徴している。また、運搬容器である無釉陶器は13-15世紀のXBN地点が他地点を圧倒している。これは当地点が川縁の船着き場で、交易や物流の中心であったことを示している。

さらに、19世紀末から20世紀前半のフーコック地点とズオンライのDLN地点は各種のヴァラエティに富んだ陶磁器を出土しており、豪農や里長の居住地であったことを裏付けている。物質文化や居住の形態から富裕者がいたと明らかに指摘できるのは上記の14世紀から15世紀前半のXBN地点と20世紀初頭のDLN地点とPC地点のみである

19世紀以降の遺構、文化層を確認できたのはDLT,DLN,XA,XB,PCの各地点にのぼる。その中でPC,DLNの地点では、それぞれ家の廃棄溝、基礎が確認され膨大な遺物が出土した。その中には高級な商品であったろう陶磁器やワイン瓶が含まれていた。遺物群からそれぞれ19世紀後半あるいは20世紀前半と考えられる。その一方でXBやDLTのようにごく普通の建築であった遺構にあまり目立たない遺物群を伴出する遺跡も確認された。これは14-15世紀前半のXBNの突出した遺物の出土状況と平凡な他地点との対照性にもやや似たもので、単純に言えば物質上の貧富差が遺物に現れているとも言える。19世紀前半以前の時代とはかなり異なっている。少なくとも前述の14-15世紀のXBN地点を除いて貧富差を感じさせる遺構・遺物群はなかったから、19世紀後半あるいは20世紀前半は、その意味に置いて農村の貧富差を物質的に拡大した時代といえるかもしれない。PC地点は里長、DLN地点は商人の家敷地であったと伝えられ、権力と商業活動のもたらした結果ともいえよう。

## E 他遺跡史料や他分野史料との対照

10世紀の前黎朝や12使君関係の伝承も、XBNの考古学資料が示すように、水上勢力との関係を反映した可能性が高い。

XBN地点での13世紀以降の居住活発化は裴允族などの陳朝期の移住と整合性をもっているようだ。交易や物流に基づくであろう14-15世紀のXBN地点の繁栄は、同時期の科挙合格者、裴募、裴光家そして黎朝開国功臣、裴於臺3人を輩出した経済的背景になっていると考えられる。ナムディンの天長府周辺は皇族の荘園（采邑や田庄）伝承を残しているが、当村落には陳朝皇族関係の伝承はない。Xóm Bến Ngựという、王室が利用した船着き場という地名をとどめているが、これも、もとはXóm

Bến Nhựという呼称だったという話もあり、確証がない。かりにXóm Bến Ngựであったとしても、時期や王室の性質を決定づける伝承も残されていない。例えば、同じナムディン省のMỹ Lộc(ミーロック) 県のCao Đại(カオダイ) では、陳光啓の莊園としての伝承が残され、その存在を立証するように、屋敷地、生産工房(窯業、鍛冶)、墓などの考古学上の遺跡 (Nguyễn Q.H. 1996, Nishino& Nishimura 2001,2003、西村2002a) も残されており、彼らを祀るデンも存在しており、その存在は疑い得ない。同様な事例は、各地の采邑伝承地で確認されている (Nguyễn T.P.C. 2002)。

この認識を基礎にするなら、百穀村は、陳朝王族・皇族が開発・開墾した集落を基礎にしているとは考えられず、裴募ら陳朝官僚が開発を始めたことが集落形成の基礎になっていると考えた方が理にかなっている。

ところで、比較的サーヴェイ密度の高いナムディン省のナムディン市、ミーロック県、ヴバン県を対象に俯瞰すると李朝期の居住痕跡はさして多くないのに、陳朝期の居住痕跡は至る所で確認できる (Fig.122 : Nishimura&Momoki 2002)。このことはバックコックと周辺域の試掘・分布調査でも確認されていることである (西村他2000,Nishimura&Nishino ibid.)。当地域には陳朝期の陳朝王族らの采邑や王族の娘(後主)が隠棲したとされる場所が、多く確認あるいは伝承されている。それらの場所を表したのがFig.122である。当然、それらの場所を采邑化するにあたって、以前から人が多く居住しているところでは、土地の所有問題など解決しにくいことがあるはずで、基本的には居住が疎らな地帯が選ばれたと考えた方が合理的である。陳朝期の采邑が、タイビン、ナムディン、ハナム省などの低地域に集中するのは、比較的居住が疎らな地を選んで開墾したからであろう。こうした居住域拡大現象は氾濫原や沿岸砂礫列のような低地において確認できるから、そこには人為的環境改変による居住を可能とする理由を当てはめるしかない。桜井(1989)が議論した陳朝期の堤防(鼎耳)建設による開拓が、その理由に相応しいのは間違いない。堤防建設は可耕地の拡大のみならず集落の増加・稠密化も引き起こしている。当地域を陳朝が重視した背景の一つであろう。

陶磁器群の比較において、陳朝王室の故地であり、第2首都であった天長府の外港と考えられるバイハラン遺跡 (Nguyễn Q.H. et al.1996) は、XBN地点よりさらに高級な陶磁器が出土している (Nishino 2002)。しかし、存続期間において、バイハランは13世紀第2四半期くらいから14世紀前半に限定されるのに対し、XBNは15世紀まで連綿と利用されている。そして、胡朝から属明期という時代を含む15世紀前半の陶磁器資料も、散見されることは、バイハランが天長府の実質的活動期間に限定されるのに対し、XBN地点は陳朝皇室とは違った勢力下のもとにあったことを意味している。交易拠点として機能し、さらには政治体制変化がそこには反映していない可能性を示している。

以上のことから、筆者は以下のようなシナリオを提示したい。バックコック集落は、13世紀以前に水上交通の一拠点として人の居住するところになっていたが、13世紀段階に水上交通の要所を利用した形で、陳朝配下の官僚などを中心として、本格的開拓が行われた。そして、水上交通の利便性は経済的蓄積の背景になり、裴於臺が属明期から黎朝初期にかけて、開国功臣的な活躍をする基礎を作った。現集落の伝承・文字資料も、考古資料を合わせることで、より具体的な集落形成像が描ける例であろう。

裴於臺は、黎利ら坑明独立運動勢力に、少なくとも属明期(1407-1427年)の末期から参加している。XBNの発掘から、15世紀初頭は水運拠点として活動が活発な時代と考えられ、裴於臺の勢力基盤



の一つになったことは十分に予想される。同時期に、バッコックが位置する同じ自然堤防列で、約2km南東Lương Kiệt（ルオンキエット）社からBùi Bi(ブイビ)も参加している。彼は水軍指揮に、その能力を発揮したようであるが、これも水運基盤となる地域支配的な構造があった結果なのであろう。バッコック集落とクアリン集落の間に位置するChợ Gạo（チョガオ）では陳王朝期に米を輸送した歌謡が伝えられている。水運がコック川を利用して盛んで、そこに依拠した勢力があったことは確実であろうから、上述の歴史上人物の経済・政治背景として考えておく必要がある。

現ソムCに位置する阮功氏祠堂碑文（1686年）には百穀社堰村が出現している。聞き取りでは堰村は第二村でソムCに対応するものらしい（桜井1998）。堰村は現代ヴェトナム語ではXóm Chợ（ソムチョ）に対応するもので、市場が立つ村と考えてよい。これは17世紀末においても、経済活動が現ソムCを中心に行われていたことを暗示しているものだろう。これは河川を利用した経済活動がソムC域で歴代に亘って活発であったことを意味している。堰村出身の阮公朝が17世紀末に官位を得て、第一村から分村して第二村を設立したとされている（20世紀初頭阮公氏編纂家譜並びに口承伝承）。彼に関しても、その経済背景に河川交通やそれに伴う経済活動との関係も考慮すべきかもしれない。

17世紀のある時期にバッコックとその周辺域は新村設立と居住域の拡大を、盛り土などによる居住面の高レベル化で実現している（Fig.199）。これは日本の近世の集落の輪中化現象の中にもしばしばみられることである。また、この現象はハイズオン省、バックニン省、ハノイでも確認でき、紅河平原全域での現象である。筆者はこうした集落の高レベル化が、堤防の完全輪中化（馬蹄形型輪中から閉鎖型輪中）などの堤防体系の進化を意味しているのではないかと考える。こうした現象を通じて、現在に通じる集落景観ができあがったようだ。文献史からはあまり言及されない17世紀だが、紅河平原域の集落史における大きな画期であることは間違いない（詳細は第16章で論述）。

嶋尾（2000）が論じた、19世紀以降の族を祀る祠堂建設現象について一言述べておく。バッコック集落内に39カ所ある祠堂だが、最大数（10）を占める裴輝族の祠堂は、居住の歴史がその初期から存続していると考えられるソムCの西域に、その半分が集中している。裴輝族の家戸分布が把握できないので明言は無理だが、集落形成史の古い地域に居住していることが事実とすれば、当集落にかなり以前から居住している族ということになる。これは、裴輝族が19世紀初頭に族を再編する必要はなかったという嶋尾の推測を支持するものである。ただし、裴輝族正祠堂はソムAにあり、裴輝族の家譜の編纂（1841年）自体が、裴輝族第2支派であり、その祠堂もソムAにあること、ソムA域自体の安定居住が17世紀までにしか遡らないことなどを考慮すれば、裴輝族にとって、相対的に新しい居住域に裴輝族、第2支派の主導のもと正祠堂が建設されたことになり、裴輝族の中でも、第2支派勢力の勃興が大きかったのかもしれない。さすれば八尾（1998）、嶋尾が指摘する、裴輝族正祠堂に記されているように、裴輝族は、道良公を始祖とする裴族3支派の会同（1799年）を裴輝族のものと捉えているが、この動き自体分派勢力によるものであったのかもしれない。

14世紀と15世紀のXBN1-2地点での、高級陶磁や大量の無釉陶器の出土は、河川交通・運輸に結びついた経済あるいはそれらを把握したであろう裴族の発展を考えさせてくれたが、PCとDLN地点などでの19世紀から20世紀前半にかけての遺物群に対する解釈はどうであろうか？同時期の遺物を含み、革命以前の居住者が判明しているXCSC地点と併せて簡単に考察してみたい。

遺物堆積時期に相当する居住者、Lý Thúcと呼ばれた富穀(フーコック)社の里長Phạm Văn Thúcは、

遺物内容から判断するなら相当経済力のあった人のようなものである。当社所属の耕作地は全て公田であるため、原則的には耕作地の定期的割換えにより、その所有地の量的優劣は生じ得ない。この場合、里長職にあったことを考慮した方が良さそうだ。明命帝期（1820-1839年）に設けられた里長制において、その選出は、従来の社長選出より条件をゆるめ、村内の有力者から選出することを追認する意味を持ったとされている（桜井1987a：441）。その限りにおいてはPC地点の遺物群は、村内有力者の経済蓄積を表していると言えよう。ただし、その背景が、公田分給による農業以外の何であったかは今後の調査をまつしかない。DLN地点については、革命以前の所有者は地主クラスの人であったという。その人の屋敷の基礎が、発掘坑で確認された家の基礎とすれば、そこから出土した遺物群の性格も、理解できる。

これら豊かな遺物群に対して、XCSCの遺物群には、量的な豊かさは認められない。ただし、上層部で、少量ではあるが中国製などの高級陶磁も出土しており、量的多寡は出土した遺溝や発掘した位置に影響されていると考えた方が良い。当地点は1947年頃まで、1892年に中央での科举合格を果たし、ハナム省の巡撫官を努めた武善悌（Vũ Thiên Đệ）氏の屋敷地であったという。嶋尾は武族の祠堂建設（1910年）や家譜編纂なども、武善悌の科举合格後の成功を機にしていると推測しており、XCSC地点での盛り土による屋敷地造成もその頃の可能性が高い。

これら3例から理解できることは、19世紀後半というよりはむしろ20世紀になって、明らかな階層差ともいえる物質的な豊かさが生じたのではないかということである。そして、その背景にあるのは土地の大所有や官職である。この豊かさが、バックと周辺の当時の社会において、どの程度の富裕さに位置づけられるかは定かではない。ただし、村落内の富裕者の物質文化を表していることは間違いないし、それ以前の富裕度は、それほどのもものではなかったということも類推可能である。このあたりのことは、物流や市場経済全体の発展の度合いに関わってくるであろう。

#### 付記

1997,1998年度の発掘費用と遺物整理費用の一部はトヨタ財団の研究助成金（1996-7年度助成研究A：研究代表：西村昌也）を利用している。また、1999,2000年度の発掘費用と遺物整理費用の一部は文部省科学研究費（研究代表者：西村昌也）で行った。

## 第14章 キムラン研究：川べり手工業專業集落の考古学・歴史地理学からの理解

### A はじめに

Xã Kim Lan (キムラン社) はハノイ市郊外のGia Lâm (ザーラム) 県南端、紅河左岸の堤外地に位置した集落で、現在およそ5000人の人口を抱えている (Fig.200)。同じく堤外地でBắc Hưng Hải (バックフンハイ) 運河を挟んで北隣には、現在も生産が続く伝統窯業集落<sup>(1)</sup> Bát Tràng (バッチャン) 社が位置している。当社は現在、北隣のバッチャン社同様、施釉陶器生産を行う手工業集落となっている。

2000年より筆者は当社において、キムラン郷土史研究会の方々の要請を受けて、小規模な考古学の分布調査や発掘調査を行ってきた (Nishimura&Nishino 2003, 2004, 西村・西野2004)。その過程で、考古資料のみではなく隣接分野の研究も含めて検討すると、当集落の歴史地理的諸事象は、ヴェトナムの集落形成史や手工業史研究に一定の貢献ができることに気づき始めた。現在、筆者は、キムラン郷土史研究会の方達と共に、当社の歴史地理的沿革を中心とし、資料の収集や聞き取り調査などを行っている。本稿ではキムラン社の地理的概要、文献史資料と考古学調査が明らかにしてきた諸問題を合わせる形で、歴史地理的概要とそこから派生する諸問題をまとめる。また本研究の特色の一つは、北接するバッチャンとの比較である。比較は、単に地理的近接性から生じる影響関係のみではなく、両社がその形成過程において付帯していたものの違いを感じさせてくれる。できるだけ、キムラン社のみ研究にとどまらず、比較対象としてのバッチャンを意識しながら研究を進めてみたい。

### B 地理的概要

キムラン社ならびにバッチャン社は紅河本流左岸に位置している。ハノイからは直線距離で10kmにも満たず、紅河平原域内での大市場への近接性は保証されている。北東から流れてきた紅河が、流路を90度近く南西に変える所 (攻撃面) が、現バッチャン社の北域である (Fig.200)。紅河はその流路を網流的に変化させている地域があるが、当地域もその例にあてはまるようで、キムランやバッチャンの対岸にあたるLĩnh Nam (リンナム) 社やThanh Trì (タインチー) 社のあたり、つまり、紅河本流の右岸堤防を挟んだ東西両域で旧河川の蛇行流路が残した三日月湖などが多く観察される。キムランとバッチャンの間には、両社の地理的境界でもあるバックフンハイ運河が、両社の東側を南北に走る堤防を貫通して、東西に流れている。この運河はバックニン省、フンイェン省そしてハイズオン省の3省をまたいで、輪中堤防内の排水を行うために、1958年に掘削されたものである。ちなみに紅河本流において、当地域は潮汐の影響をうける感潮限界域に位置するようで、雨期の始まる直前の河水面が最も低い時期 (4月頃) には、Cá Mòi という朔河種の魚が獲れる。キムラン社は、このバックフンハイ運河と紅河本流をそれぞれ社の北縁と西縁とし、北東-南西を長軸 (2km強) として、短軸幅が

500mから900m位の面積を占めている (Fig.201)。東隣には Xuân Quan (スアंकワン) 社がキムランに並行する形で堤外地に位置しているが、アंकワン社は現在フンイエン省に属している。さて、キムラン社は現在4400人前後の人口を抱えているが、人口の大半は人民委員会など社の中心機能が分布する社の地理的中心部に居住し、8つのソム (1-8) のうち、7つがここに位置している。そして、バッチャンと境界を接する北端部には Đại Bàng (ダイバン) と呼ばれたソム 1 があり、もともと、それほど人口は多く住んでいなかったが、71年以降、紅河の洪水で村の居住地が流失し、新たな居住地を求めて移住した人が増えている。キムランには現在、寺 (Linh Ứng Tự: 靈応寺)、Đình (神社)、Miếu (廟: Miếu Bản) がそれぞれ一つずつ存在する。土地の古老によれば、少なくとも Đền があったという記憶はない。ただし、寺は過去4カ所、Miếu (廟) は4カ所あったことが記憶されているが、洪水による集落縮小、運河掘削などにより、かなりが消失している。

## C 歴史的沿革

### I 文字資料や口伝資料について

キムランに関しては、キムラン郷土史研究会の方々が収集したいくつかの文字資料・口伝資料が集落形成史の上で検討を要する。なにがしかの資料批判を経た上で、これらの資料はキムラン史の資料として公表することになっているが、ここでは参考のため、こうした資料に登場する人物を簡単に紹介しておく。

Cao Biền (高駢): 唐朝末期 (9世紀後半) の交州で総管経略使を努め、南詔軍を撃破、静海軍節度使を努め、羅城を大修築している。当社の Miếu Cả の主神の位置を占め、ヴェトナムの風水成立に重要な役割を果たしたと考えられている。高駢が伝えたと言われる風水の概説書には、キムラン自身も風水の重要地点として登場する (例: 桃木1998)。『北寧省嘉林県金關社神跡』 (漢喃院所蔵資料 4Ea7/12) では高駢がここを通過した際、桑の栽培を教えたことになっている。

Nguyễn Thạch Việt (阮石越): 現広西壮族自治区に位置する蒼梧郡広信県の出身。妻陳氏とともにキムランに居住し、仏道に入る。李高宗 (1175-1210年) の時に三教試に合格し、李朝に仕える (『北寧省嘉林県金關社神跡』より)。現在の人民委員会の西隣にある Miếu Bản の主神。

Vũ Lâm (武覽): 出身はフンイエン省 Kim Động (キムドン) 県、Bảo Khê (バオケー) 社だが、キムランに居住し、黎聖宗 (1460-1497年) の時に進士になった人物 (Ngô Đức Thọ et al. ed. 1993)。

Lê Khả Lăng (黎可朗): 黎朝開国功臣。バッチャンとキムラン両方に、居住し土地を所有していたとの言い伝えをもつ。ソム 2 には彼の墓と伝えられるものが過去にあり、そのあたりは Vườn Quốc Công (国公の庭あるいは畑) と現在でも呼ばれている。

Đinh Nguyên Hạnh (丁元亨): 当社、あるいは同じ Gia Lâm (ザラム) 県に位置し、当社からの分村である Kim Quan Thượng (金關上: 現 Việt Hưng: ヴェトフン社) の出身。1715年に進士合格。同じくザラム県ドウオン川沿いの Kim Quan Đông (金關東: 現 Yên Viên 社) を立村したといわれる (Ngô Đức Thọ et al. ed. 1993)。

## II 屯田所問題

キムランの集落史において避けて通れない歴史研究上の問題が、屯田所問題である。

黎朝聖宗期（1471年）に発足したとされる屯田所は紅河平原に30カ所を数え、八尾(2002) がその位置比定を地図上で行っており、その中に“金關所”が含まれている。そして、金關所の比定候補地に、キムラン（金蘭）とKim Quan Thượng（金關上：同じくザラム県ヴェトフン社）、Kim Quan Đông（金蘭東：Đuông 川を北に越えた、Gia Lâm 県イエンヴィエン 社）の3つが挙げられている。この問題はヴェトナム村落の土地所有制度史とも密接に絡んだ問題で、もともと筆者が議論できる性質のものではない。ただし、キムランの歴史地理的問題も絡むので、この問題に関する認識を書きおきたい。

Nguyễn Viết Hồng 氏が入手したKim Quan Thượng（キムクアントゥオン：金關所上村）の神跡では、金關所がもともと白土村にあった屯田所で、そこは金關社に接しており、金關所といわれていたとされる。洪水がひどいため、黎憲宗の景統年間（1498-1503年）に、キムクアントゥオンに移り住んだと記されている。そして、この白土村自体は現キムクアントゥオンにも存在する。このキムランの分村あるいは移村は、黎憲宗の陵墓（タインホア省藍京）に設置された追悼碑文に、帝が景統年間に堤防修築などを行い勸農に努めたという記述に連動する現象かもしれない。

ところで、バッチャンのĐềnには白土村という横額がかけられており、その古地名の存在を示している。また、この金關所の土地とされるものが、現中心集落とXóm Đại Bàng（ソムダイバン）の間、つまり堤防跡発見地（ソムボンロウ地点）あたりにあったことが古老達に記憶されており、キムランの仏領期の地図にも、Kim Quan Thượng（金關所上村）の土地として記録されている。上記事項を事実として理解するなら、キムランは15世紀末に金關という社名で、現バッチャンとの間に白土村という村があり、そこに屯田所が置かれていたことになる。この解釈は、Nguyễn Viết Hồng 氏の解釈とかなり重なっているが、氏は白土村自体が金關に所属していたと考えている。この点については、筆者はバッチャンとの集落の歴史地理関係を見極めて結論すべきと考えている。バッチャンとキムランの間で過去、領域の変動が起きている可能性があるからである。八尾（同上）は屯田所が、村落を意味するものではなく、特定の社に付された出先機関で、そこに小面積の土地を所属させていた程度の可能性を指摘している。上述の状況から判断するなら、大いに可能性のあるものであろう。もちろんなぜその社に出先機関を置いたのかが問題となる。

## III 革命以前の土地利用について

キムランの古老の記憶やフランス時代の地図資料をもとにすると、革命以前のキムランは16の xóm（ソム）があり、その大半は現中心集落に集中しているが、地形が現在 200m ほど紅河側へ張り出していた事が理解でき、この張り出し部は徐々に水流に呑み込まれ、最終的に1969年から1971年の洪水で消滅したようだ。土地所有においては、私田に対して公田比率がかなり高い集落例であったことが記憶されている。そして、28の甲が租税徴収や田土均給を行っていた。公田分布域は現中心集落から南側、現在トウモロコシなどを栽培している畑地が中心だったようだ。ただし、現在の土地利用が過去に遡るわけではない。革命以前は低域で水稻（モチ米）、中域で陸稲やトウモロコシ、高域で桑の木が栽培されていたようだ。もちろん堤外地の川砂の頻繁な堆積が起きるところであるから、水稻栽培

ができるような低所は非常に少なかったようだ。

ただし、これはキムランが堤外地に位置している場合の農業形態であり、後述のように堤内地に位置していれば、全く異なったことが予想される。

『京北風土記演国事』（1807年以前成立）には、金蘭は桑の栽培地として登場している。前出の高駢がここを通過した際、桑の栽培を教えたという伝は後世の附会の可能性も考えておかねばなるまい。

#### IV 窯業集落へ

1960年代に進んだ合作社化は農業を主としたもので、手工業面の変化を引き起こしていないようである。そして、1970年代末から1980年代初頭にかけて、徐々にバッチャンからの技術移転により、箱形窯による陶磁器生産が始まったようだが、少なくとも窯業生産開始の背景に合作社や社政権の積極的関与があったという話はまだ聞けていない。現在までのところ、こうした技術移転の主体を担った人たちはバッチャンの陶磁器生産合作社や個人経営の窯場に働きにいていた人たちが主体となったと理解している。現在、窯業は全村域で行われており、主に量販品（hàng Chợ）の碗（bát）、線香立て（bát lư hương）、建築部材などを主に生産しているが、バッチャンのように観光客向けの商品生産や美術的賞翫価値の高い製品の生産には至っていない。

#### D 考古資料が描くキムラン

##### I バイハムゾン地点について

遺跡地点は、当社の紅河河畔の旧集落のあったところに位置している。現在ソム2（旧 Xóm Chùa）には、過去紅河に張り出した川岸部分があり、1970-71年頃までに水流で流されてしまっているが、その下層部分のみわずかに残っているのが遺跡地点である。当然、この旧集落地点の居住層の露頭地は乾期しか現れず、雨期は水面下である。この居住確認面（発掘調査面）と現在のキムランの居住面は5-6m以上高度差があり、居住面が廃棄されて現在までに5-6m以上の川砂の堆積があったことが理解できるが、ほとんどは20世紀に入ってから堆積であろう。

バイハムゾン地点で、2001年3月中旬に1週間、2003年4月末から5月上旬にかけて8日間、2度の小規模な緊急調査を行った。また、ヴェトナム歴史博物館が2003年の3月に中規模の調査を行っている。2001年の調査は雨天が連続する悪条件下の調査で、遺構の面的、構造的理解において正確な調査を実現できなかった部分があるが、2003年の我々の調査では、遺跡の面的理解や遺構の構造的理解において、様々な新認識をもたらすことが可能となった（Nishimura et al 2002, Nishimura&Nishino 2004）。これらの調査で遺溝を確認した面積は500㎡以上にのぼり、旧集落地点の略史を描くための一定量の資料に達していると考えられる。Fig.202はそれぞれの発掘地点、確認区域の位置関係を表し、Fig.203は、2003年の遺構確認区域内における遺構分布関係である。

##### II 確認された遺構の種類

###### a 鑄造関係炉址

この種の遺構は16-17世紀に限定される。平面プランは円形、楕円形で、焼土層、灰層、炭化物層が交互に薄い層をなしながら幾重にも重なっている。F7のようにふいごの羽口を置き、その周辺が熱により硬化した範囲が何層にもわたって確認された例もある。具体的確認例はF7 (Fig.204)、F8、F10 (Fig.205)、F30、Lo1 (Fig.206) などである。

各遺溝からは、若干の青銅の鋳かすや青銅器片も出土しており、これらの炉遺溝が青銅（器）の鋳造に関係していたと考えられる。

#### b 銅銭を伴う土坑

F7、F10などの金属鋳造関係の炉のまわりにある土坑では、円形土坑の埋土から多くの銅銭が出土する例が確認された (Fig.213)。

#### c 礎石（柱）設置のための地業

NC2 (Fig.214)、F3などは円形土坑に瓦片、陶磁器片を砂利がわりに埋めて地盤強化を図ったものである。礎石あるいは直接柱を設置するための地業であったと考える。出土遺物から14世紀のものと判断される。

#### d 柱穴

F25 (Fig.210)などで柱を立てるための、柱穴が確認されている。出土遺物から14世紀のものと判断される。

#### e 炉址

2001年のLo2、2003年のF54 (Fig.211)、F85は、煮炊き等の調理関係の炉址と判断される。

Lo2 (Fig.212)は不整な楕円形で、F54、F85は方形である。全て、年代下限の遺物としては、12-13世紀の陶磁器類が共伴している。

#### f 建物の基礎

この種の遺構は11世紀初頭のR2遺溝を除き、他はほとんどが14世紀のものようだ。断面逆台形の溝を掘り込み、基底部で竹や木杭などを打ち込んで地盤強化を行い、そして、瓦や陶磁器片を砂利代わりにして土層と混ぜて埋めたものである。F13、F14、F44のように比較的短いもの、F20やR1のように長いものなどがある。当然、この基礎（地業）の上に建築の上部構造があったことを想定しないといけないのだが、上部構造を示唆する遺溝は何もない。ただ、礎石柱あるいは掘っ建て柱の建築が主であったなら、家を巡る壁の基礎であることは考えにくく、むしろ築地塀や門のような建築の基礎であると想定したほうがよかろう。具体的時期が確認できたものは、10世紀末あるいは11世紀初頭のR2 (Fig.208)、14世紀末のR1 (Fig.209)、F13、F14、F44、F20 (Fig.207) である。

#### g H5坑

H5坑 (Fig.215) は、ヴェトナム歴史博物館が発掘したH4坑のそばに設けられたもので、文化層の性質確認のために、4㎡程度の小規模発掘を行った。文化層自体は陶磁器片や瓦片を多く含む粘質土層である。包含遺物の年代下限は14世紀末で、各層に時間差がみられないことから、短期間に陶磁器片を混ぜながら埋土を行ったと判断される。5層以下は砂質土で自然堆積によるものかと考えていたが、11世紀初頭頃の碗が1点確認され、堆積の様子が自然堆積でないことから、居住地造成のための盛り土である可能性を考えている。従って、11世紀初頭頃にはバイナムソン遺跡の北東側範囲がH5坑まであたりで、盛り土による造成が行われ、さらに14世紀末に盛り土による大きな造成（拡張）があったと理解される。

#### h H2坑

ヴェトナム歴史博物館による発掘で、地山まで掘り込んでいるが、文化層は確認されず、若干の木（流木？）が確認されたにとどまっている。これにより、バイナムソン遺跡の南東側範囲がH2坑に及ばないことが理解できる。

#### i 遺構形成面

上述の遺構群は時期の区別なくほぼ同じ面で確認されており、川の氾濫、堤防の決壊等による大水による、堆積上層部の流出も多少起きているが、時期の遅い遺構にも、構造上、上部を大きく失ったものと考えられるものがさほどないため、もともとの遺構形成レベル面において、遅い時期と早い時期の遺構間のレベル差が大きくなかったと判断される。また、発掘地点より少し北側の遺溝が露頭していない所で、筆者は14世紀の堆積層と16-17世紀の堆積層間に30-40cm程度のレベル差しかないことを確認している。つまり、遺跡利用期間において、堆積、盛り土による遺跡形成面の上昇がさほど無かったことを意味している。このことは後に触れる輪中型堤防の建設に伴う高レベル化現象とは対照的な現象である（Nishimura and Nishino 2004, 西村・西野 2004）

### III Xóm Bông Lau(ソムボンロウ) 地点の堤防址

さらに興味深いことは、古堤防がバックフンハイ運河と発掘地点の中間で確認できたことである（2004年3月調査資料：Fig.201, Pl.8）。堤防跡は木杭と板を組み合わせた柵状のものを水流方向に直交するように土中に連続的に埋め、堤防土の安定を図ったものである。現河川流路に沿って100m以上の長さで確認され、その方向から推測するなら、バイナムソン旧集落地点と紅河の間を堤防が走っていたことが推測可能である。またその方向を北に延長するなら、バッチャンの集落より西に堤防が位置していたことが予想され、過去に金蘭の土地が、バッチャンの西側に存在したことに符合する。共伴する陶磁器で判断すると、この堤防の存在期間は17世紀末か18世紀から19世紀の間と考えられ、キムランが最低でも17世紀末か18世紀からある期間、堤内地に立地し、バッチャンは堤外地に立地していたことが理解できる。また17世紀から18世紀においてバッチャンの陶磁器生産域は面的に川沿いに現在のキムラン集落北部（旧Xóm Đại Bàngの川沿い北域）に浸食する形で拡大していることが、モノ



ハラの分布などから確認できる。この現象は堤防建設によるキムランの堤内地化現象と表裏一体の現象であるようだ。第16章で詳述するが、17世紀末か18世紀の堤防建設が輪中型堤防とすれば、もともと排水域としてしか機能しなかった低域が堤内地化し、そこが農地（水田）として活用できるようになったことを意味しており、その水田は公田地帯であった可能性がすこぶる高い。筆者は、考古学調査と過去の土地所有形態から、17世紀におけるナムディン省のバッコック、フーコック、タンコックでの輪中型堤防建設に伴う公田地帯の成立の可能性を指摘した（Nishimura&Nishino 2002, 西村2004b）。これと同様な解釈が、キムランにも当てはまりそうである。

堤防建設は小規模の社会集団が行えるものではない。社などの集落組織単位、あるいは、それ以上の大きな集団・組織を動員することによって可能となるものであろうから、その建設が公田造成とつながっていることは十分納得できる。

ただし、この堤防は最終的には、18世紀から19世紀のある時点で、破堤をして放棄され、キムランはバッチャン同様、堤外地に位置することになる。この時にキムランは、水田耕作が非常に困難となり、堤外地に適した桑の栽培に主生業を切り替えたのではないかというのが筆者の推測である。

#### IV Cạnh Miếu Chiền (カインミエウチエン) 地点

高駢配下の部将であるChắc Linhを祀るMiếu Chiền（ミウチエン）は、現キムラン社の中でも最も標高の高い区域の一つに位置している（Fig.201）。ミウチエン（1960年代初頭破壊）の建築基礎が現在の畑面に残り、地形図では標高が10mを越えている。聞き取りでは昔、当区域は現河水面の方へ大きく張り出していたが、パイナムゾン地点同様、紅河の水流が大きく削り取ってしまった。現在は、Miếu Chiềnから川縁の断崖（Cạnh Miếu Chiền 地点）まで約100mを残すのみだが、1948-49年以前は原河水面方向へ200-250mは張り出していたという。過去には高駢を祀るMiếu Cả（ミウカー）があったが、移動してより下流の200m離れた所に位置していた。しかし、共に現在は位置確認不可能である。また、高駢配下のもう一人の部将Chu Việtを祀るMiếu Thượng（ミウトゥオン）は、ミウチエンから上流100mの所に位置していたが、同じく河に流され、現在は位置が確認できない。

ところで、Cạnh Miếu Chiền（カインミウチエン）地点の断崖面状に残った文化層（Pl.7）は、露頭観察では少なくとも、8m以上の厚さで確認できる。包含遺物は李陳朝期から16-17世紀のものまでが多く確認され、特に陳朝期のものが最も多い。また、文化層中には2-4cm径の玉砂を用いた整地層あるいは版築層、さらには方形地業が規則正しく分布しているのが観察される。玉砂利を用いた方形地業（80×80cm）は李朝期建築の特徴で、同時期の瓦片も多く観察される。地業の芯間距離は5mあるいはそれを越えるものもあり、大型建築の可能性がある。包含遺物から筆者は、この建築遺構は李朝期に遡る可能性大と判断している。この整地層あるいは版築層間には、大量の瓦を包含した層もあり、大規模な建築で、李朝以降複数時期に亘っていると推定している。

また、キムラン郷土史研究会の踏査時には、陳朝期の外鞘を再利用して造った井戸が河水面下で、発見されている。

このようなCạnh Miếu Chiền（カインミウチエン）地点で確認できる大規模建築の遺構は、最近まで残っていたキムラン社の宗教施設Miếu Cả（ミウカー）、Miếu Chiền（ミウチエン）と何らかの形で繋がっている可能性がある、と筆者は推定している。

## V 遺物の分析より

### a 遺構の年代分布

最も年代決定の行いやすい施釉陶器の碗類を基準にして、年代頻度を調べると、8-9世紀から17世紀後半にかけて、15世紀以外はほぼ連続した居住史が確認されている（Nishimura&Nishino 2004）。遺溝としては11世紀から17世紀の建築のための基礎が多く確認されている。特に14世紀に大型建築を含む建築基礎や地盤造成を行っていることが明らかになってきた。陶磁器生産に関しても、13-14世紀の間において、発掘地点周囲で施釉陶器を生産していたことが肯定できる。ただし、15世紀の前半のある時点で、居住痕跡が非常に微弱となる。そして、16世紀のある時点で再び居住が活発化するが、陶磁器産業自身は20世紀末に至るまで復活することはなかったと考えられる。ところで、16世紀以降確認できる遺構群は、銅銭を含む土坑と炉址である。炉址は現在までのところ16-17世紀のものしか確認されていない。そして17世紀末頃で、発掘を行った旧集落地点は放棄されている。

### b 陶磁器生産具と生産失敗品、同一型式多量出土品

バイハムゾン地点では、外鞘、トチン、ハマなどの窯道具が出土している（Fig.217-1～7）。また、溶着品も破片ながら出土している。さらには出土遺物の中で13-14世紀の施釉陶器はかなりの割合で、焼成不良で釉薬がガラス化していない例や、焼成温度・時間が適正でなかったために器形が湾曲した不良品（Fig.216-1）が確認される。この中には底部に穴をあけ、引っかかりの場所を作って、窯から引き出すことを可能にした釉薬の色見具と判断されるものも含まれている（Fig.217-3）。また、西野（2006）の分析にあるように、13-14世紀の出土碗皿類に技法的共通性や型式学的共通性が高いのも、当遺跡の生産品が含まれているという仮説の大きな根拠である。

また、生産遺跡の場合、同一型式で、量的に多く出土するという現象がしばしば確認されるが、これも、上述の13-14世紀資料に多く見られる。さらに、16世紀末と考えられる白磁印花（西村・西野 2006）も、多く出土しており、型式的均質性が高い。当型式生産に用いられた三足トチンも1点出土している。ただし、窯着品や焼成不良例はなく、筆者らは北隣のバッチャンで生産されたものが持ち込まれた可能性が高いと考えている。

さらに、前出例ほどの数は多く出土していないが、輪状釉剥ぎ白磁碗（15世紀前半：西村・西野 2006）の内面中央に “官” あるいは “窯” 官らしきものを印字したものが、複数確認されている（Fig.216-5）。これは通常の居住集落では出土することが非常に稀な官窯製品と考えられる。現在までタンロン王城、西京（第2首都）とされたタインホア省の藍京遺跡などや、ハイズオン省のNgói（ゴイ）、Chu Đậu（チューダウ）などの陶磁器生産遺跡（第16章参照）でしか確認されていない（西村・西野2006）。時期的には、黎可朗の生存時期とも重なることから、黎可朗の食田あるいは私邑的存在、あるいは、バッチャンと並び官制生産集落としての管理をうけるような存在であったのかという疑問が浮上する。

### c 搬入陶器

中国陶磁 9-10 世紀の越州窯系、10-11 世紀の白磁、14 世紀の龍泉窯系青磁を挙げることができる。また17世紀の中部ヴェトナム産の無釉高火度焼成陶の長胴瓶（Fig.217-8）も出土している。当然これらの陶磁器類は、当遺跡での交易活動によりもたらされたものであろう。

#### d 銅銭などの青銅製品

銅銭の大半は開元通寶であったが、それら以外にも宋銭、ヴェトナム銭が若干例確認された。14世紀以前の遺溝では、銅銭は非常にわずかしき出土しておらず、16-17世紀の遺溝に多くともなっている。特に、鑄造関係炉址遺溝のまわりの土坑から多く出土している。出土遺物では明確に確認できていないが、同地点でのNguyễn Việt Hồng 氏収集資料のなかには、溶解しかけた青銅片、あるいは折り曲げられた鉛銭、溶解時の青銅かすなどが確認される。

従って、筆者は青銅鑄造のための原料ではなかったかと考えている。特に、銅銭も含め、出土・採取された青銅器はほとんどが小破片で、銅銭以外は器種的なまとまりも少ない（Fig.217-9～12）。くず銅として集められた可能性が高いと考える。くず銅を集め再溶解して、青銅の地金を作っていたのではないだろうか。鑄型が全く出土していないことが、当仮説に対する反証かもしれないが、伝統的青銅器鑄造・鍛造村であるバックニン省Đại Bái（ダイバイ）村では、砂地に木型をはめ込んで定型抗をつくり、溶解銅を流し込んで地金を生産している例があり、決定的反証とはならないと考えている。

### E 考古資料と関連資料から復元するキムラン史

出土資料で最古の時期のものは後漢期の陶器や磚である。そして、Nguyễn Việt Hồng 氏のコレクションには南北朝並行期の資料もわずかではあるが存在する。ただし、この時期までの遺物量は微々たるもので、本格的居住は行われていなかった可能性が高い。出土例数が比率的に増加するのが8-9世紀以降であろう。実質的な当集落の安定居住開始の時期と見てよい。ただ、これに高駢の伝説を重ね合わせるのは強引すぎるが、注意を要するのはザラム県や西隣のパックニン省トゥアンタイン県は、高駢関係の伝承や関係遺跡が多く残されている。また、実際に高駢が、トゥアンタイン県のルンケー城（文献史の龍編城）近くと考えられる土燹陵墓（ルンケー城東郊）まで行っている記述が、『越甸幽霊集（13世紀末成立）に残されていることから、キムランを含む当地域が、高駢の時代に開発が進んだなどという可能性は大いにある。これは唐朝の支配中心、安南都護府がハノイにあり、その周囲を囲む地域として重要度が高かったということも関係していよう。キムランも当時の政経中心地の衛星集落的位置があったのかもしれない。

R2（年代観は第5章参考）やH5の形成年代を参考にすれば、11世紀初頭（李朝期初頭か？）に、バイナムゾンの遺跡の大造成が行われている可能性がある。また、Cạnh Miếu Chiền 地点の建築遺構の最初期のものが李朝期とすれば、李朝期になって、集落の大造成あるいは新建築ブームがあったと考えてよい。Nguyễn Việt Hồng氏収集資料には李朝期の観音菩薩像があるし、Nguyễn Thạch Việtが当地で仏道に入っていることなどを考え合わせれば、その中には仏教寺院なども含まれていたと考えるべきである。そして、13-14世紀には当地で陶磁器生産が活発化している。これは1980年代以降のよ

うに、隣接地のバッチャンの陶磁器生産が活発化し、キムランでも始められた可能性がある。陳朝期にはしばしば、政治権力と陶磁器生産が結びついている例（Nishino&Nishimura 2004、Nguyễn P.C. 2004、西野2002a）が多いが、キムランではそうした伝承資料がないのも、集落レベルの組織が権力と結びつかずに、バッチャンからの影響下で、生産を始めた可能性で説明できる。高級品（Fig.216-1～4,6）は出土しても、官窯的な製品がこの時期のものにないことが、そのことを説明している。かなり商業指向が強かったことは、輸出仕様の青花や鉄絵の碗皿が出土していることから推察可能である。そして、14世紀末に再び集落の大造成を行っている。このときにはバイナム地点に各種の建築を建てたようだ。

15世紀の前半のある時期までは、まだバイナム地点に居住が行われていたようだが、それ以降、16世紀前半頃までは、ほとんど人が居住していない可能性が高い。15世紀前半の官窯製と考えられる陶器資料は、当地あるいはバッチャンが、Lê Khả Lăng（黎可朗）などの黎朝政権有力者と関わっていたことを示しているのかもしれない。14世紀に活発であったキムラン・バッチャンの陶磁器生産をみて、当地を経済的根拠にしようとしたことも十分考えられよう。また、この疎住期間の間に、Kim Quan Thượng などが伝える黎憲宗年間の分村が起こっており、洪水等の影響で、生業も含め集落の性質が変わった可能性がある。

16-17世紀末までは、くず銅などを集めて、青銅の地金作りが、集落の生業の一つであったと考えられ、陶磁器生産の可能性は非常に少ない。そして、17世紀末あるいはそれ以降、集落を巡っていた堤防が破堤し、提外地化することにより、桑の栽培と養蚕が集落の主生業として浮上したものと思われる。この状況は20世紀半ばまで続き、そして、1980年代から、バッチャンの影響のもと、再び陶磁器生産が始まっている。このように、キムランの生業変化を見ていくと、陶磁器生産（13-14世紀）、金属器類の生産（16-17世紀）、提外地に適した桑の栽培・養蚕（17?-20世紀前半）、農業（合作社時代）、陶磁器生産（1980年代以降）と、生業が二転三転する姿がここでは描き出せるわけだが、ヴェトナム集落の典型的パターンの一つと思われる。

## F ヴェトナム窯業集落の中での位置づけ

北部ヴェトナムでは、窯業集落は川べりの提外地に立地していることが多い。バッチャン、バックニン省 Cầu（カウ）川沿いの Thổ Hà（トーハー）や Phù Lãng（フーラン:西野1997）など、現在あるいは20世紀末まで生産が存続した集落ばかりでなく、ハイズオン省の Thái Bình（タイビン）川沿いの Chu Đậu（チューダウ: Bùi M.T. et al. 2002）や Mỹ Xá（ミーサー）、Sắt（サット）川沿いの Hợp Lễ（ホップレー: Bùi M.T. 2001）、バックニン省の Ngũ Huyện Khê（グーフエンケー）川沿いの Đường Xá（ドゥオンサー: Nishimura&Bùi M.T. 2003）などの過去の遺跡と化した生産地の場合もしかりである。

こうした窯業生産集落に共通した地理的特徴は、しばしば輪中型堤防の提外地に立地することが多いことである。具体的には、提外地は洪水時などの水位上昇に対応するため家を築く基礎を高くしたり（水屋）、あるいは地盤を盛り土などにより高くすること、提外地では川面に接していることから、運送業が発達しやすいこと、提外地の沖積土壌帯は土壌や日光条件の点で、水田耕作ではなく桑の栽培などに適していることなどを列挙することができる<sup>13)</sup>。

キムランとバッチャンの理解も、堤防との関係が鍵を握っている。前述のようにキムランは17世紀末から19世紀の間のある一定期間、堤内地に立地していたと考えられる。しかし、バッチャンでは、筆者のサーベイで17世紀以降の大規模な盛り土層が確認できるため、堤外地における水位上昇に対応したことが理解できる（西村 2004b）。従って、17世紀以降のある期間、両集落は堤内地と堤外地という全く異なる地理環境にあったこととなる。

以下、バッチャンとキムランの比較を簡単にしてみたい。

バッチャン社は陳朝期には確実に史料に登場し、以後各史料や伝承に名をとどめ現在にいたっている（Phan H.L. ibid.）。陶磁器生産の直接証拠は、現存する紀年銘陶磁器資料では16世紀後半までしか遡らないが、鉢という社名は陳朝まで遡ることが確実であるから、陶磁器生産の歴史はかなり古いものと見てよい<sup>③</sup>。一貫して堤外地に立地していたバッチャンは、その陶磁器生産を連続して行ってきた可能性が極めて高い。しかし、キムランのように常に生業を変える必要がなかったのは、その産業の高度な専門性のみではない。堤外地<sup>④</sup>としての立地を利用した商業拠点としての性格がその背景にはある。17世紀前半、日本との朱印船貿易時代にバッチャンの商家阮家（阮官甲：Nguyễn Quan Giáp）に、黎朝朝廷とオランダ、日本の仲介として活躍した貿易商和田理左右衛門の娘が嫁している（永積 2001、ファン 2002、西野 2004）。Nguyễn Quan 氏一族はバッチャンのなかでは歴代官僚を輩出した有力な家である。また、バッチャンは歴代9人の科挙合格者を輩出しており、これもヴェトナムの村落にあっては突出した多さであり、0名ないし1名のキムラン、あるいはまったくいないフーランなどとは際だった対照である。ところで、現在のバッチャンで、各窯元の出店を巡り歩いて、しばしば出くわすのが、バッチャンの製品のみならず、他地域、特に南部のより品質の高いデザインの変った陶磁器を混ぜ売りしていることである。これはバッチャンが陶磁器の市場としての機能を果たしていることも意味している。バッチャンの古老は、彼らの生業が施釉陶器やレンガといった焼き物の生産だけでなく、魚醤やビンロウ樹の実を集荷して売りさばいていたことを記憶している。クアンニン省、タインホア省やゲアン省の船が商品を運び込み、キムラン社とバッチャン社の境界付近（バックフンハイ運河付近）船を乗り付け、かわりに陶磁器を船に卸していたようだ。このことはGourou（1936）も書きとめており、集落の女性がおおがかりに商売活動を行っていたようだ。バッチャンの革命以前の生活では、女性が生産や商売の前面に立ち、男は学問をしていればよいという風潮が高かったという。陶磁器生産も周囲村から人を雇って、生産管理をするのがバッチャンの人間には多いようだ。その中にはキムランからの出稼ぎも多くいたようで、後に1980年代前半、キムラン等のバッチャン周囲の集落で窯業が興隆する背景になっている。

こうした生産・経済活動の条件下、バッチャンは陶磁器生産と流通を時代の要請に応じて、巧みに操ることができたのであろう。これは窯業集落、ひいては手工業集落の生産活動の存続・廃業を理解する一つの鍵である。特に、そこには女性の経済活動の役割が大きく関係していそう。伝統的に土器・陶磁産業では、女性の労働が具体的生産活動のかなりを担っている場合が多い。もし、女性労働力が他村からの雇用などにより直接生産活動から解放された場合、その労働力が他の経済活動に向くことは、ヴェトナムでは想像にたやすい。ネットワークと女性労働のあり方が、集落の生存戦略を規定しているとも見受けられる。こうした流通が与える生産への影響は西野（2004）がフーランの20世紀史において詳しく研究されている。ところで、流通が与える影響は他にも見受けられる。バッチャ

ンやキムランでは現在、陶土をヴィンフック省の **Đức Bắc**（ドゥックバック）社などから移入しているが、この陶土を運ぶドゥックバック社の人々は陶土輸送で得た人間関係をもとに、バッチャンやキムランの陶磁器製品を全国に売りさばく卸し・流通業も行っており、その販売網は遠くラオスまでのびている。キムランではバッチャンでの陶器製造業での雇用経験を通じて、1980年代前半から陶磁器生産が始まっている。最近では中国陶磁の流通業者を通じて、中国人技術者を招聘して、陶磁器の素地の改善に取り組むものも出現している。これらは生産と流通が絡み合っ、生業変化を引き起こしている傍証であろう。バッチャンとキムランも対照的な存在だが、同じ提外地に立地したフーランも、さらに違った性格を見せている。西野（1997、2002b、2005）の調査ではフーランは少なくとも陳朝期以降、窯業を連続して行っており、窯業が断続した可能性は少ない。しかし、バッチャンのように流通業や商業が発展していた様子は見られない。このあたり、窯業あるいは手工業に対するこだわりが、三者三様で異なるようで、集落の性質の違いを表している。こうした違いは歴史的形成過程をもう少し明らかにしないと理解できそうにない。今後の研究課題である。

#### 謝辞

キムラン研究はNguyễn Việt Hồng 氏（68歳）主宰で、Nguyễn Văn Nhung（72歳）、Nguyễn Văn Viện（64歳）、Nguyễn Tiến Cung（65歳）、Nguyễn Văn Lanh（58歳）各氏が構成するキムラン郷土史研究会の方々との共同研究活動を通じて得られたものであることを明記しておく。また、バッチャンの聞き取りに関してはNguyễn Văn Viện 氏のご協力を頂いている。

#### 注釈

（1）ここでは窯業村、手工業村などの村落をイメージする用語は使わない。理由はバッチャンやトーハニーの場合、伝統的生業に水稻耕作はほとんど存在せず、手工業や商業を主生業としている。また集落形態も特異で、家々が狭い範囲で密集している。このようなあり方は、とても村落と呼べる代物ではなく、日本の中世史などで提起されている都市（例：網野2001）に近い性格のもので、少なくとも“マチ”として捉えなければならないのであろう。自戒をこめて記すが、ヴェトナムの集落研究において、*xã*あるいは*thôn*と行政区分されている集落を、アプリアリに村落として決めて研究している例が、人類学や歴史学には多すぎるようだ。こうした行政単位は為政者側の認識が主たる根拠であって、決して集落の実体を表すものではないから、研究者が主体的な分別を行っていく必要がある。

（2）提外地が与える集落への性質は、窯業村のみにとどまらない。例えば、バックニン省トゥアンタイン県のドゥオン川の有名な渡しがあった**Phố Hồ**（フォーホー）の西隣りに版画生産で有名になった **Đông Hồ** がある。この村はかつて現在の堤防より外側に立地していたもので、洪水により現集落に移ったものである。旧村地点は現在レンガ工場と化し、以前の村の居住堆積層を全くとどめないが、1999年頃まではこの広大な川岸で、4 m以上の文化層が確認でき、そこには2世紀から19世紀に至る大量の陶磁器類が包含されていた。その中には高級ヴェトナム陶磁や中国陶磁、さらには運搬に使われる無釉陶器類も含まれていた。これらは当地域が船着き場、あるいはそれをベースとした商業地であったことを示している。川上（2002）が聞き取った **Đông Hồ** の生業像には、農業が洪水の影響により止めざるを得なかったとの理解が込められているが、旧集落の立地や遺跡のあり方をみるなら農業自体を生業とはせず、“マチ”的な集落であった可能性が高い。

(3) Phan Huy Lê (1995) は現バッチャンの起源に関して、二つの説を引用している。一つは、北宋代に3人の太学生が中国に朝廷の使命を帯びて出かけ、その帰路、広東の韶州に嵐で足止めを喰った。その時に窯場の見学をし、その技術を学び帰国後、故郷の人たちに伝えたというものである。Hứa (Cáo) Vĩnh Kiêu がバッチャンへ、Đào Trí Tiến が Thổ Hà (トーハー) へ、Luu Phương Tú が Phù Lãng (フーラン) へ伝えたという。もう一つは Bò Bát (ボーバット) よりの移住が起源であるという説である。Bò Bát の位置に関してはタインホアとニンビンが挙げられており、ニンビンに関しては Yên Mô (イエンモー) 県の旧蒲川 (Bồ Xuyên : ボースエン) 社や旧白鉢 (Bạch Bát : バックバット) 庄などで、過去に陶器を製造ししという氏族や伝説の存在を紹介している。

筆者も当社領域内にあるマンバックという遺跡の調査時に、いまでもバッチャンからの氏族のお参りがあることを聞いた。また、当社には陶器製造者が現在も若干数存在し、さらには、その痕跡となる考古学的遺跡の存在もほのめかしているが、これに関しては最近の踏査 (Bùi .M.T.& Nguyễn.C.T. 1999) により否定されている。当地は古都 Hoa Lư と全く関係のない海岸部に近い平野部であり、居住の歴史自体、新石器時代の旧海岸域での特異な居住を除いておそらく陳朝期以前の居住は確認できないところである。ただし、上述の旧蒲川 (Bồ Xuyên) 社や旧白鉢 (Bạch Bát) 庄の祖先が、陶磁器生産に絡んでいた可能性は否定できない。筆者は以下のようなシナリオを推定する。ホアルーからタンロンに都を移した際に職人が移住したものの、生産者の全てではなく、一部はニンビンに残り、彼らはやがて陶磁器需要の高い都城の消滅により、陶磁器生産を止めたであろう。一方、海岸部に発展するデルタ地形を持つニンビンでは農業開拓デルタ地形の形成に伴い徐々に海岸方面への居住進出が可能とする。陶器生産を止めた彼らもやがて農業をベースとした生業となり、現在の海岸に近い居住地に落ち着いたのではなかろうか。

また、「永寧場」という銘印の入った磚がハノイ都城遺跡や陳朝期の重要建築遺跡 (陳朝の副都、天長府が位置したナムディン省 Túc Mặc (トゥクマック) 遺跡群など) で確認されている。陳朝史になぞらえた場合、永寧場はこの磚の生産地を示していると考えられる。バッチャンには Nguyễn Ninh Trảng (阮寧場) 氏一族が Thanh Hóa より一族を連れて移住してきた伝説を伝え (Đỗ.T.H. ed. 1989) , 実際に寧場という甲も存在している。Bát Trảng (鉢場) 自身が、永寧場であった可能性も考えられ、そうすると陳朝のためのレンガ製造地としての役割があったことになる。

(4) 『大越史記全書』によれば紹豊12年 (1352年) に鉢 (旧鉢場社) と塊 (旧土塊社) で破堤が起きたことを記している。土塊社は鉢場社の北約2kmに位置しており、現地形では集落は旧堤防上と堤防内の境目に位置している。この堤防道は現在のバッチャン西側の堤防道に続いており、この時代、既にバッチャンが堤外地に位置していた可能性すらある。